月刊ナイトバグ HERE COMES A NEW CHALLENGER！型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2010年 7月号
特集「挑戦」
テーマ曲“地上の流星”プロジェクトひぇX
注目企画
プロジェクトWriggle
～6月4日
リグルリレー
に挑戦～
読切り作品
SS :Salka/くろと/社 蛍夜/
漫画：クロツク/言示弄/
秋水/キッカ/猫屋敷/
イリイチ/くらげん/
千C(夜騎士)/豆板醤
連載作品
SS :如月翔/壁々/夏樹 真
漫画：Step/草加あおい/
ひどぅん/羅外/ぼこ/
怒羅悪

こんにちわ！
今月のテーマは「挑戦」なので
カラー漫画に挑戦してみたよ！
でも前にも
カラーで描いたよね
作．くらげん

月刊ナイトバグ　2010年7月号

Cover design　小崎

目次 (3p)

『 深緑との戯れ 』　NIGA

絵本的な感じを目指しました。pixiv・mixiにも載っけているので興味のある方はハンドルネームで検索してください。

『蛍の観察会に行きたかった』　貴キ

蛍は長年見に行ってないのでまた見に行きたいなぁ。

『リグルだョ！全員集合!』　残虐非道の貴公子

今月号のテーマの方にしようかとも思いましたが。構図に挑戦した反面、塗りが微妙になってしまったので通常イラストにしました。リリカはいつもどおり目、閉じてます、ハイ。

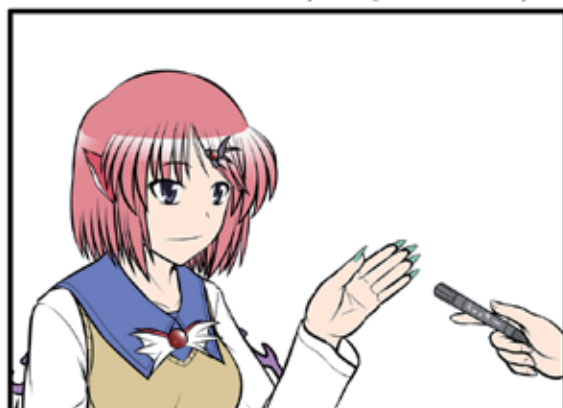
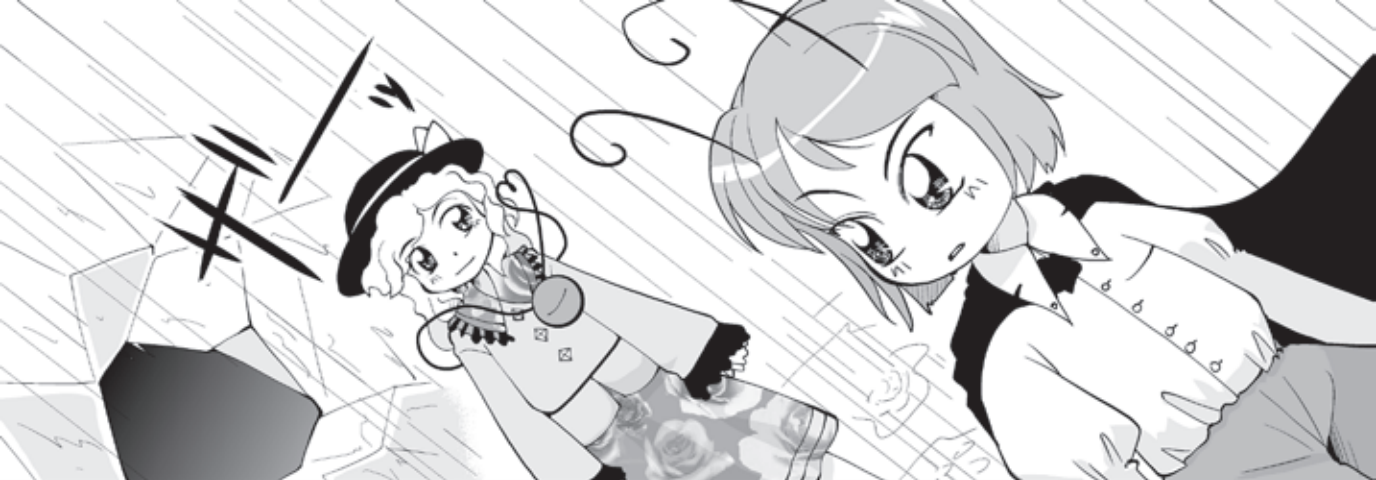
『ノートに書いた落書きがそれなりにうまく行ったから仕上げてみた』　熾天使

去年の10月号以来の投稿です。まぁ、タイトルの通り。本能の赴くままに仕上げてみた。そして付けて n (ry
穿いて n (ry

ナイトバグは寝てるだけ

作：言示弄

ちょっと!! このお肉 蟲が付いてる じゃないのよ!!
仕様です
完っ全に バグ利用 じゃないの!! 通報しました!!
店の信用が… 下がる…
店長
誰が？ で、何？
廃棄品（ロス）貰ってきます
お腹壊しても 知らないわよ？
本望

おっもち
帰りyyyyyyyyy
zZZ

※風穴の入り口

ホタルマントの妖怪少女（後編）

Step

（前回のあらすじ）雨宿りのため訪れた地底の入り口で、リグルは偶然古明地こいしとすれ違う。その際こいしの「無意識を操る力」を意識を持たない使い魔の蟲によって破ってしまう。そんなリグルに興味を抱いたこいしはリグルをペットにしようと挑発する。そしてリグルはその挑発にのってしまったっていうか前編を見て下さいお願いします

※1虫は動かないものと風景の区別がつかない

また見破られたッ!?

でも雨で蟲(バグタイプ)を使った弾幕は効果ないって自分で言ってたじゃない? ※2

※ドロチラ

ペシーンッ

しまったぁ!!

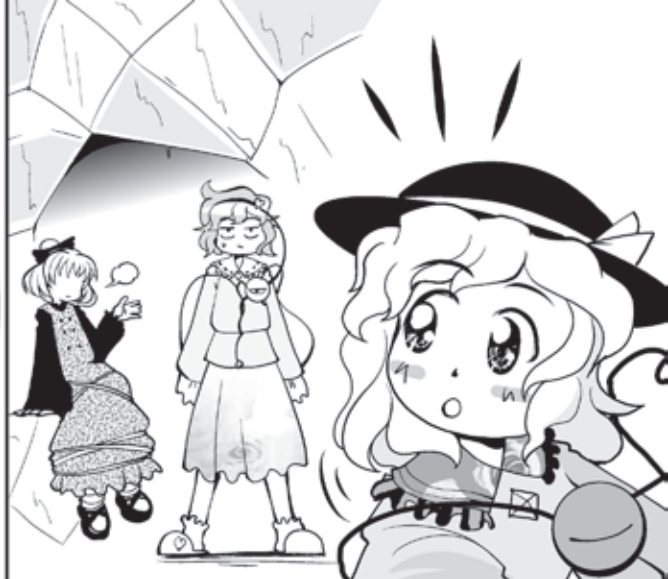
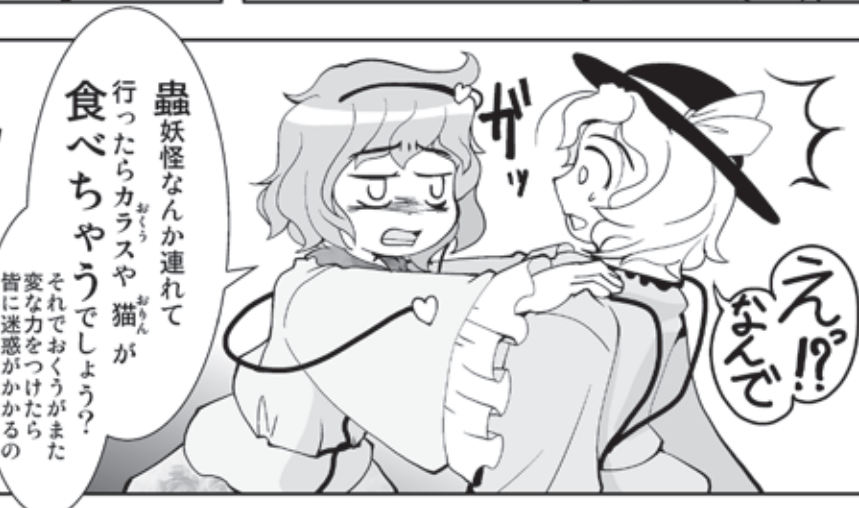
ズッ

※2 Grimoire of Marisaとバグタイプの定義が違うのはスルーでお願いします

そんなことより帰ってお風呂に入りましょう
土蜘蛛さん呼んでくれてありがとう

はーい

マァ…イイカ

……なんだったん？

新しいことを思いついたなんて思っても、殆どの場合、
誰かがどこかで先にやっているものである。
リグル！新しい遊びを思いついた！
おおうどんなの？
ビューン
ま○こにち○こ入れて前後に動かして遊ぶの！
ドやッ!!
あーその遊びならさっき魔理沙とアリスがやっていたよ
そっか…
しゅん..
虫とマルキューゴールド2
作：羅外

東方茶湾虫

クロック

クイズ！むしむし⑨！司会は私、リグル・ナイトバグ！そして
あたい、きょうから けいおん せいしゃ
チルノさんです！そして今夜の挑戦者は・・・っ！

森の魔法使い！霧雨魔理沙さんです！
ZUN～
やぁ、ところで私の解答台が無いんだが…
こうなれば新しいのを一丁いただいてだね…
スタッフー！直ちに新しい解答台と鉄拳制裁を！

それでは第一問！蛍と夜露の関係とはなんでしょう？
…
答えをフリップにお書きください！どぞーっ！
じゃかじゃんっ！

ところで私のフリップが無いんだが…
こうなれば新しいの
バサバサ
バサバサ
こいつ いけしゃあしゃあとっ！

クイズ！むしむし⑨！
司会は私、リグル ナイトバグ！そして
チルノさんです！ そして今夜の 挑戦者は・・・っ！
あたい つまらない
ギャラって何？ それより私は 米か小麦を
博麗神社の巫女 博麗霊夢さんですっ！
第一問！ 「苦虫を噛み潰す」という 比喩表現がありますが どういった意味でしょう？
ちくわの上はどちらかで悩むチルノ
えっ
苦くとも噛める って事は少なくとも 食用になりうるって事ね！
今そういう意味で 言ってませんからっっ！
ゴゴゴゴ
今までどうして 気が付かなかった のかしら……
ズズズ
ちょっ 何ですかその目はっ 言っときますが 全部が全部 食用では無いんですからねっ！
こんな所に 食糧難を 乗り切る策が あったなんて…
!?
近ぇ その顔っ！
守矢神社からきました 東風谷早苗です！
今日は よろしくおねがいしますっ
ワー
パチパチ
よかった… マトモそうだ…
え-、早苗さんは 守矢の信仰を 集めるため日々 布教しておられると…
はいっ！
守矢の二柱である 八坂様と洩矢様と供に 日々を尽くしております っ！
今日は 来てもらっています
神やっすい席にいるなぁ！
一般席
サナエー!!
不正解だと 神罰が下ります
さぁ、守矢のためにも 良き采配をっっ
しれっ
こっ こいつっっっ！

東方茶湾虫

終

「…………」
結局、あの後自力で動くこともできなかったリグルは、ルーミアとチルノに抱きかかえられてこの場所に連れてきてもらった。山奥にある、小さな泉。去年の秋の終わり、一緒にいこうと約束した、あの場所に。
それからずっと、朝日が昇り、湖に差し込む木漏れ日が徐々に変わる様を、ただリグルは眺めていた。ここ最近のオーバーワークに加え膨大なダメージを受けた体で、無理に動こうとも思わなかったし、たとえ動けたとしてもリグルに動く気はなかった。
ただぼんやりと
それでも真剣に
ひたすら一途に
あの子を想っていた。

「リグル―」
だから、ルーミアが自分に会いに来てくれた、ということにも声をかけられるまで気づかなかった。
「ん…ああ、ルーミア」
「体、どう?」
「まぁ、楽にはなってきたよ。今はもう少しのんびりしていたいかな。」
「そう…」
「ルーミアはどうしたの?なんか用?」
「……あの子のことなんだけど」
「・・・・何かな?」

＊＊＊＊

「…………」
ほぼ時を同じくして、霊夢は眠い目をこすりながら、永遠亭へとたどりついた。結局あの後、霊夢は人里を丹念に回ったあと、住民への今回の妖闇の説明をした。霊夢自身が持つ情報は伏せて、ルーミアが悪戯程度の気持ちでやったものだ、と。眠気に関する説明は曖昧になってしまったが、そこは慧音が珍しくうまいアドリブを効かせてくれた。
そして、慧音と別れたあと、霊夢は単身永遠亭へと飛んだのだ。人里を丁寧に調べた結果得た、どう考えてもありえない、否、あってはいけない違和感。その答えを得るために。
「おはよう、霊夢」
中に入ると、永琳が玄関に立っていた。まるで霊夢が来るのを見越していたかのように。
「もうそういう時間でもないわね。それに私寝てないから、すぐにでもおやすみと言いたいわ。」
「そう、じゃあ永遠におやすみ、霊夢。」
「一言余計ね。それに『言いたい』んであって、実際は言えないのよ。」
挨拶もそこそこに、頼んでもいないのに永琳の自室へと連れられた霊夢。その態度に、霊夢は自身の考えに確信を得る。
「…さて、何か用かしら?」
「…今回の人里の異変、あんたも噛んでるのよね?」
「ええ。多分貴女のことだから、犯人から直接もう聞いてるのでしょう?私も協力者だと」
「そう、なら話が早い。」

＊＊＊＊

その質問は、あるいは知る必要も、確認する必要もないことなのかもしれない。否、必要がないばかりか、はっきりと知れば辛くなると、二人は確信していた。
それでも、聞かねばならない。そう覚悟したからこそ、二人は来た。
「あの子は―」
「あの妖怪は―」
一拍おいて、相手の眼を見て。二人はその質問をぶつけた。
『実は…人間に取り憑くことなく、消えたんじゃないの…?』

ずっと一緒に～　∞

著者：壁々

『…どうして気づいたの？』

沈黙はそう長く続かなかった。リグルは眼を閉じて正面を向いて、永琳は部屋にあった挽き石を持ち出して、霊夢に背を向けて聞いた。まるで、眼を見てない方が話しやすいだろうと言わんばかりに。

「…私は普段意識しないで闇を展開してるけど、意図して闇を使うときは少なからず妖力を込めないとダメなんだ。だから、そういう時、闇の中はたとえ見えなくても何が起きてるか程度はわかるんだよ。あの子は…私の闇の中で、ふっと消えた。ありえないほどに急に。そこにいると知らなかったら、そこにいるとずっと意識してなかったら、いたかどうか思い出せなかっただろうってくらいに。不意に、静かに、気配も残さずー」

「人里をあらかた調べて回ったけど、気配がなさすぎるのよ。精神にとりつくタイプだとは言うけど、とりつこうとした痕跡すら残ってない。はっきりいって、ありえない。話の限りでは、その妖怪はそんな芸当ができるほど成熟した存在ではない。それに、ありえないといえばもう一つ。
早すぎる。」

「それに…早すぎるよ。人の精神につくってそんな簡単なことじゃないよね。」
「だけど腑におちない。なんであんたが、なんの関係もないあんたが、あの妖怪を」
「リグルは最初から知ってたんだよね。あの子がつくんじゃなくて、消えるってこと。なんであの子をー」
そんな二人をまっすぐ、最初の質問をした時と同じように見据えながら、二人は各々の疑惑の、今は確信となったその原因を語り、そして、質問した。

『取りつかせることなく、跡形もなく消したの？』

「…ルーミア、この異変を起こす時に言ったよね。この異変は、私に関わった人全員傷つけるよ、って。」

「リグル達は人間と対立し、人間は妖怪に取り憑かれ、霊夢は敗北して信用問題へとつながる。この異変が起こす現象はこうなっている。これで誰もが傷つくと。誰もがマイナスを得てしまうと。私はそう、リグルに説明したし、たぶんリグルも貴方にそう説明したんじゃないかしら。」

「けど…本当にそうなのかな。本当にこのマイナスは等価かな。」

「貴方は異変の解決に失敗した。確かにこれ

は貴女にとってのマイナス。…寝不足？そんなのは些細なことよ。
人間は妖怪に取り憑かれた。しかも、怨霊憑きだった妖怪に、精神の奥深くに。妖怪自体がほぼノーリスクな存在でも、その事実がリスクを決して無視出来ないものに引き上げる。人間も確かにマイナスを得ている。
では、リグル達はどうか。」

「私たちは確かに人間と敵対した存在になったよ。けど、結局私たちは妖怪。敵対したところで…それはもともとだよ。
異変を起こして、私やミスティアは戦闘していくらか…まぁ、私は相当だけど、怪我を負った。それも、私たちは妖怪なんだから、１日あれば回復する。
なにより、私たちは望みを果たした。妖怪を退治するという霊夢の意志も、人間の妖怪への畏怖の気持ちも抑えて、私たちは目的を果たした。
見せかけなんだよ。誰もが傷つくなんて嘘。もし、異変が当初の予定通りなら、成功してたら傷ついているのは私たち以外だ。」

「この不平等の解決はどうすればいいか。答えは事実の誤認。リグル側が異変の成功を確信し、だが実際は何も起きていない。そうすれば、そもそも人間側が得るマイナスは存在しないのだから。誰も傷つかない解決法の提供―まぁ、材料集めの段階で人間側に多少の被害は出てるけど、それくらいは妖怪と人間が棲む幻想郷なら、もともとなのだし―それが私のした行為よ。」

「気づいたのは薬を渡された時だった。明らかに生命を与える気配じゃなかったんだよね、あの薬。むしろ、生命を安全に送り出す―というか、送り出される為みたいな、そんな気配だった。渡されてから、その意味を考えて、この異変を改めて考え直して、ここまで気付けた。」

『―っけどなら！どうして！どうしてわざわざこんなことを！』

その言葉は、もう質問でもなかった。ただ、やりきれない事実に対する、そして、その事実を淡々と話す二人への憤り。あの異変は、あの２週間は、あの戦いは―全て無意味だったとでもいうのか。
そんな二人に対して、二人は、また目を見て、しっかりと見据えて、はっきりとその理由を伝えた。

『そうすれば、あの子には可能性が残るから。』

と。

『…え？』

「記憶に残る。とりつかせなくても、その妖怪は記録に、記憶に生き残る。」

「私たち…特にルーミアはそうかもしれない。妖怪は、『いる』と思われるから存在するんだ。」

「妖怪という精神に依る存在は、『いる』と思われるだけの理由がないと生まれない。」

「あの子はいた。確かに幻想郷にいた。そして、今でも、記憶の中に、心の中にいる。」

「どれだけ少なかろうと、そこに想われるのなら、妖怪はいつか必ず生まれる。だからこそ、幻想郷には、外で想われなくなった妖怪がいる。幻想郷でしか想われないから。」

「いっしょだよ、ずっと。忘れなければずっと一緒にいるんだ。可能性という儚い存在だけど、確かにいる。」

「記憶という風化する物を寄る辺にさせるのなら、その印象は強力なものにしなくてはならない。だから、想われる存在にするために異変を起こさせた。全ては、依頼主の望みのため」

『ずっと一緒に…それだけを叶えたかった。』

その一言の後、しばらく二人の周りは静寂に包まれた。本心から放たれたその言葉は、ただ純粋だった。

相手を想うことから生まれた一連の異変。妖怪らしからぬ動機と、妖怪らしい自分勝手さで、リグルは目的を果たしたのだ。

＊＊＊＊

「…一つ聞いていいかしら。」

席を立ちながら霊夢は最後の質問を投げかける。

「何でも」

「薬の材料…なぜ、猫又を?なぜ、山の適当な妖獣を使わなせなかったの？」

「その前に、なぜ、私が猫又を指定したと思ったの?」

「あの時は、ただ単純に確実にいる妖獣として、リグル達が狙ったと思ったけど…よく考えたら、リグルの周りには橙がいる。そんな彼女がわざわざ、物盗りのリスクをおかしてまで猫を使うのかしら、と思ったのよ。」

「・・・ふふ、流石ね、勘は。貴方、街の秘薬屋の配合リスト、覚えてるかしら。」

「…たぶん、だいたい」

「貴方は妖力増加の組み合わせをいちはやく見つけたけど…使うのをあくまで猫又、に指定した上でもう一度リストを洗ってみれば…」

「…別の薬になる…わね。」

「そう、はちみつやら、砂糖やら、エネルギー源となるものはすべて、物盗りという事象に眼を向けさせる為のフェイク。猫又を使って作る毒は、弱った妖怪を—」

「まるで猫が死期を悟った時のように、静かに、ふっと消す毒。」

「捕捉するなら、服用した妖怪自身は、非常に楽に消えれるわ。猫が、飼い主への恩から消えていくように、恩を感じる時間も残す、そんな毒よ。」

「…今回は完敗だわ。」

そう、困ったような笑顔を見せて、霊夢は永琳の部屋を後にした。

＊＊＊＊

「一つ、最後に…聞いていい?」

「何かな。」

いつの間にか、日は傾いて橙色になっていた。ルーミアは腰をあげながら、最後の質問を投げかける。

「あのこの名前…何にするの?」

「…まだ…決めてないよ?」

「へ?」

あまりにあっけないその答えに、ルーミアは頓狂な声を上げてしまう。

「だって…約束したもの。冬を超えたら名前をって。」

「…いや、でもさ…もっとこう…」

「…だめだよ、えーと…そういうとこは厳しくいかないと。」

「………くす」

「……な、何さ、ルーミア」

「リグルのケチ!」

そう言い放って舌を出し、ルーミアは飛び去った。その背を見ながら、リグルはバツの悪そうな顔をして、つぶやいた。そこにはいない。けど、確かにここにいるその子に。

「う…バレたのかな、名前いうの恥ずかしがってるの…。」

(終)

〈作者コメント〉

最終回です。ここまで読んでくださった方がいらしたら、作者冥利です。

初の長編ということで色々おかしいところが出てしまってるのが名残ですが、それはそれ。

いつか、きっちりまとめて一本にしようかな…。

東方郵便娘
～愛し子よ、雨中を渡れ

著者：SaIka

降りしきる雨、それが時に命の水とも呼ばれるにも関わらず憎っくき存在にされてしまう、そんな時期。
そう、幻想郷に梅雨がやってきたのだ。
泥濘んだ土に雨が流れる道を、一人の妖怪蛍が飛んでいた。今日のマントは防水加工済みだが、帽子は濡れて重く、白いブラウスは前のほうが雨で濡れて肌に張り付いて不快だ。
幻想郷で唯一の、お手紙を運ぶ専門のサービス、【蟲の郵便サービス】なるものを営んでいる、蛍の妖怪、リグル・ナイトバグ。
彼女はこの後、とんでもない事件に巻き込まれる。

＊

枝垂れ柳の如く無造作に垂れ、血と雨とでべっとりと濡れた髪と、あちらこちらに破れ解れが見えて肌に刻まれた生傷を見せ付ける服が凄惨な状況を物語る。年のころは二十と半ば位であろうその女性は、がたがたと僅かな命をその酷い様相の身体ごと震わせて、「取り囲む者」たちに抵抗していた。しかしそれも抵抗という意味を成さない。
女性はうずくまったままうんともすんとも言わない。動かない。小刻みに震えるのみで、その顔すらも見せようとはしない。否、できないのだ。うずくまる女性のその細身には、雨から、また「取り囲む者」から護られる存在が隠されている。
もう何も聴こえない。ざんざ降りの雨音に吐息すらかき消され、自分が生きている感覚すら女性にはなかった。このまま消えてしまうのだろうかと、永遠にも感じられる時間の中で、しかし音は突然耳に蘇った。
「リトルバグストーム!」
　果たしてそれは、少女の声だった。
　無数の羽蟲をかたどった弾幕が、雨を掻き分け「取り囲む者」へ襲い掛かる。
　声の主であり弾幕の主である少女の足音は、びしゃびしゃと雨を乱暴に弾きながら女性へと近づいてきた。
「だ、大丈夫ですか……?うう、全然大丈夫じゃなさそう……」

＊

　妖怪が妖怪を殺めることは道理に反する、というよりそれ以前に、リグルは無闇な殺生を好まない。それは蟲という儚い無数の命を見守る彼女だからこそであろう。
　そのためリグルは、瀕死の女性に群がる妖

怪を退けるために、あえて命を奪うことのないスペルカードを選んだのだった。
「しっかりして下さい！」
　慌てて揺さぶるが、女性の反応はない。体温はまだ生きている人間のそれだ。どうやら警戒しているらしい。
「さっきのは、もういませんから」
　その言葉に安心したらしいのか、女性がぴくりと動く。ゆっくりと頭をもたげ、恐る恐る経過を伺う――何者ももう攻撃をしないのかと警戒しつつ。
　そして自分に何の攻撃も来ないのを悟った女性は、少しずつ首を上げ、上半身を起こし、
「あの……」
　不安げなリグルに、顔が向いた。
　といっても、目は血で潰れて開けないらしくずっと閉じたままで、リグルが見えているとは到底思えない。自然とリグルが女性の正面に立っていたからその顔がよく分かっただけで、実際に立ち位置が違っていたらリグルにはそれは見えなかっただろう。しかしあまりにもその姿は痛々しく、本来襲う側である妖怪のリグルですら胸が締め付けられる思いだ。
「ああ……良かった……本当に良かった……！」
　雨音に吸い込まれそうなか細い声で女性は安堵の声を上げた。しかし、相当傷が深い。すぐに体の軋みに負けて崩れてしまった。
「喋っちゃだめです！手当てを……」
　見かねてリグルが女性を支える。そこで、漸く彼女は、女性に抱かれている存在に気付いた。小さな小さな赤ん坊だった。
「お願いです、どうか……私のかわりに、この子を……私は助からないでしょう……ですが、この子だけでも里へ……」
　女性の閉じた目からうっすらと赤い雫が流れる。雨なのか涙なのか分からない。
「里へ？　この子を……？」
　里というのは間違いなく人里であろう。今女性が襲われていたここは人里から少し離れた野道である。何の用で女性と赤ん坊だけで人里を離れたかは知らないが、ここからだとそれなりに距離はある。
「お願いです、どうか……この子を、この子だけは、どうか助けて……！」
　女性は手探りで声の主に辿り着くと、もう片方の手に抱いていた赤ん坊を差し出した。
　本当の本気で、心の底から我が子の無事を願う母。その姿を見たリグルの心の中で、何かが目覚めた。
　強く頷き、リグルは赤ん坊を、自分の腕に抱く。幼くともしっかりと存在するその命の重さが、細い腕にのしかかる。
「どうか……無事で……」
「だめっ……しっかりして下さい！」
　赤ん坊を受け取ったリグルが急いで女性の手を取るが、既に女性は動かなくなっていた。雨に奪われた微かな体温すらも、消えていく。
「あ……あぁ……」
　目の前で突然の死に触れ、雨の中呆然とするリグル。もっと早くに通りかかって気付いていれば、自分に力があれば……と自分の無力さを嘆き責めるばかりである。
　そんなリグルを、
「ぁー……」
　赤ん坊の泣き声が、現実へと引き戻す。
　リグルの腕の中で、遺された幼い命が主張する。リグルは赤ん坊を今一度しっかりと抱きしめ、動かない女性のほうを向いて、頷いた。
　マントを脱いで赤ん坊に被せ、雨に当たらないようにする。途端に背中に冷たい雨が当たり、リグルは全身をぶるっと震わせた。両腕でしっかりと赤ん坊を抱き、雨に泥濘んだ地面を強く蹴り出す。泥水が撥ね、瞬間、その場からリグルはふわり、舞い上がる。
　飛翔。
　いつもはマントを風受けにして飛ぶ力を増しているため、マントが無い今はあまり軽やかには飛べない。加えて雨で視界が遮られる。そのため、リグルは普段の四割減ほどのスピードで飛ぶことを余儀なくされた。
「っ－！」
　瞬間、ふっと何かを感じ取り咄嗟に身をよじる。振り返ればそこには、先程撤退させた妖怪とは別の妖怪の姿。かわしたのはつまり彼らが放った弾幕。妖怪たちはリグルに比べたら力は全く足りないが、数が多い。そして

何より今リグルの腕の中には赤ん坊がいる。このために今スピードも集中力も奪われている。致命的といってもいいハンデだ。
　そんな状態で、襲い掛かる彼らをかわすことは絶望的に不可能だった。
　それでも赤ん坊だけは傷付けまいと、放たれる弾は避け、あるいはその身に受けながら振り切ろうと飛び回る。隙をついてこちらも弾幕で対抗するが、動きにくさと視界の悪さでほとんどが無駄弾となっていた。
「くぅ……この卑怯者！」
　叫んではみたものの、攻撃を受け続けてボロボロのリグルの叫びでは凄みを利かせることすらできない。
　よろめきながらもまた一発、弾幕から赤ん坊を守るために傷を受ける。口から零れた短い悲鳴は、リグルにしか聞こえなかった。
　万事休す。
　唇を噛み締め、苦痛に耐える顔。ところどころ滲んだ血の模様が写ったブラウスと、痛々しい姿。その背後から、

　熱気。

　ごう、と音を立て、紅蓮の炎がリグルの横を通り過ぎて妖怪へと浴びせられる。
　炎はよく見れば弾幕によって作られていた。紅蓮の弾幕の使い手は幻想郷にも数多かれど、この力強く意志に満ち溢れた炎を操る使い手はただ一人。
「雨は火が燻るから嫌いなのだけれどね。無力な弱者に寄って集る小物の集まりはもっと嫌いなのよ。さぁ、私が相手しようか」
　雨中にありながら不死鳥の輝きを放ち、凛々しく立つその姿は、蓬莱の人の形、藤原妹紅その人だった。
　今の仕事のこともあって人里の慧音と親しくなっていたリグルは、妹紅とも面識があった。どことなく人離れした雰囲気を感じていたが、実際のところあまり話したことのないリグルには何となく強そうだ、程度に感じていただけで実際にどんな人物かは詳しくは知らない。
「あ、あぁ……」
　予想だにしなかった助っ人に、リグルは夢でも見ているのかと我を失う。そんな彼女と妖怪たちの間にふわりと着地した妹紅は、リグルに背を向け、決して振り向くことなく、しかし確実にその言葉はリグルに向けて、
「何ボサっとしてる！　大事な用事があるんじゃないの？　だったらさっさと行きなさい！」
　雨をも吹き飛ばすような勢いで怒鳴りつけた。
「は、はい！」
　リグルははっと我に返り、頷いて飛び出す。妹紅はその姿を振り返って目で追うことはなかった。リグルもまた、妹紅を振り返らない。
　しかし、すぐに大事な用件を思い出し、足を止めた。上半身だけを振り返り、妹紅の背中に呼びかける。
「妹紅さん……この子の母親が近くにいるんです。助けろとは言えません、でも……できたら、里へ……」
　幾度目にしても慣れない「死」を、その口から語ることが憚られる。直接的な表現は避けたが、妹紅はそれに対して親指を立てて返した。ゴーサインだ。
「有難うございますっ」
　妹紅には見えていないが一応頭を下げ、リグルは再び飛び出した。妹紅という頼れる存在が力となり、足も先刻とは打って変わり軽やかになる。
　白い靴下には、泥水撥ねを何度も浴びて汚い模様が浮かんでいた。
　雨はまだ止まない。とめどなく拡がる灰色の空が、慰みか悼みか、しとしとと優しい水を振り撒いていた。

＊

　程なくして、里の入り口が見えた。雨靄がかかってぼやけている。追ってくる姿も弾幕もなく、リグルはひとまず安心して胸元に抱かれた赤ん坊へと目を遣った。何も知らない

のだろう、その赤ん坊はすやすやと眠っている。
　今泣き出しても、この子の母親はもう、いない。
　リグルには母親の記憶はなく――というよりほとんどの妖怪がそうなのだが、赤ん坊の頃があったのかすら定かではない。元々蛍の妖怪というからに、場合によっては幼虫の頃がそれにあたったかも知れない。だが、いずれにしても母親に抱かれた記憶はなく、その温もりを知らない。人里を見て母親恋しい気持ちに駆られることもあったが、この赤ん坊は人の子でありながらそんな寂しい気持ちを抱かなければならないと思うと同情さえ浮かんできた。そういえば、三月に桜の樹で首を吊った早知という娘も、この赤ん坊ほどではないが早くに両親を失っていた。親がいない気持ち……人間のそれはどうだろう、という感傷に行き着いたところで、リグルははっと気付き思考を戻す。
　この赤ん坊にはまだ父親がいる。今からそこへ行かなければならない。そう思ったはいいが、手紙と違ってこの赤ん坊にあて先は書かれていない。
　どうしようかと迷っていたその時、里の入り口付近に見慣れた姿を見つけた。
「慧音先生！」

＊

慧音宅。
　濡れて透けたブラウス越しに見えたリグルの身体の痛々しい生傷には、あらかたの手当てが施されていた。
　ひとまず濡れた身体を温めて、落ち着くように慧音から促されたリグルは、慧音の家について行った。慧音はリグルが抱えた赤ん坊については詳しくその場で聞かず、「何があったかは後でゆっくり話せばいいから」とだけ言った。
　慧音が淹れたお茶を流し込むと、雨で芯から冷えた身体が一気に温まっていく。
「リグル、その赤ん坊は何だ？　別に話したくないなら良いが、ひとつ心当たりがあるのでな」
　リグルが湯飲みの中身を半分に減らしたところで、慧音は話を切り出した。
「はい、実はこの子は……」
　もとより慧音を見つけた時に彼女に頼ろうと思っていたリグルは、慧音に先刻のことを全て話した。抱えている赤ん坊の母親が、妖怪に襲われて死んだことも、包み隠さず。
　母親の死――それも妖怪の仕業だと聞いた慧音は少し辛そうな顔を見せた。自らが人と人外の二つの顔を持つからであろう。
「そうか……いや、ちょうど私もその人を探していたんだ。右仲井という、ちょうど里の東のあたりを纏めている家の主人から『妻が子供の祈願のために先祖参りに行っているんだが、帰ってこない』と連絡がきて、探しに行こうとしていたところだったんだ。妹紅が先に行っていたのだが、まさかこんな事になっていようとはな……冥福を祈るしかない」
　そう言うと慧音は両手を合わせて目を瞑り祈りを捧げた。つられてリグルも黙祷する。二人がしばらく黙祷した後、慧音はリグルの……正確にはリグルに抱えられた赤ん坊へ、向き直った。
「だが、そうだな……母親に守られた命が、まだある。命を賭して遺された命だ。一刻も早く届けなければな。私が一緒に行こう」
「あ、有難うございます！」
　父親の元へ、命が繋がれる。リグルは安堵し、いとおしむように赤ん坊をぎゅっと抱き締めながら慧音に頭を下げた。

＊

　慧音の言ったように、目的の右仲井家は里の東の更に東にあった。確かに周辺の家よりも敷地がやや広く、造りも立派だ。もちろん、

リグルがよく友人を訪ねて行く霧の湖の、ほとりにある紅い館に比べたら大層劣るのだが。

慧音がその家の門を開き、人二人はゆうに通れる扉をノックする。しばらく待つと、中から細身の男が現れた。身なりから察するに使用人だろう。

「これはこれは慧音様。もしや奥様のことで何か？」

「ああ、かなり込み入った事情があってな。宗吾に通してくれないか？　この子も一緒にだ」

そう言って、慧音は後ろのリグルを見せる。一瞬戸惑った使用人だったが、赤い帽子と腕章を見て何者かは理解した。人間の利用者が多い郵便サービスの証であるこの二つは、妖怪に対して今だ警戒心の残る人里での、いわば通行証のようなものだ。

使用人は一旦奥へ行き、しばらくして戻ってきた。

「どうぞ、ご主人がお待ちです」

深々と礼をして、使用人が一歩左へ退く。廊下に二人分が通るスペースができた。

「有難う」

「有難うございます」

二人は使用人に頭を下げ、開かれた廊下を奥に向かって進んでいった。

やがて松と鶯の描かれた襖に突き当たる。どうやらこの部屋が主人、先程慧音が言っていた右仲居宗吾という人物の部屋なのだろう。

「入るぞ」

慧音は一声かけて、襖を開いた。

中で待っていたのは、三十代初めくらいだろうか、強いまなざしと太目の眉が生真面目さと厳格さを思わせる男だった。部屋には彼しか居らず、間違いなく彼が、リグルが腕に抱いている赤子の父親で、周辺一帯を仕切る家の主人、右仲井宗吾である。

「慧音先生か。さよりの行方は掴めたか？」

男は開口一番に、慧音に託していた妻、さよりの行方を尋ねる。慧音は落ち着き払った態度を保ったまま、答えた。

「さよりの行方についてだが……私より彼女のほうから話したほうが早いだろう。だが宗吾、始めに言っておくが、落ち着いて聞いてくれないか」

慧音に手で促され、一歩控えていたリグルは進み出る。宗吾はそこでリグルの抱いている赤ん坊に気付く。恐らく、この瞬間に宗吾はもう何を聞かされるか大方の予想はついただろう。

「その、すごく言いにくいんですけど……。この子のお母さんは、私が着いた時にはもう、妖怪に襲われて、生きてるのがやっとで……」

宗吾に畏怖を感じるリグルは、恐る恐る、そして途切れ途切れに事の全てを打ち明けた。宗吾の顔が見る見るうちに落胆の色へと変わっていく。話し終えて暫く、誰もが黙り込む。気まずい沈黙が流れた。

暫くして、リグルが申し訳無さそうに口を開いた。

「ごめんなさい……もっと早く着いていれば……」

「もういい！」

突然宗吾は声を荒げて怒鳴りつけた。

「要するにお前は、さよりを見捨てて来たのか！　俺があいつの帰りをどれだけ待っていたか……子供だけ連れ帰って何になる！　何故さよりを連れて帰らなかった！　赤ん坊だけ連れ帰って何になるというんだ！」

いきなり怒鳴られたリグルは、狼狽して何も言えずにいた。冷や汗が額を伝う。

「もういい。お前の顔など見たくないわ、人殺しめ」

「宗吾、落ち着け……相手は妖怪とはいえ子供だぞ。それに赤子の前で怒鳴るな」

慧音がリグルの腕に抱かれた赤ん坊を見遣る。つられてリグルも赤ん坊を見る。母親に守られて繋がれて、帰り着いた命。だが、待っているはずの父親の言葉は……。

――リグルの頭の中で、巡る光景。血に塗れ地に伏し、その細腕に我が子を抱き続けた母親の姿。見えない目で光を追う姿。傷だらけで地に這いつく自分の、泥まみれの足。敗者の蟲を見下ろす博麗の巫女。流れる涙。落ちる雨。視界の先に見える、護りたい命……。

「あなたは」
　怒りに声を震わせ、リグルは口を開いた。
「あなたは何とも思わないんですか！？　あなたの奥さんは、いえ、この子のお母さんは……命を懸けて、自分がぼろぼろになって、それでもこの子には生きて欲しいって！　必死で護ってくれたのに！　それなのに『子供だけ』って、まるでこの子が要らないみたいな言い方……あなたの奥さんがどんな思いでこの子を護ってきたと思ってるんですか！　護らなかったらきっと一緒に死んでいたかも知れない、けど、あなたのところに……お父さんのところに帰ってきたのは、誰がいたからなんですか！　それなのに、そのお父さんにこんなこと言われて、この子が幸せなわけない！」
　自分に怒鳴りつけた宗吾にも劣らない勢いと声で、リグルは自分の思いを宗吾にぶつけた。そして一方的にぶつけて、赤ん坊を抱えたまま、乱暴に襖を開け、走り去る。
「ええい、黙れこの……『親なし』が！　お前如きが親の気持ちになって語れるものか！」
　走り去る背中に、宗吾の罵声が飛んでいく。リグルの姿は、やがて廊下の闇に消えていった。
「誰か！　出て来い！　妖怪めが俺の子供をかどわかしやがったぞ！　おい……」
「落ち着け」
　怒り心頭、完全に頭に血が上りきっている宗吾とは対照的に、慧音は冷めて、醒め切っていた。落ち着き払った声は、宗吾との温度差ではまるで氷のよう。喉元に冷えたナイフを突きつけられたような感覚に、宗吾の勢いが一瞬で停まった。
「私は言ったはずだ、『落ち着いて聞け』と。子供相手に何を怒鳴る？　確かにさよりが死んだことはお前にとって辛いだろう。だが、リグルは偶然通りがかった妖怪だ。さよりを襲って殺したわけでもなく、増してそのさよりが最期に託した子供をここまで連れてきたんだぞ。自らも傷を負ってだ。それなのに父親のお前が大人気ない態度とは何だ。子供に顔向けできないだろう」
「だがしかし……」
　それでも宗吾は食って掛かる。幾分か冷静さを取り戻したとはいえ、まだ現実を受け入れ難いといったところか。
　慧音は宗吾に座るように促すと、桐の卓を挟んで向かい側に自らも着座した。
「安心しろ。リグルも確かに冷静さを欠いていたが、あいつは『約束』もあって迂闊なことはできないし、元々そんな性悪な妖怪でもない。それに私の友人も戻ってくる頃だろう。ひとまず子供の身柄は安心していい。それより」
　一呼吸。慧音の眼に、優しさが宿る。宗吾も幼い頃によく叱られた後に見た、慧音の表情。長い歴史と共に暮らした経験と知識から、人間という短命の生き物を諭す、優しい守護者の姿となる。
「少し前の話をしよう。この人里で自らの守るべき命のために人に屈した、蟲の妖怪の話だ」

＊

　里の東から更に東、人の領域の端。その土手際まで走ってきて、リグルは歩みを止めた。折角慧音が拭いてくれた身体は、再びずぶ濡れに戻ってしまっている。
　雨はまだ止まない。灰色の雲はどこまでも広がり、幻想郷の空を覆い尽くす。
　ずぶ濡れでひしゃげた帽子が頭にべっとりと張り付いて重い。鮮やかな赤は、雨に濡れて数段暗い赤に染まっていた。リグルは赤ん坊を濡らさないようにマントを上手く被せ、土手際にある石段の椅子に座り込んだ。
――この子を、この子だけは、どうか助けて……！
　血に覆われて見えない目で、しかしそこに一縷の希望を見出して我が子を託した女性の姿が脳裏に再び蘇る。我が子を護りたいという思いは、親のいる人間でなければならないのか、そんな考えがリグルの頭を過る。

いや、違う。すぐにその頭を振って否定した。もしそうならば、どうしてあの時自分が、「あの事」を思い出せようか。今こうして手紙を運ぶきっかけとなった、あの時のことを。

＊

泥とかすり傷で肌は酷い有様、ブラウスの袖裾もあちこちが破れていた。立ち上がる力すらもう残っておらず、自分を見下ろす博麗霊夢の視線が痛いほどに突き刺さる。
それは紅葉鮮やかな秋のことだった。
運が悪かったのかも知れない。或いは、良かったのかも知れない。その日偶然、本当に偶然で、茶菓子を求めて博麗の巫女が人里を訪れなかったら、リグルの運命はまた違っていただろう。
「さすがにもう戦う気力は残っていないようね。観念したなら力の差を思い知りなさい、蟲妖怪。この私が居る時に人間を襲ったのが運の尽きね」
ズタズタのボロボロな自分とは反対に霊夢は余裕綽々だった。手にはまだ豊富に残されたスペルカード。トドメを刺すのも下らないと言わんばかりの軽蔑の目。幻想郷の秩序の一たる存在は、リグルにとってはあまりにも高すぎる壁であった。
事は、リグルが人里の外れに蛍の繁殖に適した川辺を見つけたことに始まった。実際に住まう蛍たちも気に入っているようで、蟲妖怪でも蛍であるリグルはそれをとにかく嬉しく思い、その川辺に足しげく通うようになっていった。
だが、それも長くは続かなかった。暫くしてリグルは、そこに人間が度々訪れるようになったことに気付く。蟲たちに聞けば、その川の先に水田があるので、この辺りに水車を建てようと人間が考えているというのだ。水車が建てば、ここにいる蛍たちは一体どうなるか。移住させるにしても、時間がかかるし、下手をすればその手間で死に絶えかねない。蛍たちのためにも、水車の建設をどうにかしてでも止めなければ……。
リグルの決断は早かった。
水車の建築の打ち合わせに来ていた人間に、軽く脅す程度で襲い掛かったのだ。
しかし、それで済むはずだったリグルの計画は狂ってしまった。多少頭の足りないリグルの考えなものだから、ちょっと脅したくらいでどうにかなるような人間ではないということも予想外だったろう。だが、それ以上に予想外の事態がリグルを襲った。
妖怪に襲われたと里人が助けを呼びに行き、しかも慧音が偶然里を少し離れており、そして、あの博麗霊夢が里を訪れていたのだ。
夜行性のリグルの力が発揮できた夜の異変の時ですら、全く歯が立たなかった相手だ。勿論リグルは殆ど霊夢に何もできずに簡単に敗れてしまい、今に至る。
「何が目的か知らないけれど、諦めることね」
「嫌だ！」
圧倒的な力を見せ付けられて尚、リグルは退かなかった。リグルの後ろには、川辺で光の時を待つ蛍たちがいる。護るべき存在を前に、簡単に敗北で終わるわけにはいかなかった。
「私はこの場所を、みんなを護るんだ！　誰にも邪魔させてやるもんか……たとえそれがあんたでも！」
「だったらその口叩けないように再起不能にしてやるわよ？　あの湖上の氷精といい、雑魚に限って諦めが悪いんだから」
霊夢がお払い棒をリグルの額に突きつける。恐怖心がリグルの全身を駆け巡り、生唾を呑んで身体を震わせた。
「そこまでだ」
第三者の声が入ってきたのはその時だった。霊夢が振り返り、リグルは霊夢の向こうへ視線を投げる。そこには、村人に連れられて歩いてくる慧音の姿があった。
「すまないな、私が里を空けたばかりに」
慧音はまず、リグルの襲撃で軽傷を負った里人に声を掛けた。そしてリグルと霊夢の間に入り、両者に一度ずつ目配せする。

「状況は大体聞かせてもらった。リグル……いくら人里の外れとはいえ、妖怪の領域でもあるまいに、何故わざわざ人を襲った？」
「ちょっと慧音、妖怪の肩を持つ必要なんて……」
「霊夢は少し黙っていてくれないか」
あくまで妖怪の罪を問い詰めようとする霊夢を、慧音が制す。やんちゃな子供だとはいえ、リグルの表情は真剣だ。とても理由もなしに人間を襲ったとは思い難かったのだ。
「だって、人間が、人間の勝手で、みんなが……！　絶対許さない！」
リグルの言葉を聞いた里人の表情が厳しさを増す。
「落ち着け、リグル。感情でものを言っても何も伝わらないぞ。……要するにお前は、蟲を護りたかったんだろう？　この辺りに水車を建てる計画は私も知っていたからな。蛍の棲家であることは失念していたが……」
粗方の事情を聞いて状況を見るだけでここまで推測できるのは、流石博識の歴史喰いといったところか。リグルは頷いたが、里人は、
「何だよ、そんな話はちっとも知らねぇぞ！」
怒りに任せて襲撃し、何も伝えていなかったために、事情も言わず突っかかってきたリグルに更なる怒りを覚えるばかりだった。慧音はいきり立つ里人を抑え、言った。
「お互いに気を荒立ててどうする。何も解決しないだろう。とにかく事情はつかめた。ひとまずリグル、お前は里の者たちに急に襲いかかったことを詫びるんだ」
慧音に言われても尚納得いかない様子のリグルだったが、和らげな表情の慧音に背中を後押しされ、渋々だが頭を下げた。
「確かに突然お前たちを襲ったことはリグルが悪かっただろう。だがこいつは妖怪でもあり蛍なんだ。家族同然の蟲達が棲家を奪われて滅びる様など見たくないはずだ」
慧音の手が、リグルの頭を撫でる。優しくて温かい手だった。
「とはいえここは人の領域でもあるしな……リグルには辛いかも知れないが、ここは人のルールに則ってもらおうか」
「人の……ルール？」
「この一帯の土地を、この者達から買えばいい。そのお金を稼ぐのは、もちろんお前自身だ」
売り買いといっても友人の鰻屋台程度しか知らないリグルにとって、土地を買うという感覚は想像に難かった。理解できずに、首を傾げる。
「この土地を蛍のために残したいのだろう？　だからそのためにお前が働けばいいんだ。働いて稼いだお金を渡せば、この土地にはもう誰も手を出さない。人のために働けば、信用だってしてもらえる」
リグルに一通り説明し（それでもリグルはまだ分かってない様子だったが）、慧音は次に里人のほうを向いた。
「とはいっても、お前達が了承してくれなければならないな。襲われた身としては喜ばしくないかも知れないが、お互いにわだかまりも残らずに納得できるだろう。ここは条件を呑んでくれないか」
「まぁ、慧音様がそう言うなら……」
里の中でも、慧音は知識人と守護者という二面からかなり信頼を寄せられている存在だ。その慧音に言われれば、里人も納得せざるを得なかった。
水車の建設予定は一旦白紙に戻り、リグルが土地を購入するまでは保留となった。
とはいえ、蟲の知らせサービスも飽きてすぐにやめてしまったリグルである。とても仕事などできる自信はなかった。
子供たちが帰った後の寺子屋で、リグルは慧音と机を挟んで一対一、向かい合っていた。
「その様子だと何をすればいいか分からないようだな」
「だって、私蟲の知らせサービスもすぐやめちゃったし……」
烏天狗のブン屋の取材を受けて宣伝までしたにも関わらず、その後すぐにやめてしまった仕事。どうにも継続が向かない性格を思い知ったリグルは、約束したとはいえ乗り気ではなかった。
一方の慧音は、そんなリグルを見て、
「常に必要とされる、そんな仕事をすればいいんだ。そうすれば、お前が簡単に辞めてし

まうわけにもいかなくなるだろう？丁度、今人里で求められているサービスがあるんだ」
　慧音は立ち上がり、白のチョークを手に取ると、黒板に勢いよく線を書き出した。
　浮かび上がる、「〒」のマーク。
「外の世界にあった『逓信省（※）』とやらが始めたサービスらしいんだが、『郵便サービス』というものだ。簡単に説明すると、離れている人に手紙を送るサービスだな」
「手紙？」
「なんだ、書いたことがないのか？だったら今度教えてやろう。お前は動き回るのは好きそうだし、適職だと思うのだが……どうだ？」
　どうだ、と言われても、リグルには他に自分のやりたい仕事も思いつかない。サービス自体は慧音が詳しく教えてくれるだろうしと、リグルは二つ返事で了承した。
　その後、慧音から手紙に関する一通りの指導を受け、「仕事をしている間は人間に一切手を出さない」という約束を交わした。慧音は更に霖之助に頼み込んで帽子と腕章まで作ってもらってくれた。採寸の時、霖之助が励ましに頭を撫でてくれたことも、リグルは覚えている。
　妹紅の協力もあり、人里各所に手紙を集配するためのポストも設置された。
　これが「蟲の郵便サービス」の始まりである。

＊

　この子も手紙だな、とリグルは思う。今まで紙に文字が書かれた手紙ばかり配達してきたが、慧音から「手紙とは思いを込めるもの」だと教わったリグルにとって、形は違えど、「生きて欲しい、無事でいて欲しい」という願いが込められたこの赤ん坊も手紙に思えた。
　小さな手が、マントの端をぎゅっと握る。雨に濡らさないようにしたお陰で、母親が必死に護って負った傷、そこからついた血がまだ赤ん坊の顔に僅かに付いていた。そしてその血の上に、ぽたりと雫が落ちる。
　リグルは泣いていた。

＊

「確かに、妖怪は自分の親を知らずに育った者が多い。リグルとて例外じゃない。だが……リグルの場合は、あの子が母親のようなものだ。妖怪よりも人間よりも、遥かに短い、刹那の命を、何千何万、いや、何億も見守ってきた……。リグルの蟲を護りたい思いは、人間の我が子に対するそれと変わらないんだ」
　里のどこかで、幼子を抱いているであろう「蟲たちの母」リグルを思いながら、慧音は訥々と語った。もう宗吾の怒りはおさまっている。彼は気恥ずかしそうにしながら、慧音に頭を下げた。
「俺を、あの妖怪の所まで案内してもらえないか」

＊

「や」
　リグルがはらはらと零れ落ちる涙を指で拭い上げていると、その背後から声をかけられた。
　振り向けば、そこには先刻リグルの「配達」を手助けしてくれた妹紅の姿が。傷も何ひとつとしてなく、助けに来た時のままだった。やはり彼女は強い。
「大丈夫、あいつらは撒いてきたよ。全く、梅雨で退屈だからって人間を襲いにかかるなんて器のない妖怪ね。輝夜の所の妖怪兎なん

かのほうがよっぽどマシよ。……ああ、母親は帰したよ、人里に。それにしても、人外が人のために泣くなんて、慧音以外で初めて見たわね。もっとも慧音は半分人間だけれど」
「う、でも……なんで泣いてるのか、私、自分でもわからなくて……」
　声を詰まらせリグルが答える。
「別に理由なんて聞いてないよ。泣きたいから泣く、それでいいじゃない。悲しいとか、辛いとか、そんなの二の次でいいのよ。泣きたいっていうのも一つの感情なんだから。それより……その子どうするの？　父親が探してたよ。まさか自分で育てる気？　子育てなんて何もわかんないでしょうに」
「そりゃ、そうですけど……でも、私ちゃんと頑張ります。育て方とか勉強して、立派なお母さんになります。……だって、あんなこと言われて、可哀想です……お母さんがいなくて、それで、それが自分が生きているせいだって思わされるようなこと、そんなの絶対嫌だ……」
　懸命に拭って一度は止まった涙が、感情が激昂するとともに再びあふれ出す。
　妹紅はちらりとあちらを見て、そして再びリグルを向いた。
「だったら、その言葉……もう一度、ちゃんとぶつければいい」
「え？」
　妹紅が親指で、先ほど向いた方を指す。人影が二つ。凛とした姿勢で歩いてくる慧音と、どこか申し訳なさげな雰囲気の宗吾。
　二人の姿を確認して、リグルはそこで妹紅の言葉の意味を理解する。
「あの……」
　宗吾の申し訳なさそうなその表情に、リグルも彼を責める気になれず、おずおずと声をかける。
「すまなかった」
　最初の言葉は短かった。その言葉と共に、彼は地に足をついて頭を下げる。
「娘の命の恩人に、妻を亡くしたショックからとはいえ、辛く当たってしまった。本当にすまない……」
「リグル、彼も突然のことで混乱していたんだ。この通り今は彼もちゃんと自分の言った言葉に対して反省している。今回のことは許してやってくれないか」
　宗吾に合わせて慧音も――彼女は立ったままだが、頭を下げる。いくら人間とはいえ、大人二人に頭を下げられては、許さないほうが非道というものだ。それに実際のところ、今の話を聞いて理解できないほどリグルも頭が悪いわけではない。
「いえ、その……分かりましたから。だから」
　リグルは、宗吾の目の前まで歩み寄る。彼が頭を上げると、その顔の前まで赤ん坊が差し出された。
「この子のこと、しっかり抱いてあげて下さい。お母さんの分まで……」
　くしゃくしゃに顔を歪めながら、リグルはそれでも泣くまいと強がっていた。痛々しいさよりの姿を思い出したのか、抱きかかえ続けたことで芽生えた愛情からか。否、そんないくつもの感情が複雑に絡み合った胸の苦しさが、リグルを責め立てているのだろう。
　赤ん坊を受け取った宗吾の腕は、リグルよりふたまわりはゆうに超える、しっかりとした腕だった。
「ふぎゃぁ」
腕の中で赤ん坊が泣き出す。宗吾は肩口から腕を上下に揺さぶり、赤ん坊をあやし始めた。
敵わないな。リグルはばつの悪そうな顔で、そんな光景を眺めていた。

＊

「まいどー！　蟲の郵便サービスです！　お手紙お届けにまいりましたーっ！」
　威勢のいい声が、人里に響く。梅雨間の晴天に、むき出しの白い腕が光る。涼しげな夏服のブラウスは、ひとつの命を救ったお礼にもらったもの。
　今日もリグル・ナイトバグの「蟲の郵便サービス」は滞りなく営業中である。
「えっと、今日の集配はこれで……あれ？」

本日最後のポストに集配に来たリグルは、ポストを開いて出てきた手紙を取り、確認し、そして手を止めた。
　宛先には「蟲の郵便サービス　リグル・ナイトバグ様」と書かれている。自分宛ての手紙は以前魅魔がくれたが、こうしてポストに入れられたのは初めてだった。
　手紙を裏返すと、差出人の名前が力強い字で書かれていた。「右仲井宗吾」とあった。

＊

拝啓

　先日は娘を助けて頂き、本当に有難うございます。お陰で娘はあの後何の問題もなく、今家中の手に余るほどに元気に泣いております。
　妻の葬儀を終えて、慧音先生からあの日の詳しい話を聞きました。娘を無事に人里へ届けるために、傷を負ってまで娘を護っていただいたことを聞き、そのような苦労をされていたことなど知らずに怒鳴りつけてしまったことを恥ずかしく思います。
　あの日、妻は生まれた娘の祈願へと、右仲井家に代々伝わる掟に従い先祖参りへ行っておりました。我が右仲井家は子供が生まれた場合その場で名前を与えず、先祖参りにて先祖から啓示を受けて名前を付けることとなっています。
　亡き妻が先祖からどのような啓示を受けたのかは分かりませんが、私はあの日、あなたから娘を受け取り、娘に与える名前を決めました。
　娘を救っていただいたこと、私に希望の光を残していただいたこと、本当に感謝しています。
　近くに来る機会などありましたら、どうぞ娘の顔を見に立ち寄って下さい。

敬具

ひかり。

＊

　手紙の末尾に、二人分の名前が書かれていた。それを見て、リグルはくすぐったい気分になる。手紙をぎゅっと握り、赤面した顔を見られないように俯かせながら、ポストを後にした。

雨中に遺された、希望の名。
すべての幻想の蟲の母たる、蛍の光。

〈完〉

後書き。

　郵便娘も第三弾です。前回が手紙あんまり関係なかったので今回ちょっと不安でしたが。
　なんか子供を配達するってこの作品書く上でのオマージュである某漫画そのままじゃないかと……こう……
　それ以上にかなり設定が自己流なので、読んでいる方が不快にならないかすごく心配です。四月の桜の時に不安を感じ取ったあなた。これに懲りたら次回からすっ飛ばしましょう（笑
　あと慧音先生がすごく重要なポジションになってますが、これは単にサービスが主に人里向けである（だって妖怪は飛べるからあまり郵便サービスを使わないでしょう）ことからどうしても関わらざるを得なくなってこうなりました。自分の中での慧音先生はイケメン。異論は認めません。
　あとどうしても、そういう設定の都合上人間がキャラを確立してしまうのが個人的には辛いです。オリキャラ断固反対って方もい

らっしゃるでしょうし。今回の右仲井一家にしてもそうですね。本当は名前を付けるのもためらったのですが、プロットが出来たときから無いと困るってことで、話の筋を肉付けしていくうちにどんどん設定ができてしまいました。うう……自分としては人里の住民くらいはキャラ作ってもいい気はしてますけどね。

　それ以上に設定に無理があったり公式と矛盾してたりするのが怖くてどうしようも（チキン

　さて、そろそろリグルも帽子と腕章だけだと格好がつかないことですし、制服が欲しいところでしょう。その辺のプロットは現在練ってるところですねー。
次回は「東方郵便娘～突撃、異世界からの研究者～」を予定しています。七月号か八月号には載せてしまいたいところ。紅楼夢に受かってたら書き下ろしもプラスして出したいです。

それでは、ここまで読んで頂いた方に感謝。

さいか

東方繋話～梅雨～

著者：社　蛍夜

長い雨。

そして、じめじめとした空気。

梅雨。

日本では北海道や小笠原諸島を除く地域に降り注ぐ、夏から秋へと変わる時期に降る風物詩である。

基本的にはアジア特有の気候であり日本以外にも降るが、詳しい事はここでは割愛させてもらう。

そんな梅雨であるが、幻想郷にも降り注いでる、今回はそんな頃の話。

※※※

「んー・・・やまない、かなぁ」

雨の中、傘を差す少女が呟く。

「こう雨が降ると洗濯物が減らないいんだよな」

などと呟きながら、傘の影から覗かせている顔が曇天を仰ぐ。

森の中、緑の髪に黒い触角のある、マントをした少女が独り、ぽつんと立っている。

じ・・・と、空を見上げている少女。顔を傘の影に隠すと、ゆっくり歩きはじめた。

ぴちゃ、ぴちゃ。

ぴちゃ、ぴちゃ。

太陽の見えない空の下、暗い森の中をあるく少女。

ぴちゃ、ぴちゃ。

ぴちゃ、ぴちゃ。

歩いて、歩いて、歩いて、そして、ゆっくりと立ち止まる。

湖。

少女の目の前には大きな湖が広がっている。湖は雨で靄のかかったかのように、向こう岸がうっすらとしか見えない。そんな向こう岸には、赤い大きいモノがぼやけて見える。

「紅魔館も・・・あまり見えないのか」

向こう岸の赤い何かを見つつそう呟くと、興味を無くしたかのように別の方向を向き、きょろきょろと周囲を見渡す。

「・・・やっぱり、みんなは居ないか」

溜息混じりに大きく息をする。周囲を見渡しても、気配すらも人っ子一人居ない。そんな状態だ。

「・・・・・・ん、っと・・・?何だ?」

彼女の視線の先、森の中から影がゆらゆらと近寄ってくるのが見えた。

「んー・・・何だろう」

目を擦りつつ見ていると、その影は上下しながら、跳ねるように寄ってくるのが見えた。大きさ的にはよく見る蛙等程か。

「跳ねてる・・・蛙、かな」

その影は依然と寄ってくる。そして靄が取れ始める。

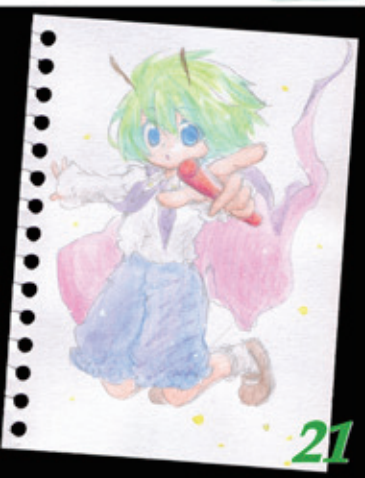
「あぁ、やっぱり蛙だ。そういえばチルノってば食べられそうになったとか言ってたっけ。そんな大きい蛙がいたら・・・」
　依然と寄ってきていた蛙は彼女の目の前で止まる。蛙の顎が彼女の傘に乗りそうな位置で。
「・・・ひぇぇ・・・」
　涙ぐむ彼女の顔がだんだんと青ざめていく。すると、唐突に後ろから声がした。
「そういえば蛙は虫とかを食べるんだよねぇ」
「ひぇぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；；！！？？」
　今世紀最大級と言わんばかりの奇声を発しつつ、傘を落とし、さらに腰を抜かしてしまった。どうやらとても怖かったようだ。
「だ、誰ですかッ!?」
　そう叫びながら、振り向く少女。叫んだのは、急に声を掛けられ驚いた事に対する反発的な気持ちなどではなく、
「ははは、ごめんね。チルノとかいう名前が聞こえたから、つい脅かしてみたんだ」
　相手の底知れぬ力量を感じ取っていたからかもしれない。だが、
「あの子はうちの眷族の子たちを散々凍りづけにしてくれたからね」
　それに気付くのは・・・意外とすぐなのかもしれない。
「あぁ、自己紹介が遅れちゃったね、私は『洩矢諏訪子』、土地神よ。よろしくね『リグル・ナイトバグ』ちゃん」
　これが変な帽子を被った土地神とリグル・ナイトバグの出会いだった。

（終）

〈作者コメント〉
　※この作品は作者の妄想です。
　読者様独自の解釈で今後の想像も良し。実に馬と鹿が仲よくしている話だと切り捨てるも、読者様のお好みでお選びください
※以下　作者コメント本番
　そう、私（作者）に足りないのは友情努力人生経験その他諸々：：そして何より・・・表現力がたｒ（

7月号テーマ：
挑戦
『お姉さんリグル』　モフパカ
リグルのお姉さん化に挑戦です。

2010年6月4日、リグルが幻想郷を駆ける——

14
6/4日
蟲の日
リグルリレー
15
リグルの日
今年の夏
16
17
6/4
リグルリレー
6月4日リグルの日
18
19
20
(都合により
未掲載)
21
22
バトンヲ繋グ
雨ニモ負ケズ
23
24
25
26
27

＊6月4日リグルリレー走者一覧（敬称略）＊

第1走者:Salka 第2走者:草加あおい 第3走者:キッカ 第4走者:イリイチ
第5走者:東 第6走者:Ωな人。 第7走者:露餅 第8走者:八坂神寸
第9走者:紅宝ひいな 第10走者:怒羅悪 第11走者:秋水 第12走者:雷騎士
第13走者:パスタコス 第14走者:13 第15走者:なまくら 第16走者:ゆめひめ
第17走者:ひどぅん 第18走者:PA NI 第19走者:斑 第20走者:未掲載
第21走者:貴キ 第22走者:トイレで踊る人 第23走者:Salka 第24走者:やにたま
第25走者:優 第26走者:ナナシ 第27走者:蛍光流動 第28走者:暁流鳴
第29走者:preludenano 第30走者:もろぞふ 第31走者:ゐぬ 第32走者:くらげん
第33走者:猫屋敷 第34走者:黒ストスキー 第35走者:emina 第36走者:未掲載
アンカー:Salka

6月4日は蟲の日ということで、Pixivにて突発的にイメレス企画として立ち上げたのが
このリグルリレー企画です。
一日でどこまで走り抜けるか、ある意味挑戦ですよね。なんか宇宙まで飛んでますが（
今回連絡が取れず未掲載もありますので、Pixivアカウントをお持ちの方は是非
【企画】6月4日リグルリレー でタグ検索してみて下さい！

…来年は第64走者まで走り抜きたいなぁ…

表面処理とかしたり。

※天気が良い日に5時間ぶっつづけで作業すると目が見えなくなります。

複製します。

レゴも粘土もばっちりだぜ。

※型から入る。

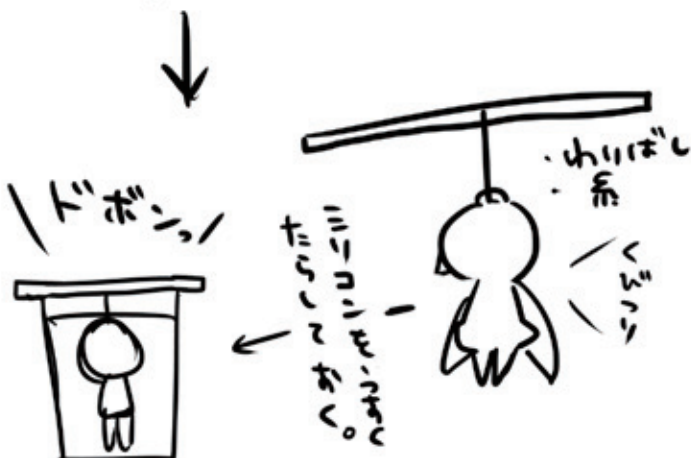
次ページから本気出す

チャレンジ13年生。

角右衛門秋水が何かに挑戦したお話し。

半分に割って
空気を抜く道を
作って、いざ複製

紙コップでやります。
・造形が小さいし
・時間の短縮
もできる。

固まっちょる!?

まぜまぜしてたら硬化してしまった。
早すぎだろう。
おじさんはたまげちゃったよ。

固まったら
抜く。

こんなかんじー

そんなこんなで
できました。

ぱよぉあ、

↓

↓本当はエアブラシ
で色つけたかったけど
友人に貸したままなので

妄想着色

※イメージです。

↓謎

クリスタルレジンでも作ったけど
キャストのがまだキレイだ。

?

今、ここ。

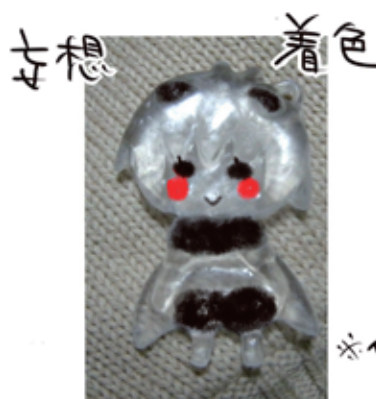
↓

汚ない字なのにここまで読んで下さってありがとうございました。

そんなあなたに朗報です。
今回作ったリグルんストラップを1名様にプレゼント。
全然嬉しくないって?スイマセン…。

アンケートに答えてストラップを貰おう！！
レッツアクセス！

piconanoでぐぐるか
http://p-n.xii.jpってアドレスバーに打ち込もう。
みんなの応募待ってるよ～
締切は7月2日です。

おしまい☆

メールフォームはおろかアンケートの
内容を考えてない…。
アンケートやる意味あるの??
とりあえず、化学のテスト終わってから
本気出す。

リグルの過冷なる挑戦

有頂天辺の糸

リグルが帰ってきたらつづく

描いた人：猫屋敷

VS　天辺草（てんぺんぐさ）
上空を漂いつつ、光る小さな蟲を食べて生きている風船のような蟲。餌が取れなくなると糸状の触手を地上に降ろし、これに触れたものを釣り上げる。獲物が大きすぎると上空で吐き出されるため、そのまま地面に叩きつけられてしまうことが多い。別名迷い星。

楽屋ウラ的なにか。

描いた人
草加あおい

さぁどっち！

リグル

と

もこたん

と

ゆうかりん

描いた人：ぼに

今日の私は・・・

世話のかかる先生

プロジェクトW

ーで

リグルで遊…いや、リグルに色々挑戦してもらおうって企画よ！
今本音出たよね
おい

ん？
何さコレ

それじゃ早速行ってみよう！
聞きなさいよ
おい

ーと、言う訳で！

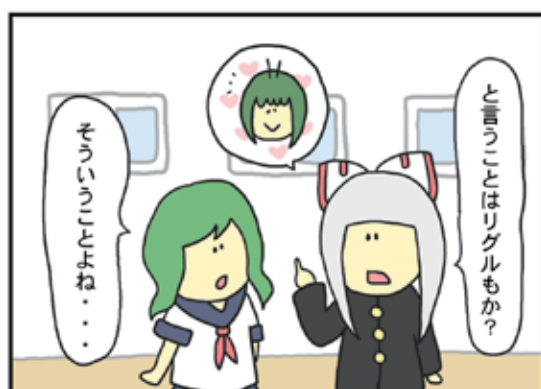
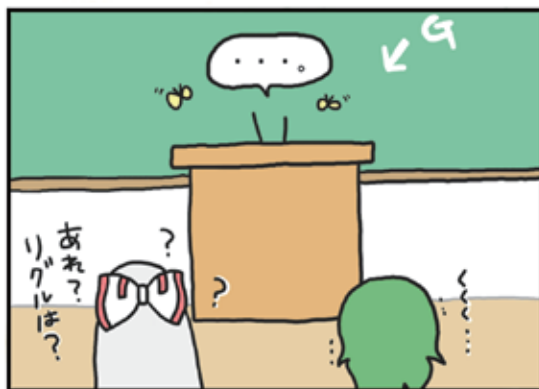
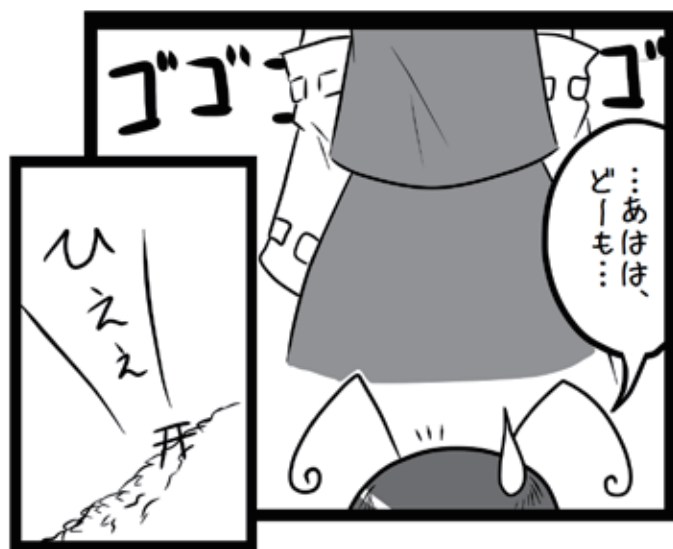
機嫌悪い巫女にちょっかい出してみよう！
アホですかアナタは

リグルなら大丈夫だって！
グッ！
寝言は寝て言おうよ

あわっ
もーいいからドーン！
ド

ふみゃっ
びたんっ

ゴゴゴ
…あはは、どーも…
ひえぇ

おしまい

「嘘だ!」
「いいえ・・。本当よ」
あなたは永夜ノ刻に巫女に倒されるためだけに生まれてきた存在
「そんなわけ無いじゃないか!だって僕はこうして今も自分の意思で存在していr・・・」

それは単に運命に生かされていただけ。ただ、運命のつじつまを合わせるための時間に過ぎないのよ。
「そんなことない!だってそんなの悲しすぎるじゃないか!」
いいえ、これは誰もあらがうことのできないこの世に生を与えられた時から決められた運命よ。
「そんなの認めない!」
「なら、せいぜい抗ってみなさい!逃げても、あがいても運命は変えられないけど

「この悪魔め！」

「巫女が来る」

巫女が来る巫女が来る
巫女が来る巫女が来る
巫女が来る巫女が来る
巫女が来る巫女が来る
巫女が来る・・・・

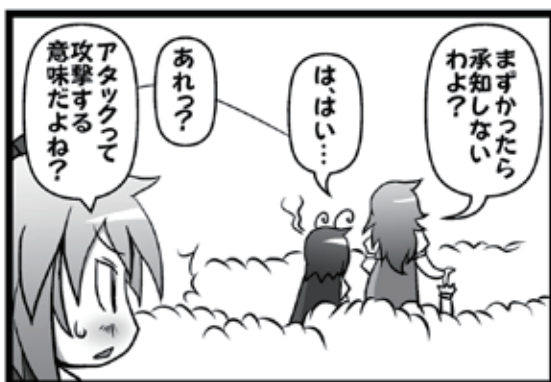
「巫女が来る。
死神の使いが・・・。」

「消えろ！
この悪魔！」

悪魔？
私は巫女よ！
どちらかといえば
神の使い・・・。

「神様なんて！
神様なんて
いなければ！」

こんな悲しい運命の
ために
生まれてくること
なんて無かったのに！
「チルノちゃん
大ちゃん
みすちー
ルーミア・・・・。」
「それなら・・・。
それなら、僕は！」
「・・・・。」
たとえ運命が
変えられなくても
最期まであがいてやる！
でも・・・
あなたは今までに
素晴らしい仲間や経験に
出会えているはずでしょ？
『生きる』ことって
運命と言う結果より
どう生きたかその過程が
一番大切じゃないの？
フフフ・・・。
最期に生きる希望を
見つけたようね。
でも、結果は変わらない。
「・・・。」
だって・・・。
誰も運命には
逆らえないもの・・・。

リグると！アタック！
さ〜
行って
みよう！
ちょ…！
いきなり
ラスボス
じゃない！
えぇーい！
ゆうかさん！
これ、
おいしいので
いっしょに
食べましょう！
まずかったら
承知しない
わよ？
は、はい…
あれっ？
アタックって
攻撃する
意味だよね？
ずるい！
ずるい！
あたいにも
アタック
してよ！
え…
それじゃあ
…ほらっ
ウチのハチが
集めてきた
おいしい蜜だよ
ありがとー！！
そんな事
だろうと
思った
けどさ…
こ、これは
オッケーという
意味ですか？
はぁ？
みつぎものを
貰っただけよ
まずくは
なかったけど
いじめて
やったわ
さ…
さすが！

ひどぅん

『 イケメン（っぽい）リグル 』　東

テーマが挑戦とゆうことで、ここはいつも描かないようなリグルを描くことに挑戦しよう！と思ってこんなことに…イケメンなリグルさんも可愛いよ！

『 新しい服装に挑戦 』　IDEA(GAGrim)

※コメントなし

『 胎児の夢返し 』　蛍光流動

前月号でリグルがこいしに挑むと聞いて。
ちなみに、今回仕上げ以外はリグル板のしぃペインター縛り。

『 一日が終わる 』　芥子川湊☆インパクト

はじめましてー！芥子川湊☆インパクトです！
今回のテーマは「挑戦」ということで、妹紅のお手伝いに挑戦するリグルを描いてみました！
あんまり挑戦って感じじゃないかも…（＾ω＾）

『 リグル・ナイトクラブ 』　焚：

リグルの挑戦を私なりに描かせてもらいました。リグルはかわいい女の子ですｗ

『 無題 』　ADDA

実はリグルの触角はダウジングLロッド。星さん（ご主人様）のパンティーを探して競争するリグルとナズーリン！だという妄想…（笑）

『 今年最後のナイトバグストーム 』 斑

東方非想天則

リグル・ナイトバグ Story Mode 前編

著者：如月翔

　最近蟲達の間を独占している話題がある。単語のみで構成された会話を纏めるとそれは、「変な大きい物を見た」という曖昧でよく判らない話であった。

変わり者が多い幻想郷の人妖でさえもそんな訳の判らない話は聞き流してしまうだろう。

彼等の言葉を理解し、意思の伝達が出来る妖怪がいる。

蛍から妖怪に変化した彼女もその例に漏れない。

特に興味を持たず聞き流し、探そうとすら考えなかった。

しかし、現時点での彼女は山を見つめて呆けている。

呆けている理由はただ一つ、見つけてしまったから。

それはまさに変な大きい物と説明するのが相応しい……、

いやそれを断言することが可能な言葉を彼女は持たなかった。

持っていたとしても、説明する術もないのだが。

見るまでは気にも留めなかったのに、見た瞬間今まで気にならなかったことが嘘のように感じる。

目に映り、視覚に訴えかけるその圧倒的存在感に彼女の心は奪われた。

その何かが居る方角は妖怪の山、以前と比べると大分各所と交流を持つようになったが、

それでもまだ縄張り意識の高い天狗や河童が多数存在する土地であり、

過去入り込んだ巫女や魔法使いを追い払おうとした場所。しかしそれを知らない彼女は、

「ちょっと位なら大丈夫だろう」というとても平和で楽観的な答えを導き出した。

そしてその大きいのが何なのかを調べようと、

沸き上がる好奇心を抑えられず蛍の妖怪は、妖怪の山に向けて飛び立った。

瑕疵有り要塞　Ｓｔａｇｅ一　未踏の滝

「誰にも会わないな」

「――――」

玄武の沢と霧の湖を通り過ぎ、妖怪の山に辿り着いきとうとう滝まで来たリグル。

飛べば簡単に探せるが天狗と追いかけっこを、普通に歩けば河童に出会いそうだと考えた末、麓から整備されていない獣道を歩いてきた。

名前は知らないが大きく綺麗な滝だと思う、

流されているのか水遊びしているのか分から

ないが妖精も多い。
リグルは蟲であるため自然を好む、妖精も自然を好む為妖精が多い場所は落ち着く。
景色も良く、今度ミスティア達と一緒に遊びに来ようかと考え木陰で少し休もうかと座り込む。
「河童とか天狗が来るかと思っていたけど、やっぱりいいんだな～」
「ねぇ……」
「ん？誰もいないのに声が……気のせいかな？」
「全く、ここを妖怪の山と知っての行動かい？」
「知っての行動だけど、追い出されるのは嫌だから黙っていてほしい」
「む、やる気かい？天狗様も居ないし仕方ない相手になるよ」

【洪水「ウーズフラッディング」】
姿を見せないままスペルを宣言するにとり。
宙に浮かび握り潰されたカード、それは独りでに潰れたようにも見える少しだけ異質な光景。
太陽光を反射した透き通る水のように青白い弾が動き発動者を、リグルの移動を制限して守るようにも見えた。
左右を確認し当たらないよう少しだけ前進して軌道上から外れる、正面から扇状に広がる弾を避け反撃する。
「……隠れているのに攻撃してたら意味ないよね」
「……」
独り言のつもりで放った言葉が届いたのか、正面からの攻撃が途絶えた。
場所が分からなくなり、反撃出来なくなってしまった。
避けつつ河童の姿を探してみるも見当たらない。
言わなきゃ良かったと後悔し、適当にばらまいて攻撃してみる。
「そんなんじゃ数撃っても当たらないよ」
「……解除するまで避けるしかないかなあ」
声がするから正面に居ると予想はできるが、細かい位置までは分からない。
このままやっても不毛だと諦め、蟲に話しかける。
『呼んできて欲しい子達が居るんだけどいいかな？』
『イイヨイイヨ』
『マッテテマッテテ』
『来たら待っていてね』
『ワカッタワカッタ』
――リグルは少しだけ面白そうなことを思いついた。

「思ったよりしぶといね」
「蟲だからって舐めないでよね」
時間一杯避け切り、スペルが解除される。
消えていく弾を見ずに、にとりは新たなスペルを発動する。

【河童「のびーるアーム」】
「いい加減姿を出したら？」
「いやいや、今姿を出したら意味ないじゃないか」
何を企んでいるのか分からないため、念をしてスペルが発動する前に下がり距離を取る。
そういえば……河童は腕が伸びると言うのを聞いたことがある、片腕を引っ込めて反対の腕を伸ばすという眉唾な話だが……。
実際に腕が伸びて掴まれたら怖いだろう、しかも今なら相手の姿が見えないというおまけ付き。
「え……？」
「残念だけど、腕は伸びないんだよね」
緑のレーザーは斜めから交差するように、白い小さな弾は規則正しく並び飛んでくる。
スペル名から勘違いしたリグルは慌てて緑と黄色の弾を出しぶつけて相殺を試みた。
不意を突かれた形であったが、急ごしらえの弾で凌げたことに安堵しつつ体勢を立て直しグレイズする。

『ヘンヘン』
『え？変？』
『ココココ』
突然蟲からの声が届く、声のする方に視線を向ける。
言われるまで気がつかなかったが確かに変だ、一見普通の山道のように思えるが一部が可笑しい、陽炎のように揺らいでいるように見える。
ただあまりにも分かりづらいため気のせいだと片付けてしまいそうになる、が念のため確認してみようと話を続けた。
『何かいるの？』
『イルイル』
蟲が宙に浮く光景、羽を広げ飛んでいるわけでもないのに宙に浮いている。
実際はくっついているだけなのだが、見えないため何かの力で浮いているようにしか思えない。
予想外のことだが、蟲が気付いてくれたため攻撃を仕掛ける。
「────!?」
ずっと避けるばかりでほとんど反撃の無かったリグルが、なんの迷いも無いように真っ直ぐにとりの元に向かってくる。
今まで、自分を認識していない、今回のスーツは成功だと喜んでいたにとりは突然の出来事に驚いた。
なんで？どうして？そんな疑問が思考を埋め尽くし足が止まった、何処か故障でもしたのかと体を捻り視線を動かし自身の体を確認するが何処にも目立つ異常は見当たらない。
冷静になろうとすればするほど蟻地獄のように意識が悪い方向に埋まっていく、しかしもう数秒でリグルは真正面に立つことになる、しかもスペルを手にして。
「っく……」
発動中のスペルを無理矢理解除し、リグルに向けて弾をばらまく。
真っ直ぐなレーザーだからこそ突っ込むと言う無茶な手が使えたリグルにしてみれば折角のチャンスが潰されてしまった。
ばらまかれた弾をくぐり抜けて走るなんて芸当は出来ない。
リグルはチャンスを生かしきれず苦虫を噛み潰したような表情をする。
一方にとりはピンチを凌ぐことができたが頬に冷や汗が浮かぶ。
「どんな手を使ったか知らないけどこれで終りにするよ」
にとりが三枚目のスペルを取り出し握りつぶす。
リグルも手にしていたスペル握り発動させる。
【蛍符「地上の彗星」】
【水符「ウォーターカーペット」】
二人の宣言はほぼ同時、しかしリグルの方が展開は遅かった。
にとりの生み出した大量の水が邪魔するもの全てを呑み込む津波のように展開途中のスペルに襲いかかる。
流れる水はまるで上空から流れ落ちる滝のように、スペルを呑み込んでリグルへと迫る。
押し返そうとリグルも負けずに弾幕を当てるが、全てかき消されていった。
「わっ……」
その言葉を最後にリグルは水に隠れて姿が見えなくなった。
「はぁー手強かった……」
確かに追い返そうとしたが自分の意志ではなく、流されてもし何かあったら夢見が悪い。
リグルを探そうとスペルを解除するにとり、しかし見当たらない。
解除するまでの間に何処かに流されてしまったのだろうか？それとも滝に落ちたのだろうか？
やりすぎたかもしれないと手加減しなかったことに少し後悔したが、予想以上に強かったため出来なかった。

「何処まで行っちゃったのかな？」
「ここだよ」
「ひゅい!？」
歩いていたが埒があかないと、走り始めようとしたにとりの肩をリグルが掴み静止させる。
いきなり後ろから声を掛けられて腕を掴まれた事に驚き振り返ると、そこには流されたと思っていたリグルが何故か全く濡れてない状態で立っていた。
そしてスペルを手にしている事に気づき慌てて振りほどこうとするが解けない。

【「季節外れのバタフライストーム」】

にとりの視界をリグルの弾幕が埋め尽くした。

「……うぅ」
「えっと……その、ごめんなさい」

にとりが着ていた光学迷彩は見るも無残な姿に変わり果てていた。
外の世界の技術に憧れ、参考にし、幾度もの失敗を乗り越えてやっと辿り着いた領域。
その技術は、巫女や魔法使いと戦った時と比較すれば一目瞭然な程にまで昇華していた。
思い返せば今までどれほど試行錯誤を重ね時間を費やしただろう……、聞くも涙語るも涙の道のりであるがにとりは泣くのを堪える。
「いや……いいよ、うん仕方ない……また作るから、ところで!」
「な、なに？」
正座を崩したような座り方をし、落ち込んでいたにとりが立ち上がりリグルに詰め寄る。
何か要求される？材料は用意出来そうにないよ？もしかしてあんまり持ってないけどお金とか？
そんな考えがリグルの脳裏に浮かぶが、にとりの言葉とは見事に掠らなかった。
「最後のどうやって避けたの？」
「え……？」
確かに目の前にいるリグルは濡れていない、精々少しだけ服に砂が付いている程度である。
少なくとも最後ににとりが唱えたスペルは本気だった、結果は敗北という形になってしまったが。
途中までは確かにリグルを追い詰めていたし、姿が見えなくなったから流された筈と思っても可笑しくはない。
しかしその思いとは裏腹に何時の間にか背後に回られ、無防備な状態でスペルを受ける羽目になってしまった。
「だって流されたと思っていたんだよ？」
「えっと、擬態だよ」
「擬態ってあの蟲が身を隠す？」
「うん、この辺りに隠れさせていてねここにも居るんだ」
「……本当だ」
よく見ると地面と同じ色に変化した蟲達が数ヶ所に散らばっていた。
思い返すとにとりのスペルは宙に浮かび、地面と平行に進む。
追い詰められながらも地面が濡れておらず仲間の無事からそれに気づいたリグルは、呼んでみたけど、どのタイミングで試そうか悩んでいた仲間の事を思い出し、咄嗟に自分の身を蟲で覆い、地面に伏せて息を潜めた。
ネタばらしを聞いたにとりは、確かにスペースが存在することを知っていた、しかし、それは避けるスペースを用意したわけではなく。
地面に伏せるという相手から丸見えになってしまうため、そんな避け方をする相手がいないと信じ込んでいたから。
「あっはっはっはっはっは」
「……？」
「そんなやり方で避けられるなんて夢にも思わなかったよ、面白いこと思いつくもんだね。それで何か用事でもあるの？」
「捜し物があるんだ、聞きたいことがあるんだけどいい？」
「いいよいいよ、今なら内緒で教えてあげる」
「遠くから大きくて変な物が見えたんだけど何処にあるか分かる？」
「大きくて変な物……神社の御柱かな？」
「神社？紅白は向こうでしょ？」

「いやいや、別のだけどこの山にも神社はあるんだよ」
「へーそうなんだ」
「うん、ちょっと距離はあるけどこの滝を超えて真っ直ぐ行くと湖に出るんだ、そこを更に進むとあるよ」
「ありがとう」
「気にしない気にしない、また会おう」
「またねー」

愉快な風神、高き霊山の地に　Ｓｔａｇｅ二
風神の神社（本殿）

「こんなところにも神社があったんだ」
にとりに教えて貰った通り、滝を超え湖を渡ると神社に辿り着く。
博麗の神社とは似ているが少しだけ違う雰囲気を感じる。
「何か御用ですか？」
神社の奥から一人の神様、八坂神奈子が顔を出す。
「巫女じゃなくて神様が出てくるなんて珍しい神社」
「巫女しかいない神社の方が珍しいのです」
「そう言われるとそうかも、ところでここに大きくて変な……御柱って物があるって聞いたんだけど」
「変……、御柱を見に来たのですか？」
頭上高くに大きな塊が現れ、地面に衝撃を与えそびえ立つ。
御柱と呼ばれるそれは、見るものを圧倒するとてつもなく大きな木であった。
しかし、リグルの探しているものとは違っていた。
「……動かないの？」
「動く？確かにこれはただの木ではありませんが、独りでに動くことはありません」
「なら私の探している物じゃないかな」
「そのようですね、しかし私もこの大きさで動く物がこの山にあるとは聞いていません。ところで」
「？」
「折角ここまで来たのですし、少し遊んでいきませんか？」
今まで纏っていた、穏やかそうな雰囲気が霧散する。
ニヤッという擬音が似合いそうな笑みに思わずリグルは数歩下がった。
質問があったはずなのに、有無を言わさず弾幕ごっこをしてしまいそうになる威圧感。
「スペルの枚数は五枚、こちらから行きますよ」
【筒粥「神の粥」】
言い終わると同時に地面を蹴って宙に浮く、そして静止しスペルを握り潰す。
先程の威圧感は既に消えていたが、リグルは一瞬感じた恐怖を拭い去ることが出来なかった。
「ここまで来た貴方の強さ、見せてもらいます」
神奈子を中心に赤と紫の大きな弾がそれぞれ広がり円を形作る。
それらはリグルの目の前まで迫ったところで、いきなり小さな粒に変化した。
小さな粒となった弾は重なり交差する、小さくなったことから一見すると避け易そうになったと感じるが、赤と紫各々に少しずつズレが生じる為時間が経てば経つほど難しくなる。
「っと……」
「今のを避けるとは、さすが幻想郷……面白い」
「これ位避けられるわ！」
「なら次はこれで、少しずつ難しくなりますよ」
【神祭「エクスパンデッド・オンバシラ」】
にとりの「ウォーターカーペット」と似ていると思ったが、それは直ぐに勘違いだと気付く。
赤く速い御柱が一ヶ所だけの退路を中央に作り、共に放たれた青く遅い御札がその退路を埋めるように動く。
避け方が分からず戸惑うリグルに対して、神奈子が楽しそうな笑みを浮かべる。
「あ」

戸惑う合間に退路を断たれたリグルは、ポケットからスペルを取り出し握り潰す。
握り潰されたスペルカードが光の粒子となって桜の花弁のように舞い散る。

【隠蟲「永夜蟄居」】

唱えたスペルが御札と御柱を消して神奈子に向かうが、掠りもせず避けられてしまった。
スペルが切れ御柱と御札が何事も無かったかのように再び出現し、降り注ごうとしていた。
パターンを組み立て、神奈子から十数メートル離れた場所でリグルはそれを待ち受ける。
同じパターンで降り注ぐ御柱を無視し、御札を引きつける。御柱が通過した直後に左右移動を素早く行い、御札は誰もいない場所を虚しく通過した。
上手くいったと一安心し思わず笑顔になるリグル、そしてスペルを解除したにも関わらず楽しそうな笑みを崩さない神奈子。
「――――楽しい」
「え？」
「楽しくないですか？」
「……楽しいですよ」
「それは良かった、さぁ三枚目」

【蛇符「グラウンドサーペント」】

目に写る景色が変わらず何も起こらないと静止していたが不意に何かを感じ後ろに下がる。
次の瞬間左から右にリグルの前を蛇のような黄色いレーザーが通過する。
「止まっていると危ないですよ、それと背面にも注意」
「ひぇぇ……」
右前、後、左前、左後、右、右後、前、左と休むまもなくレーザーが発射される。
空に浮かぶ神奈子から目を離さないようにしつつレーザーをギリギリで躱す。
しかしこのままでは保たないと判断したリグルは蟲を数匹呼び寄せ、自分の死角になる後ろと左右に配置する。レーザーの速度と蟲からの伝達速度を考えると焼け石に水だがそれでも情報をくれるのは有り難い。
「ミギミギ」
「ウシロウシロ」
「ヒダリヒダリ」
蟲からの情報と自分が見た情報を纏め狙わないグレイズを重ね、服とマントを焦がす。
焦げた臭いが鼻を刺激するが、構っている余裕はない。少しでも動くのが遅れたらレーザーに当たるのは自分自身なのだ。
しかし、元々大量の情報を処理するほどの頭を持っていないリグルは矢継ぎ早に飛び交う情報量に処理速度が追い付かず限界を超えてしまい動きが止まる。
次は何処？前には何もない、後ろ？
何も分からず後ろに振り返ったリグル、が振り返ると同時にレーザーが脇腹に命中し倒れこむ。
「あ……」
神奈子の生み出した蛇は、細いとはいえ立派なレーザーだ。
見た目のインパクトであれば魔法使いに劣るし威力もそれ程高いわけではない、しかし熱はレーザーとしてそれなりに持っており何より速い。
当たれば衝撃もあるから熱くて痛い。
「……まだ時間は残っていますが、続けますか？」
レーザーを停止させ、問いかける神奈子。
問いかけられたリグルは脇腹に手を当てながら立ち上がる、だがこのまま続けても避ける自信はなかった。
けれども同時に諦めたくもない理由もあった。勝てないのはマトモに戦った場合であり、今は弾幕ごっこをしているということ。
弾幕ごっこは妖怪が異変を起こしやすく、人間が異変を解決しやすくするために力の弱い人間でも力の強い妖怪に勝てるよう考えられたルール。
弱者でも強者に勝つ可能性がある、そのルールですら諦めてしまったら、何も出来なくなってしまう気がした。
それに周囲にはリグルの使役する仲間がいる、弱いリグルよりも更に弱いただの蟲。
ごっこ遊びとはいえ流れ弾にでも当たったらそれだけで死んでしまうようなただの蟲。

――――そんな仲間が神を相手に逃げずに居てくれる、見てくれる、力を貸してくれるのだ。

「私が諦めるわけにはいかないよね」
呼吸を整え、神奈子を見上げる。
力の優劣なんて関係ない、弱者にだって譲れないプライドはある、保ちたい尊厳だってある。
「少し、野暮なことを聞いたようですね」
リグルの真っ直ぐな視線を受け止めた神奈子は言葉を紡ぐ。

「しかし、このスペルは集中力を使うため他のことが出来なくなるのが欠点ですね、クルクルと時計のような単純な動きなら簡単なのですが」
「……？」
「何でもありません、ただの独り言です。続けますよ」
再び全方向から蛇が順番に発射される。
先程の事が懲りたのか蟲を下がらせ、避けに専念する。少し浮かび上がったり地上に降りたりを繰り返し避けるうちにふと気付く。
それは一本一本を避けるのではなく、常に移動して避けるスペルではないのかと言う事、そしてその移動方法が時計回りなのではないのかと。
「もしかして、時計みたいに回りながら避けるの？」

「……正解、これ以上は無駄のようですね」
【贄符「御射山御狩神事」】
神奈子は四枚目のスペルを発動させる。
赤と白の種類の違う弾が重なり大きな円を描く、白い弾が先行し赤のナイフが後に続く。
しかし、先程のレーザーに比べれば密度は濃いが避けやすい。
「少し簡単すぎましたか」
「さっきの蛇と比べたら簡単ね」
白い弾を避ける。
「……次は自信作なので一休みということで」
「有り難く貰っておくわ」
赤いナイフを避ける。
「そろそろ準備はいいですか？それとももう少し続けますか？」
「何時でもいいよ」

強がってみたものの、これ以上体力を消耗するわけには行かない。
にとりを含めての二連戦は予想以上にリグルの体力を奪っていた。
直ぐに動けなくなるということはないが、自信作と言われたことから早急に次のスペル切り替えて欲しいと考える。
それを理解してか、理解せずか、神奈子はスペルを解除し、五枚目――――最後のスペルを取り出す。

【「マウンテン・オブ・フェイス」】

「神の荒ぶる御霊を味わうと良い！」
赤、紫、青、黄緑、緑、水の六色の御札が周囲を埋め尽くし、三色ずつ交互に飛び交う。
よく見ると色ごとに向かってくるルートは微妙に違うが、避けることに必死になっているリグルはそれに気づかない。
「……くぅっ！」
赤を早く大きく避ければ紫の回避が間に合わない、かといってギリギリまで引きつけてから避けようとすれば赤に当たる。
一瞬足りとも気を抜くことが出来ない、正に苦労して辿り着いた末の最後に相応しいスペルだ。
次々生み出される御札に応戦しつつ避けるが、数が多すぎて全て捌くことが出来ない。
黄緑に弾をぶつけ水をやり過ごす、青を避けて緑を迎撃する。
御札を壊し、御札を避ける、言葉にすると短く簡単に聞こえるが、後どれだけこれを繰り

返すのかと考えてしまうと心が折れてしまいそうになる。
ルールにのっとって行われると言っても、神と妖怪……元々持つ力の差が少しずつリグルを追い詰めて行く。
それもそうだ、リグルは知りもしないが相手は、今やほぼ忘れ去られたと言っても過去国に攻め込むほどの力を持った神であり。
更にこの幻想の地で天狗や河童等から信仰を得、力を取り戻している。
弾に被弾、もしくはスペルを避けきられたら負けというルール上。既に満身創痍になりかけているリグルに神奈子まで届く弾幕は放てない、勝つ為にはこのスペルを避けきるしかない。
――――それが分かっているから自分の身を守る為だけに全力を注ぎ避ける。
――――それを理解しているから眼前に広がる御札を打ち落す為だけに弾を放つ。
過ぎる時間と擦り減る体力のどちらが先にゼロになるかという耐久勝負になっていた。
「お見事です」
「はぁ……はぁ……」
無事に避けきったリグルは大の字に倒れそうになり、神奈子に抱きとめられる。
「あ、ありがとうございます」
「お疲れ様、少し休んでいくといい」
そのまま肩に担ぎ上げられ母屋に連れて行かれる。
座布団を用意され、正座で座る。
「楽にしていいよ、余計に疲れるでしょ？」
「はい……」
足を崩して座り直す。
広い母屋の筈だが、神奈子以外の気配はなく涼しい風の吹く音以外何も無い。
「あの、誰もいないんですか？」
「居るけど、二人とも今は出かけていまして、お茶飲みますか？」
「そうなんですか……、あ、いただきます」
淹れてもらったお茶を飲みつつ話を聞く。
「朝に早苗は泊まると言い神社へ、諏訪子は昼前に気付いたらいなくなって」
「早苗？諏訪子？」
「あぁ、言っていませんでしたね、諏訪子は私と同じ神で早苗は……人間、分かりやすく言えば巫女みたいなポジションです」
「へぇー」
「ところで、どんな物を探していたのですか？」
「山の方で段々大きくなる物が動いていたのが見えたんです、前から皆から話を聞いていましたけどよく分からないから気にしてなかったんですけどね」
「動いて大きくなる物……少し心当たりがあります、蟲も中々面白い言い回しをしますね」
お茶……ではなくお酒を呑んでいた神奈子は笑う。
心当たりがあると言われ思わずリグルは身を乗り出す。
「知っているんですか？」
「多分当たっていると思います、教えて欲しいですか？」
「教えて欲しいです」
「別に構わないですよ、ただ一つ聞いて欲しいことがありますが」
笑顔から一転真面目な顔になる。
立ち上がり少し顔を下げリグルを見下ろしながら発する台詞は……。
「夕飯食べていきませんか？」
とても拍子抜けする台詞だった。
「ご馳走様でした」
「お粗末さまでした」
「いや、助かりました一人で食事するのは少し、かといって宴会開くほど蓄えも無くて」
「持ち寄るというのは？」
「急でしたし、それで持ち寄ってというのもどうかと思いまして」
洗い物を終え戻ってきた神奈子がお礼だよ、

とお守りを放り投げる。
ちゃぶ台の上を放物線を描いて通過しリグルの手元に落ちる。
「何ですかこれ？」
「お守り」
「いや、それは分かりますけど」
「捜し物が見つかるように、それと一回限りの神徳体験？」
「神徳体験？」
「効果は使ってみてのお楽しみ、もし気に入ったらまた来るといい、歓迎します」
「ありがとうございます」
妖怪の山に辿り着いたのは昼過ぎだったが既に太陽は沈み、外には月が昇っている。
守矢神社では食事だけではなくお風呂もご馳走になり、ちょっとした外の道具も使わせて貰ったリグル。
心当たりがあると言った神奈子が示した場所は迷いの竹林と人里付近。
明日行ってみようとリグルは目を閉じて意識を手放した。

……トラウマにならなかったのか、蛇と御札の悪夢は見なかった。

（続く）

〈作者コメント〉
　バトル……えぇバトルです、某ドロワ合同の人やかっこいい美鈴の人みたいに誰かを惹きつけ魅せる文章書けるようになりたいと改めて感じました。難しくて辞めようかと思いましたが、テーマに合ってますし非想天則に出てないキャラを出したかったと以前から考えていたので挑戦。ところで何気に後編に出てくるキャラのネタバレしてますね

東方妖々蟲

～ another story of long winter

著者：壁々

「…私が、やらなきゃいけないんだ」
そう、誰に言うでもなくつぶやいて、リグル・ナイトバグは飛び立った。
時は4月、桜のかわりに雪の舞う異常な春―
「まってて、春を待つみんな。すぐに帰ってくるから。」

これは、あの長い冬を終わらせて春を取り戻すために動いた、一人の妖怪の挑戦―

「ついに見つけた！お前が黒幕だな！」
ついにというほど私は見つけにくい場所にいた覚えもないし、むしろこっちから出てきてあげたぐらいの感じなんだけど。さっきからこのへんうろうろしててぶっちゃけ目障りだったのよね。というかいきなり黒幕呼ばわりされても何のことやらさっぱり。この子、見た目蟲の妖怪っぽいけどあれかしら、頭もやっぱり蟲並みなのかしら。見た目は子供、頭脳は蟲けら。ああ哀れを誘うキャッチフレーズね、こんな哀れな子もなかなか珍しいわ。仕方ないから相手してあげましょう。とか思いつつ、レティ・ホワイトロックは
「…なんのことやら」
と、てきとうに、それでも正直に返答した。
「とぼけるな！どうやってるのか知らないけど、幻想郷に春が来ないのはお前のせいだろう！幻想郷の春を返せ！」
どうやってるのかも知らないのになんで私だと思ったのかしら、ああやっぱり私が雪女だからかしら。雪女が冬を呼ぶとか勘違いしてるのかしらね、冬が雪女を呼ぶのに。多いのよねそういう勘違いしてる輩が。しかしこの子、口を開くごとに残念な思考能力なのがばれてくわね。というかこの異変解決しようと思って私のところに来るやつなんて、結局みんな残念な思考能力なんでしょうね、これからは黒幕かって疑われたらてきとうに認めてあげようかしらね。まぁいいわ、とりあえずここは事実をさくっと伝えて御帰り願いますか。
「春ねぇ。まぁ私を何しても春は戻ってこないんだけど。」
小さくため息をつきながら、呆れと疲れがまざった顔でレティはけだるげに事実を伝えた。
「…つまりお前の背後にはボスがいるんだな！まずはお前を倒してそいつのところまで連れてってもらうわ！」
お前は何を言っているんだ。ボスって。組織社会なんて天狗とか河童くらいしか作らないって知らないのかしら。思考能力が低いっていうより、変に熱くなって暴走してんのかしらね。ダメだこいつ早くなんとかしないと。冬眠させればいいのかしら、さしあたって。むしろ永眠でもいいかも。はぁーやれやれ。自然に盛大なため息が出せるほどだるくなるのっていつぶりかしらね。
盛大に出したため息の白さが空気中から綺麗になくなるくらいまでゆっくりと間をおいて、面倒事にしないことを諦めたレティはげんなりした顔で
「…ようするに、私と闘いに来たのね？？」
「闘いに来たんじゃない。倒しに来たんだ」
つっこむのもめんどくせぇー
「・・・言い直すわ、私に喧嘩売りに来たのね？」
「終わらない春もここまでだ！覚悟しろ！」
「あんたがね」
もういいわ、手加減とかまぁ、もともとする

気はなかったけど、全力でやる気もなかったのよね。けどちょっと久々にいらっときたわー。永眠の方向でひとついきますか。
「白符『アンデュレイションレイ』」
どうせ蟲の妖怪なんでしょ。冬の雪山で力が発揮できるのか、否、それ以前。
あんたはこの寒さに耐えられるのかな―。

@@@

しばらく後

「…………？」
おかしい…寒気の効きが弱い。攻撃してこないのはまぁ、わかるにしても、回避動作に陰りがない…
「ふふ、不思議に思ってるようね。なぜ寒さが私に効かないのかって」
なんなんだろう、なんかこいつの発言は微妙に神経を逆なでされるなぁ。まぁいいや、話してくれるんならそれはそれで。
「寒さとはつまるところ、自分の体温と周りの空気の温度差によって感じるもの。元が変温動物である私なら、体温を極限までさげることも可能！」
「なるほどねぇ、大変だったでしょうね、そこまで体温下げるの」
「ふふふ、あのつらさもお前を倒すために乗り越えてきたもの、3日前から～
ああもう、体温なみに冷静な思考回路が働いてくれてればどれだけ楽だったことか。というかもっと穏便にすんだんじゃないかしら、冷静な状態なら。それとも体温がアレなことになってるから思考能力もアレなのかしら。むしろ思考能力より、テンションがおかしいのかもね、体温がアレで。冬が終わらないから、私もここまで色々してたけど、正直もうだるいのよね実際。ここにきてこんなのでしょ、もうやってられないったら。
もはやレティの目は完全にリグルから外れ、どこか虚空を見やっていた。静かな雪山だったついさっきまでを懐古してたのかもしれない。
「～～～さあ、次は私のターン！」
あんたのターンなんてあったんか、私としては強いて言うならずっと私のターンだと思ってた。ああでもずっとしゃべくってたんだよねあんた。じゃあさっきからあんたのターンだ。ずっと。ていうかもうほんとどうでもいいんだけどね。どっちがどうとかもう関係あるのかな。
「あんたが何か出来るの？他の蟲は眠るこの時期に！この場所で！」
「冬を越え、春を迎えるために力を蓄えてきた幼虫よ！今ここで春を呼ぶべくその力を解き放て！鬼蟲『バグワームクライ』！！」
「！？
っく！」
私の弾幕壁をつっきって来る！速い、大きいーいや、それ以上に、強い！
バグワーム…蓑蟲の鳴き声、か！弾が妖力を纏って鳴きながら降ってくるスペル！
…だけど
「この程度の密度で！」
「私の蟲がこの程度だと思うなよ！」
「…っ！？」
後ろで妖力の急増！？…何か知らないけど！
「寒符『コールドスナップ』！」
寒波の弾幕で自分の周りを覆ってしまえば！
…後ろに手ごたえあり、か、やっぱり。
…なるほど、蓑蟲弾は一定距離で羽化するのね。蝶…いや、蛾かな、ともかく羽化した弾が私めがけてくるから、密度はいらなかったわけだ。
面倒な弾幕ね。まぁ、キャラ崩壊してる本人よりは面倒さはないけど。けどなんか結構対策立ててきてるのね、さっきそれをうだうだと語ってたみたいだけど、一応本気でやってたみたいね。まぁ真偽はわからないけど、聞いてなかったから。
「なるほどねぇ！一応、やるじゃないとは言っておくわ！」
「敵に褒められてもうれしくないよ！」
「そう。でも、もうおしまい。あんたは私に勝てないよ。」
「へぇ、やってみなよ！どんな攻撃も打ち破って、お前を倒す！」
意気込むリグル。それに対してレティのとった行動は
今、展開しているスペルカードを全て解除した。

「・・・!?」
そればかりか、通常弾幕すら全て止めたのだ。今のレティは完全な無抵抗、無攻撃の状態。
「…何してる?」
あれだけのことを言っておいて、この行動。怪しさにリグルは身を固め、警戒する。
「してるっていうかしたわよ、私はもう。」
「…何?」
そんなリグルの警戒をせせらわらうように、満面の笑みでレティは言い放つ。
「あんたの挑発を無視した。あんたが蟲だから。」

・・・・・・・・

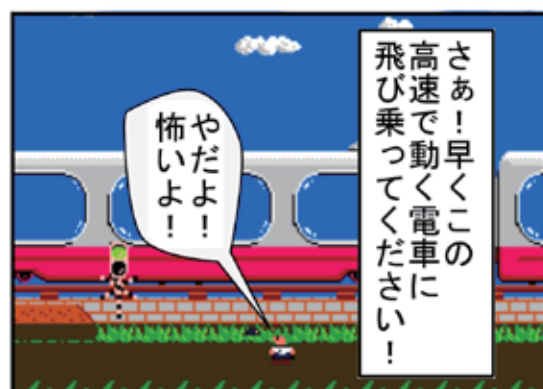
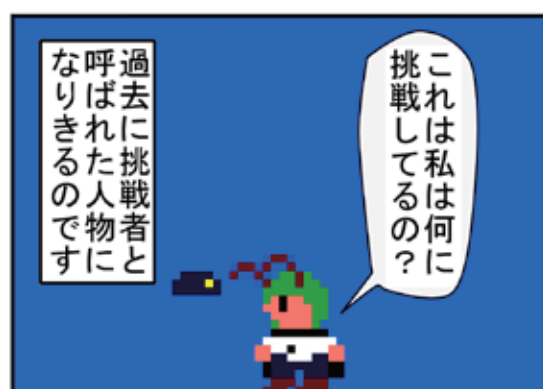
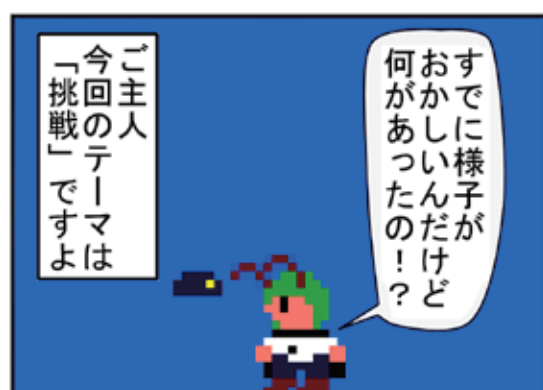
「…s」
永劫とも思えるような一瞬の凍りついた時間。その永劫の時がまた動くと思われた時、リグルは口を開いて何かを言おうとした瞬間、体を折り、膝をついて苦しみだした。弾幕も保てず、全ての弾が自壊を起こす。
「寒い、でしょ?」
そんなリグルに対して悠然と近づきながら、レティは静かに、笑みを絶やさずに攻撃を続ける。
「あ…が…」
「寒さとは何も体温との差を表す物理現象だけではないわ。その言霊の中には精神への作用の意味が含まれている。私は精神の寒気も操れる。精神に頼る妖怪に対して特効の、私の切り札。貴方の心はまさに今、極寒の山奥で裸になるに等しい状態。」
「くぅ…ぅ…ま…だ…」
「やめときなさいな。まだ私に逆らうの?温い炬燵に入ってた心ならまだしも。それを覆う布団もふっとんでしまった、裸の心の貴方が—」
「〜〜〜〜っ!!!」
「闘えるのかしら?」
もはや言葉を発することもかなわない。それほどの苦痛。胸の奥、どこかわからない場所があらん限りの力で締め付けられる。本来あるべき形を保てぬほどに。
リグルは、もう、雪原に倒れ伏していた。まるで、そこにある何かを抱きとめて逃がさぬように、守るように、胸の前で手を強く交差させて。
「…こんなところで寝たら遭難必至ね。」
「…………ぁ…」
「助けてほしい?」
頭で理解できる。理解してしまう。先の読める、ベタなボケ。
寒い、寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い—
「…ぃ…ゃ…」
それは、質問に対してではなく、ただ単純なレティの次の言葉への拒絶。かろうじて動く頭は、イエスでもノーでも、『それ』を言わされるのがわかってしまったから。胸の何かが、壊れないように、ただ、拒絶したかっただけだった。。
でも、レティは、その答えを受けて、満面の笑みで言い放った。
「そうなんですかー助けてほしくないんですかー。」
胸の奥の何かが、小さく、小さく弾けたような気がした。
「じゃ、さよなら。もう逢わないかもね」
おしかったわねーあそこで答えなければこのとどめはなかったんだけどねー。ああ嫌ねやっぱこの技。やってる自分が寒いったらありゃしない。めったに使えないわよねぇ、こっちが持たないわホント。それに勝った気もしないし。やってらんないわー。
…あら、なんかまた誰かこっち来てる…人間っぽいわねなんか。なんなのかしら、あいつらも春の奪還にここに来たのかしら。今日はそういう日なのかしら。もういいわ、こっちから出向いてさっさとお帰り願おうかしらねー。
倒れ伏し、ピクリとも動かなくなったリグル

に背を向けて、レティは山に入ってきた人間の方へ向かっていった。

東方妖々蟲～ another story of long winter
リグル・ナイトバグ
リザルト（lunatic）
1面ゲームオーバー

＊＊＊＊

どれほどの間気を失っていたのか。ふと目が覚めるとそこは桜が咲く、普通の春の山だった。
「…………」
ああ、あったかいなぁ……」
胸の中の何かはちゃんと残っていた。否、一度失われたものが戻ってきたのかもしれない。それほどまでに苛烈な、残酷な攻撃だった。
その事実がどれだけありがたいことか、リグルはしみじみとかみしめた。
そして、ひとしきり暖かさを堪能したリグルは立ちあがって
「……みんな、おはよう」
誰に言うでもなくつぶやいて飛び立った。

（終）

〈作者コメント〉
　思いついたのが15日でした。だからもう、このSSはノリだけでできています。作者的にも挑戦です。ノリだけのSS。いいのかこれ。

応援しようぜ

そらとぶ ふぁんたじすた

かいたひと 们佳

そいつの名はチャレンジャー

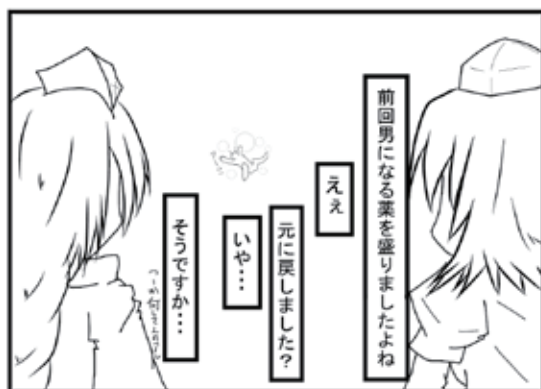
〜挑戦編〜

描いたバカ：怨羅悪

あいつの名はチャレンジャー

ぼくらの名はチャレンジャー

リグルをいじりたい
※内容はひかえめ
実験
何故かリグルが男になりました
どーしてこんなことに…
鳩●が辞任し
知ってる
出来た出来た
クククク……
描いた人
豆板醤

取材
何故かリグルの触角がソニックブームになりました
言うと思った
可愛い子
前回男になる薬を盛りましたよね
ええ
元に戻しました?
いや…
そうですか…

異変を直感的にタッチ（おさわり）することによって解決するゲーム。ちょっぴりサドな主人公「風見幽香」が助手の「りぐる」と地味に大活躍する「おさわりアドベンチャー」タッチペンで触ったり、すり潰したり、抜いたり、千切ったり色々やってみよう！

かいた人　角右衛門　秋水

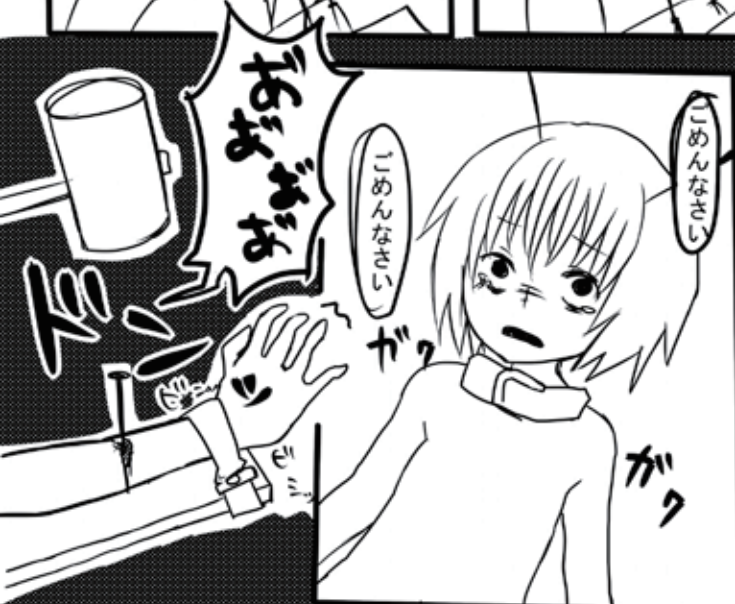
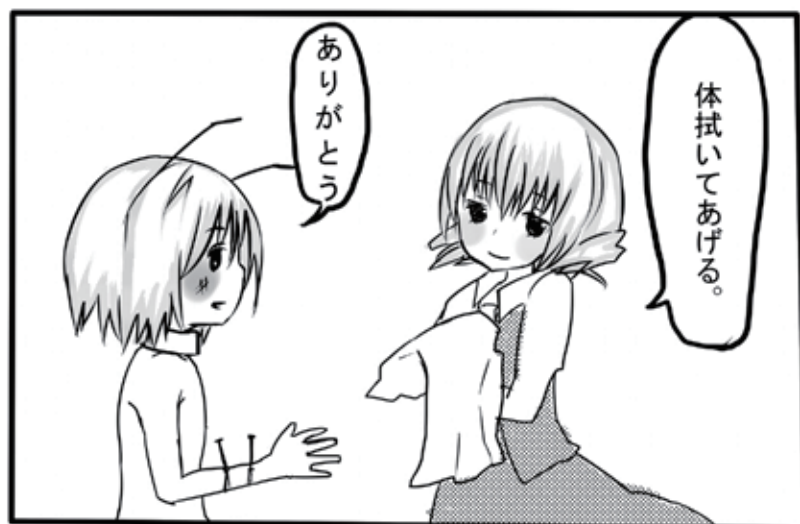
↑字が汚ない

※本編とは無関係です。

素材お借りしました。pixiv 7215471

おじょうさん
夜の一人歩きは危ないよ。
悪
イラ
イラ
夜に一人歩きしている人に話しかける方が危ないわ。
!?
人じゃないけど
ああ、汚れてしまった。
ドシャ
ギィッ
洗ってから行きましょ
たすけて…

はい、お水
ゴクン
ゴボッ
ゲホッ
お腹すいてる？
コクン
よし
これは嫌い？
おいしいよ脳みそ
ゲホッ
ゴボ
おえええぇ～
分かった
脳みそなら食べやすいでしょ？
肉は固そう
あ、
ガタ
ガタ
ガク
いいもの持ってきたよ。

おいしい。
体拭いてあげる。
ありがとう
じゃあ、
毎日持ってくる。
ズキッ
これはまだ取らない方がいいわね。
うん
ごめんなさい
ごめんなさい
ガク
ガク
何から何までありがとう。幽香さん。
やめて
リグル

大丈夫よ
！？夢？
数日後
おはようございます幽香さん。
ふわぁぁあぁ
一緒に居てあげるわ。
大分良くなったわね。
さすが妖怪
おかげさまで
もうそろそろ一人でも大丈夫だよ。
まだ、ダメよ。
ピク
!?
ブチイッ
平気、とても元気だよ
どうしてそんなこと言うの？
——っ？！
治りかけに抜くと楽しいのよ
返し針がついてる拷問器具だから。

どうして？

あっ
ブッ

やめて
ぶつっ
あがっ
ぶつん

そうそう、あの果物はね。
中毒性があるから
食べ続けないと
頭が狂って死んじゃうの。

またああいう目にあったらどうするの？
たからずーっとそばに
居てあげるよ。
ひぐっ

だから
逃げちゃダメだよ？

私が守って
あげるんだから
Wriggle & Yuka
Sweet berry pie
yummy

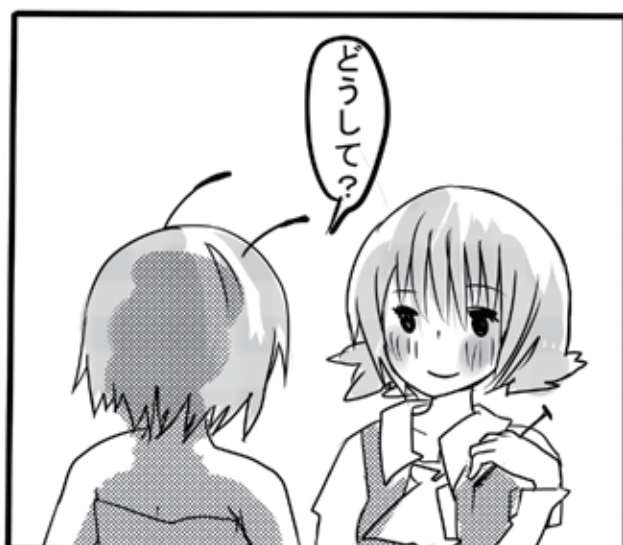
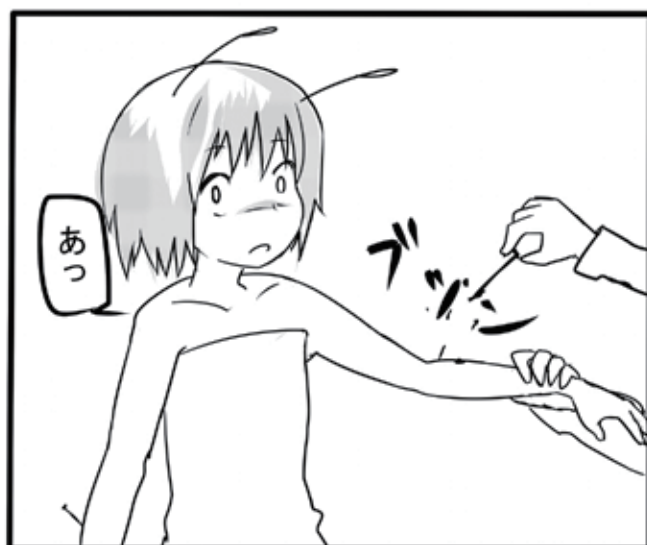
おまけーね。

痛みを伴うものしか ボクらは愛と認めない。

（という点では生ぬるかった。）

リグル・ナイトバグの日常

～道案内にて、霊烏路空と～

著者：夏樹　真

その日は、午後を回り厳しい暑さに見舞われていた。

　森の木々は緑の深みを増していき、蟲達の囁きがその生を謳歌するが如く聞こえてくる。空では鳥達の声が響き渡っていた。夏の足音が、近づいているというのを感じさせている。

　そんな初夏の兆しを見せている森の中で、蛍の妖怪であるリグル・ナイトバグは木陰でのんびりと座っていた。緩やかに流れる風が緑色のショートヘヤーと触覚を揺らしている。日陰に非難しているのは、黒いマントが熱を帯びてやっていられなかったからだった。

　まだ夏の始まりだというのに、リグルの肌を熱気が包み込んでいるかのような感覚。これから先もっと暑くなるのかと考えると、嫌になってくるというものである。

「あっつーい……こう暑いと、何もしたくないなぁ」

　額からにじり出る汗を拭いながら、ただぼーっと空を眺めるしか出来なかった。こうも暑くなってきては、何かをしようという気持ちも中々起きないらしい。

　昼に活動する蟲達ならば問題ないのだろうが、リグルは蛍の妖怪であるため暑さには強くなかった。

　あまりにも暑いため、紅いお屋敷の側にある湖に遊びに行こうかなぁと空を眺めながら考えていたとき。

　快晴の空に、何かの黒い影を確認した。ゆっくりと空を横切るように飛んでいるようだった。

「なんだろ、あれ……鳥にしては大きいっていうかこっちにくるー！？」

　それまでゆっくりと飛んでいた影だったが、リグルが呟くと同時にこちらに向かって急速に近づいてきた。

　その黒い影のあまりの速さに、リグルは逃げる暇もなかった。ぶつかる、と思った瞬間その影は大きな翼をはためかせて急減速し、リグルの目の前へと降り立った。減速した際の風でリグルの前髪がぶわっと宙を舞った。

　突然空からやってきたもの、それは。

「良かった、こんなところで誰かに遭遇できるとは思ってなかったわ。これで道が聞ける！」

　どこまでも黒く長い髪、それと同じく大きな黒の翼。頭にはリグルの髪の色よりは薄い緑色をした大きなリボンをつけている。白いブラウスとリボンと同じ色をしたスカート。ブラウスの中央には一際目立つ、大きな赤い丸い何かが付いていた。よくよく見ると、それは大きな目のようにも見えた。背中にはリグルと同じようにマントを羽織っていた。ただ、そのマントの内側にはなんともいえない、夜空のような模様替えがかれている。

　突如現れた、大きな翼を携えた少女。リグルが驚いて口をパクパクと開け閉めしているのに気づかないのか、一方的に話を続けてくる。

「あ、私の名前は霊烏路空っていうの。空でもお空でも好きに呼んでいいわよ」

　困惑するリグルを気にすることもなく、自身の名前を空と名乗った少女は話を続けていく。

「でも本当良かった。途方にくれていたところなのよ。貴方の名前は？」

「えっと、リグル・ナイトバグ……だけど」
「そう、じゃあリグル。私のお願いを聞いてもらえるかな！」
その言葉に酷く、酷く嫌な予感がした。
大体こういうのは面倒ごとに巻き込まれる前兆なのである。リグルの苦労レーダーがはっきりと警告を告げていた。
しかし話を無視して、逃げるというのは不可能に思えた。さっきの空からここへとやってくる動きを見ても、リグルなんかより全然早かった。身に纏う雰囲気からも、リグルよりは格上のものであるというのが感じ取れる。
つまるところ。リグルに逃げ道などないということだった。
はぁ、という小さなため息をばれない様について。リグルを頭を縦に振ることにした。
「良かったー、リグルが話の分かる人で助かったわ！」
頷いたリグルを見て、空は嬉しそうに笑顔を浮かべた。その笑顔は、見ていて気持ちがいいくらいの素直な笑顔だった。
「それで、何が聞きたいんです？」
「えっとね。あ、話し方は楽な感じで構わないよ」
「あ、うん。わかった」
「それでね、えっとなんて言ったっけ。なんとか神社……なんか紅白なのがいるところに行きたいの」
ふむ、とリグルは首をかしげる。
紅白のいる神社というと十中八九、博霊神社のことだろう。
「博霊神社のことかな、多分」
「そうそう、そこに行きたいの。道分かる？」
どうやらあっていたらしい。博霊神社ならば幸いにもここからそれほど離れた場所ではない。だが、あそこに何の用事があるのだろうか。
一部の物好きな人間と、一部の物好きな妖怪くらいしか立ち寄ることがない場所。それがリグルの中での博霊神社の認識である。宴会がある場合などはリグルも行く事はあるが、それでも平常時には近づきたいとは思えない場所であった。あそこの巫女はなんだか怖い。
どちらにせよ、道を聞きたいだけというのならば教えてあげればいい。これでついて来いなどといわれてたらどうしようもないが、そうならないのを祈るしかなかった。
「えーっと、博霊神社ならここから結構近いよ。まずは右手に行って、そのまままっすぐ飛んでいくの。途中で一際大きな木が見えるから、それを目印に今度は左に行く感じかな。そしたら、人が歩くような道が見えると思うから、あとはそれを辿っていけばすぐに着くと思う」
「なるほどー、思ってたよりも近いのね。まぁ私にかかれば楽勝よね！」
道を聞いた側だというのに、やけに自信満々で大きく頷く空。
そんな空を見て、大丈夫かなぁと言う不安がリグルの中で湧き上がる。なんだか、誰かに似ている気がしてならない。それが誰かが、ちょっと思い出せないのだが。
とりあえず、これで自分の役目は終わっただろう。心の中で胸をなでおろすと、自身のレーダーの精度が落ちたのかなと一人思案する。
いや、たまにはこういうこともあっていいはずだ。そう結論付けて、空を見送ることにした。
「助かったわ、もしまた会ったら何かお礼をするね。温泉卵とかあげるわ！」
「お、温泉卵……とりあえず、力になれて良かったよ」
笑顔の空につられて、リグルもぎこちない笑みを返す。
なんにしても、これでリグルの仕事は終わった。
はず、であった。
「じゃあねーリグル。また会いましょう！」
空が、左側を向いていなければ。
「ってちょっと待てぇぇぇ！」
思わず叫んだリグルが、ばっと空の左手を掴む。飛び立とうとしていた空は突然つかまれたことでバランスを崩してしまう。飛び立とうとしていた力を殺しきれなかったのか、そのまま二人して前のめりとなり倒れこんでしまった。
空を下に敷く感じで倒れる二人。いきなり

倒された空は、その不満を隠そうとせずぶつけてくる。
「いたた……何よリグル、邪魔しないでよー！」
「何よも何も、なんでそっちに行こうとしてるの!?」
「うー、だって左に行くって言ってたじゃない」
「最初は右だよ！」
「……うにゅ？」
　明らかに頭にハテナマークを浮かべている空。
　リグルの背中に、嫌な汗が流れる。
「えっと、ちょっと私が説明した行き道覚えてる？」
「もちろんよ！」
　自信満々に頷く空。
　リグルがその上から退くと、跳ね上がるように立ち上がってリグルよりは大きな胸を反らす。ちょっとだけ、リグルの表情が曇ったのにも気づくことなく堂々と話す。
「最初に左に行って、それからしばらくしたら見える人が歩く道をついていって大きな木を見つけて、それからえーっと……到着？」
「全然違うじゃない、今さっき説明したのにー！」
「あはは、私って道とか覚えるの苦手なんだよねー」
　覚えるのが苦手って言うレベルじゃないっと叫びたいリグルだったが、そこはグッと堪える。
　これ以上余計なことを言ったとしても、きっと意味はない。もっと簡単に済ませる手段は一つしかない。
　大きなため息が、リグルの口から出た。
「仕方ないなぁ……私が連れて行ってあげるよ」
「えっ案内してくれるの！」
「だって、お空って一人じゃ絶対にたどり着けそうにないんだもん……」
「やった、ありがとーリグルっ！」
　リグルの申し出が余程嬉しかったのか、空は不満そうな顔から満面の笑みへと変わると、そのまま飛びついてくる。
　うわわっとリグルはなんとかその体を受け止める。胸に当たる感触の差だけがちょっと、悲しかった。
「ちょっと、離れてって！」
「だって嬉しかったんだもんー」
　リグルは空を引き剥がすようにすると、ちょっとだけ顔が熱くなっているのを感じた。
「分かったから、ちゃんとついてきてよ？」
「はーい！」
　まるで親が子供に告げるように。
　リグルの声に対して、手を上げて元気良く返事をする空。そんな姿がどこか可愛らしく感じてしまい、リグルの頬を緩ませる。
　その後、更に苦労するということも気づかぬままに。

◇◆◇◆◇◆◇◆

　リグルは空を先導して博霊神社を目指していたのだが、その道は困難を極めた。
　空が何か珍しいものがあるとすぐにそちらへと気を向けて、フラフラと移動してしまうのである。
　その為、ものの数十分で辿り着くはずの道に数時間かかってしまったのも、仕方がないのかもしれない。
　そして、博霊神社へと到る。

博霊神社へと繋がる階段。
　それを前にして、リグルと空は対照的なポーズをしていた。
「つ、疲れ……た……」
　地面に両手を付いて、肩で息をするリグル。まさに疲れ果てたという言葉がピッタリな様子である。
「やったー、博霊神社に着いたー！」
　そんなリグルとは真逆で、ぴょんぴょん跳ねながら嬉しそうな笑顔を振りまいている空。
　実にここまでの苦労の差が分かりやすい構図であった。

「ありがとうね、リグル。貴方がいなかったら私はここまでこれなかったと思うの！」
「あはは……うん、絶対にそうだと思うよ」
　目を輝かせながら、無理矢理リグルを立たせるとその両手を取ってぶんぶんを上下に振る。それだけ喜びを表したいのだろうが、付き合わされたリグルはたまったものではない。
　空から開放されたときには、もうリグルは精も根も尽き果てていた。そのまま地面に仰向けに倒れると、夕暮れに染まりつつある空を眺めることになった。
　そんなリグルの顔を覗き込む空の顔は、やっぱり笑顔で。
　そんな空の顔を見たら、リグルは疲れとは違う感情が沸いていることに気づいた。
「今日は本当にありがと。リグルがいなかったら、どうしようもなかったかも」
「うん、助けになったのなら良かったよ」
　見上げる側と、覗き込む側。
　両方が、満面の笑みを浮かべていた。
「じゃあね、またいつか会いましょう。その時は美味しい温泉卵をあげるわ！」
「あはは、楽しみにしてるねー！」
　そう言い残し、空は博霊神社へと繋がる階段を駆け上がっていく。
　それを横目で確認しつつ、リグルは心の中に沸いている感情を言葉にして呟く。
「なんだかんだで、すっごく苦労したけど……なんだ、あの人をほっとけない理由なんてひとつしかなかったんだ」
　困っている空をリグルがなんとなくほっとけなかった理由。
　それは。

『まぁ私にかかれば楽勝よね！』
『まぁあたいにかかれば楽勝ね！』

　空の笑顔と、リグルのとある友人の笑顔。
　その二つを重ね合わせて、そっくりだということに気づいたのだった。
「あの人、チルノにそっくりなんだ」
　すぐに興味を持ったことに寄り道してしまったり、物覚えが悪かったり。外見は全然違うのに、きっと性格の部分がそっくりなのだろう。もしあの二人が会うことがあれば、すごく楽しいことになるかもしれない。周りの苦労は凄いことになりそうだか。
「あの二人を会わせてみるのも楽しいかもね」
　空とチルノ。もしあの二人がそろって遊ぶようなことがあればどれだけ楽しいのだろうか。
　そんなことを考えながら、リグルは流れる風を感じながらぼーっと夕暮れから夜へと染まりゆく空を見つめていた。
　いつかそんなことが起きないかな、と心に思い描きながら。

（終）

〈作者コメント〉
　今回はリグルとお空のお話でした。知り合いに誰と組ませたのみたいかというリクエストを聞いたところお空だったので書いたのですが、すごく書きやすかったですね。感覚的にチルノにそっくりだったのですね。とりあえずリグルさんにはいろんなキャラと絡んで欲しいものです！

兎トラップ

著者：くろと

　例えば、手が滑って机の上から消しゴムを床に落とした。しかし、本当は落としていなかったとする。この時、脳は今まで培った経験から『消しゴムは床に落ちた』と思い込む。すると実際には落ちていないのに、思い込みから、床に落とした際の音と感触を、次の行動をスムーズに行う為に擬似情報として、脳内で勝手に知覚してしまうのだ。そうして落ちていない消しゴムを探し、結局見つからず、それを不思議に思いながら顔を上げると、落としたはずの消しゴムが机に置いてあるのである。つまりは『気のせい』である。

　よく言われる霊的現象も、九割が思い込みによる錯覚で、残りの一割が説明のつかない本物か、あるいは幻覚である。

　朝の陽射しが、カーテンの隙間から眩い東雲を運んでいる。私は目覚め、指で瞼を擦りながらベッドを降りた、いつものように顔を洗い、身支度を整え、朝食を摂る。メニューは焼き魚に薄口の味噌汁、摩り下ろした大根、菜っ葉の和え物、それに白米だ。私はきっかりと食べきり、ごちそうさま。と合掌した。それからは非常に手早い、私は新聞に目を通し、詰らない記事ばかり。と感想を述べて玄関から外出した。戸締りをして、だ。

　目的地は竹林、その奥底に潜む永遠亭だ。前日、そこの因幡から呼び出しがあり、ことによると急用らしい。

　だが、竹林に向かう前に人里に寄る事になる、それは同じように永遠亭から呼び出された慧音、ミスティアと合流する為だ。

　朝日を横にし、気持ちのいい朝を軽快に飛翔する。三〇分も経てば、人里へと辿り着いた。

　私は降り立ち、最初の目的地である寺子屋へと向かう。

　人里には最近、命蓮寺という妖怪寺が建立されていた。それは妖怪を救おうとする聖白蓮なる人物が妖怪向けに始めたものだが、宝船の経緯から人間たちにも大変な人気がでていた。

　私は命蓮寺を避けて通った、何はどうあれ胡散臭く、時間をとりそうだったからである。遠回りするために三叉路を左に曲がり、三百メートルぐらい直進してから今度は右に曲がって修正する。

　程なくして木造作りの寺子屋についた。

　慧音らとは寺子屋で合流する事になっており、私が中に入ると、慧音の指導を受けていると思しき生徒達と出くわした。日曜で祝日のはずだが生徒には遊び場と同じらしい。また、礼儀正しいものもいれば生意気なものもいて、実に賑やかな出迎えだった。

「ああ、来たのか」

　教員室から現れたのは女性、上白沢慧音だ。長髪は清水で梳いたように整髪されており、毎日の手入れが行き届いている証拠だ。また慧音は一人の妖怪少女と一緒に出てきた。

「おはよっ、リグル」
　慧音が連れ立ったのは独特な味わい深いドレスを着るミスティア・ローレライで、どうやら私が最後に到着したらしい。
　私はミスティアに会釈を返した。
「では行こうか」
　慧音に引率されるように私たちは寺子屋から出た。
　日に照らされた青竹が艶のある光沢を放つのは、迷いの竹林と呼ばれる、侵入注意の土地だ。そこにある竹は自由奔放に成長を続け、一日が経つと風景はまるで別物となってしまうからだ。
　その入り口に足を踏み入れたのは三人、私、慧音、ミスティアだ。とはいえ私たち妖怪でも竹林で下手に行動すれば惑ってしまう、そのため案内人は必要不可欠だった。
「やっと来たウサ」
　とは淡い白色のスリップドレスを纏った妖怪兎、因幡てゐの台詞である。彼女はちょいちょいと手招きすると、そそくさと先に進み始めた。私たちも後をつけて竹薮に進入する。
　因幡は足早に歩き、同行者である私たちを追いつかせようとはしなかった。また、歩き方は逃げるようなそれで、どうやら逃げ慣れているのだと足が告げている。
　大体一時間経った頃だろうか、歩き続けた私たちの前が、ぱっと開かれた。それまで密集していた竹が一画だけ切り取られたようになくなっている。
　見えたのは屋敷だ。それは四方を竹柵に囲まれており、屋敷の正門に二人の妖怪兎が番として仁王立ちしている。因幡はその二人に、ただいま。と言って、二、三言、お喋りをしてから屋敷に入っていった。
「ここが永遠亭……思ったよりもこじんまりとしてるね」
　素直な感想を述べると慧音が頷いた。
「そうだな。見た目だけなら普通だろう」
「見た目だけ？」
「ここは空間を弄っているんだ。外見と中身が全く違う、前に来た時には三時間ほど迷った末に暴れたんだ。妹紅がな」
　私たちも門番二人に挨拶し、門をくぐった。
　中に入るとそこは玄関で、案内人をした因幡は居なかった、代わりに待っていたのは他とは印象の異なる妖怪兎である。私は何度か里で見かけたことがあったので覚えていた。
「ようこそ、永遠亭に」
　彼女、鈴仙＝優曇華院＝イナバは私たちに一礼した。
　優曇華院は白いブラウスに紺色のブレザー、灰を被ったようなスカートと合わせている。また頭部の兎耳は細長い四角で、折れたように尖っていった。
「鈴仙か。調子はどうだ？」
「姫様が待ってます」
　慧音の会釈を優曇華院は一瞥し、無視した。肩透かしを喰らった慧音は手持ち無沙汰になるも、気にせず板張りの廊下を軋ませながら進む。と、間もなくミスティアがヒソヒソと話し出した。
「なによあれ、態度悪いわね」
「そうでもないぞ。いつもは見向きもされないからな」
「もっと酷いじゃない。どういう躾を受けたんだか……」
「ミスティア、声が大きいよ」
　ヒソヒソとした小声はおそらく、聴覚に優れた妖怪兎になら聞こえてしまうだろう。しかし、優曇華院は興味が無い、という風体でどんどんと廊下を進んでいく。あるいは聞こえていないのか。
「本当に長いね。この廊下」
　廊下は遥か先にまで続いていた。メートル距離に換算して一〇〇〇以上は確実だった。だが、回廊の先端は見えず、その先がさらに続いてる事がよく分かる。時々に妖怪兎と思しき少女らとすれ違い、そのたびに恭しく会釈されていた。
　それを数回繰り返した頃、優曇華院は一室の襖前で待機した。私たちが追いつくと優曇華院は襖を開け、中に入り、襖を閉じた。
　話し声が聞こえ、一〇秒ほどすると、また襖が開いた。
「どうぞ」
　私たちが入室するとそこは八畳間で、先ず目に付いたのは円卓だった。円い卓袱台とそ

の上の茶菓子一式、そして部屋の上座には十二単を着こなした、容姿端麗な女性が座している。あるいは蓬莱山輝夜が見事に座している。
　輝夜は見るものが同性なら幻想を、異性なら恋心を抱かせるに相応しい表情で、悠然と口を開いた。
「遅い！　慧音と他二人！　ささ、早く座って」
　喋らなければ美人、という格言があるように、傾国の美貌にそぐわぬ言葉遣いは一瞬で私の描いた幻想を殴り飛ばした。いっそ幻想を抱いたままでいたかった。
　それはミスティアも同じだったのか、表情が呆けている。唯一、慧音だけが自然とした対応をしていた。
　いつまでも立っているままではいけないので、部屋に入り、敷かれた座布団に腰を下ろす。
　すると優曇華院が膝を折り、テキパキと急須に湯を淹れ、煎茶を茶碗に注いでいった。
　私はありがとう、と会釈するが、優曇華院はついに一瞥すらしなかった。
「もういいわ。うどんげ、次に私が呼ぶまで待ってなさい」
「姫様、私はこれから師匠の研究室で助手を務めます。別の因幡を用意しま――」
「うどんげ、私の声が聞き取れなかったの？
　どうなの？」
「空間を弄ってでも参ります」
　と、だけで優曇華院は退室した。中々にハードな仕事らしい。
　隣で慧音は一服した。
「輝夜、単刀直入に聞いて用件は？」
「それなら後で話しましょう。ほら」
　微笑んだ輝夜は一口サイズに切り分けられた羊羹を推してきた。ミスティアが爪楊枝で羊羹を一刺し、口に頬張ると、パァッと目を輝かせた。
「おいしい！」
「でしょう？」
　ミスティアの笑顔につられて、私も齧ってみた。
　小倉のそれは確かに素晴らしい美味だった。蕩けるという表現し、名残惜しくも口内で解けていく、そんな絶妙な感触と甘味を舌先に施してくれた。それを苦い煎茶で洗い流すと、爽やかな口当たりがある。
「……用件は？」
　慧音が再三にわたり、輝夜を問い質した。むぅ。と輝夜が唸り、やれやれとする。
「せっかちよね。少しは味わったら？」
「用件が済んだらな。それとも後味が悪くなる話か？」
「そうじゃないけど……最近、人里にお寺が新興されたでしょう？」
　命蓮寺のことだろう。
　輝夜は眉尻を下げて、アンニュイな表情に切り替えた。
「そこの使者が竹林で因幡たちを勧誘してるらしいのよ」
「竹林で？　妹紅はそんなこと言ってなかったが……」
「言わないわよ。知らないだろうし、どうせ竹林で案内を務めたのはアイツよ、アイツ」
　輝夜は不満にしているのか、左手で前髪の一房を払いのける仕種で唇を尖らせた。
　その仕種に同性ながら、ドキッとした。
「竹林で、私たちに無断でそんなことをされるのは困るのよ。でも永遠亭が直接出向くには大袈裟だし、カッコも悪いしね。あなたたちに文句を言ってきて欲しいのよ」
　それが輝夜が私たちを呼び出した用件の全貌だった。
　なんというか、あまりに小さい。最初に感じた雅な幻想を粉々にするほど小さい事柄だ。それはミスティアも感じているのか、先ほどからの笑顔が薄くなった。
　慧音は今更に爪楊枝で羊羹を食べた。そして煎茶を啜ってから冷静に告げた。
「リグル、ミスティア、帰ろう。とんだ無駄足だった。全くもって無駄足だ」
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」
　素知らぬ顔で立ち上がろうとする慧音を、輝夜は引き止めた。慧音は呆れたように訊ねる。
「そんなに止めさせたいなら鈴仙に頼めばいいだろう？」
　輝夜は首を横に振った。
「それは駄目。鈴仙は自己中心的で疑り深い

けど、押しに弱いのよ。ミイラ取りがミイラになるわ」
それも問題なのよね。と付け加えて、輝夜は眉根を詰め、悩むような表情で煎茶を啜る。それを聞いたミスティアは思いついたように声を出した。
「てゐならどう？　竹林のことならアイツの分野じゃない」
砕けた言葉遣いで畏怖も尊敬も感じられない喋りだ。だが、輝夜は気にしない。
「あー、そっちも駄目。永遠亭に帰依していることを理由に動かないわね。様子見しているのよ。永遠亭と命蓮寺、どっちが有益なのか、とね」
いかにも因幡てゐらしい態度だった。
「どれにしても私たちには関係ないな」
慧音が、いい加減にしてくれ、と立ち上がった。どうにも押し問答になりそうなので、さっさと退却したいようだ。
「……分かったわ。ならこうしましょうか。うどんげーー！」
輝夜がはしたなく大声で呼んだ。正直に言って私が描いた幻想には掠りもしない行動であり、勝手ながらに酷く幻滅する。それほどまでに残念なのだ。
私の気持ちとは関係なく、襖が開いた。現れたのは先ほどと同じく、折れ曲がった兎耳の鈴仙だ。彼女は、しかし、肩で息をしている。急いで来たようだ。ちょっとだけ同情した。
「姫様、なんでしょうか？」
「慧音たちと一緒に命蓮寺にいきなさい」
輝夜が命ずるように、人差し指を差した。そして慧音がちょっと待て、と声を出す。鈴仙だけが会話についていけずに混乱している。
「どうしてそうなるんだ？」
「鈴仙も連れて行けばいいかな。と思って。私の代わりにさ」
「本末転倒だろう。一人で行かせなよ」
「そうしたらミイラになるでしょ。だからそれを防ぐ為に、ね？　お願いします先生」
輝夜は笑顔で合唱し、慧音へと頼み込んだ。私たちは蚊帳の外で、ふと気になった。
「あの、どうして私たちまで呼んだんですか？」
それだけの話なら間違いなく、慧音だけで済むはずだ。
「え、いや、なんだかんだで慧音は人里側だから。私たちにとってそぐわないとも限らないわけで。同伴者は必要かな、と」
「頼み込むなら信頼してほしいな。せめて」
慧音は間違いなく呆れていた。はぁ、と溜め息まで零し、分かったよ。と頷いた。それは了承する、という同意である。
嬉しそうに輝夜は笑みを綻ばせた。
「さっすが慧音先生！　妹紅とは違うねー」
その言葉には二重の意味がある。一つは慧音を褒める意味、もう一つは、
「妹紅にも頼んだのか？」
慧音が私の台詞を奪った。とはいえ妹紅と親しいのは慧音なので、正しくはある。
「ええ、そうしたらアイツ、ふざけないで！って怒ったのに。まったく、人が頭を下げてやったのに。慧音流だけどね」
慧音流に頭を下げた。その場景を思い浮かばせると、一つの行動しかなかった。私は思い切って聞いてみた。
「……頭突きしたんですか？」
「そうよ？」
輝夜は何の躊躇いもなく平然と答える。もはや私の幻想は塵芥となり風に吹かせれて散ってしまい、残ったのは物悲しいという残滓だけである。
それを振り払うように煎茶を一気飲みした。
「あら、随分と楽しそうね」
さらにアシンメトリーな衣装と十字が入った帽子を身に着けた、銀髪を三つ編にした長身の女性が入ってきた。
薬師の永琳である。
永遠亭を出ると、すでに日は傾きかけていた。あの後、ミスティアと輝夜が、後から来た永琳と慧音がそれぞれに意気投合し、時間も忘れて喋り続けたからだ。私といえば、何故か、鈴仙と一緒になって家事や雑務をする羽目になった。もっとも、おかげで鈴仙と少しだけ仲良くなれた気はする。
「それじゃ、さよなら」

と私は鈴仙に手を振った。彼女は、一瞥だけして返事もしてくれない。
　どうやら仲良くなった気がしただけだった。
　時間帯も夜に程近いので、命蓮寺には明日出向く事になった。
　玄関から立ち去った私たちは二人の門番に挨拶し、帰路についた。帰りの道案内は、しかし、因幡ではなく、それよりも親しい人間がしてくれることになった。
「それで受ける事にしたの？　あなたたちも優しいわね」
　札の張られたもんぺにサスペンダーで、ブラウス姿の妹紅である。彼女は山菜取りの帰りか、竹で組まれた籠を背負っていた。
「妹紅さんは……これから晩御飯ですか？」
　ミスティアが俯いて、もじもじと両手の指をあわせながら、小声で聞いていた。
「うん。そうだけど？」
「あのッ！　よかったら、その、屋台で食べていきませんか！」
　いきなりの大声に、その場に居る、私を含めた三人は面を喰らった。と、気付いたミスティアが恥ずかしそうに顔を赤らめた。
「いつも元気ね。いいわよ」
「ホント？」
「うん。慧音と行くわ。いいでしょう慧音？」
　そんな妹紅の提案に、ミスティアは、あ、と口をあけた。俯きがちだったミスティアは今更に気付いたようだが、妹紅の視線は常に慧音を中心に注がれていた。慧音は突然の申し出に対し、いいですよ。と答えを返した。
　私の位置からだと良く見えた。妹紅が少しだけ嬉しそうな照れ隠しをしていたのが。その反面、ミスティアは悲しそうな表情で、それから口惜しそうな目を慧音に向けた。
　私は、中々に難しい関係。と誰にも聞こえないように心の中で呟いた。
「リグルもどうだ？」
　想定してしない慧音の誘いだった。一瞬、妹紅の時間が止まった。だが、すぐに動き出してほんの一瞬だけ私を睨んだ。
　凄みに怯んだ私は誘いを断った。
　気がした。
「いいね。リグルも食べにきてよ。三人ならサービスするからさ」
　ミスティアが納得し、話を進めてしまった。おそらくは慧音、妹紅という二人の組み合わせよりも、私を含めた三人のほうがいいと判断したのだろう。また、サービスという単語がある以上、断りにくくなった。
　止む無く、私も参加が決定した。
　ミスティアの屋台は人里へと続く道中にあり、それも今では使われていない裏通りだ。そんな人通りの少ない場所を選んだのは、隠れ家的な印象を思わせる、ミスティアの企業戦略である。また客寄せにも抜かりが無く、鳥目にしては屋台に客を誘導していた。その際にはヤツメウナギを食べさせて視力を回復させている。
　裏通りから屋台に着いた頃には日はすっかり沈んでいた。ミスティアは屋台の影で隠れるように、そそくさとドレスから小袖に割烹着と着替え、女将のような雰囲気で屋台の開店準備を簡単に済ませていく。添えつけの提灯に火を灯し、暖簾を掛ける。
　屋台の開店である。
　すぐにミスティアは炭を焚きつけて、焼き網の上でヤツメウナギを焼き始めた。団扇捌きは職人のそれで、二本、三本と瞬く間に焼きあがっていく。
　私たちはカウンターに座り、出されたそれを食べ始めた。美味しい。と表現するのに躊躇いはいらず、串の消費も早かった。と、別の客が訪れた。
「先客とは珍しいわね……あら、誰かと思えばリグルじゃない」
　それは市松模様のベストにスカートを穿いた、とても有名な妖怪で。
「幽香さん？」
　花の妖怪、風見幽香であった。彼女は私と、私と一緒に座っていた慧音たちを垣間見た。それから座り、いくつかの品を注文する。
「珍しい組み合わせね。パーティでもしていたの？」
「いえ、ちょっとあって」
「待って、……間が悪かったわね」
　幽香は言うや立ち上がり、振り向き様に片手で弾を撃った。それは無音で、いつもとは違い、軌道が見えないほどに素早く駆け抜

け、陰影の向こう側で着弾の閃光が明滅した。

「な、なに？」

　気付いた私とミスティアは当惑を漏らした。

　そして慧音は顔を顰めて、妹紅も眉根を詰めていた。

　幽香が座席に戻ると、顰め面の慧音が少しだけ声音を強めて非難した。

「里近くであの威力はいただけないな」

「それより里に近づく前に排除した私を褒めてほしいわね。もしくは排除しなかった自分を責める？」

「敵意や悪意が無さそうだから放置していたんだ」

「それはごめんなさいね。気付かなくて」

　会話の主体性は掴めないが、今の言葉が嘘なのは分かった。幽香ほどの実力者が、慧音が気付ける事に気付けないはずが無いからだ。

　白煙が上る向こうで、人影が見えた。

「ダメージがあるな……、おい！　大丈夫か！」

　慧音が大声で呼びかけた。遠く、その少女は持っていた傘を高く上げて、無事をアピールした。しかし、その足下はふらついており、歩く姿はよろけており、確実に被弾している。

　遠くの少女は地面にぶっ倒れた。

「だ、大丈夫ですか！」

　私は自分の席から飛び出して、急いで彼女に駆け寄った。

　道先で倒れていたのは妖怪で、それも唐傘の妖怪だ。水色のショートヘアに同系色の衣服、青白い顔は被弾によって煤けていた。気絶しているようで、ピクリとも動かない。

　私は彼女を運ぼうとする。

「私が運ぶよ。リグルはその傘を」

　慧音が少女を背負った。私は言われたとおり、紫色をした、茄子のような古臭い傘を持ち上げた。

「まったく。常識が無いのね。どこに忘れてきたの？」

「そうね、あなたの頭の中かもしれないわね？」

　運んだ先では妹紅と幽香が言い争っていた。二人の間で緊張感は高まっており、いつ爆発してもおかしくない状況に、ミスティアはヤツメウナギを焼き続けるという作業で現実逃避していた。

　慧音は呆れ果てたが、先に寝かせた少女を起こそうとする。

「おい、おい！」

　呼びかける。しかし、応答は返らず、また頬を軽く叩いても効果は無かった。

　慧音は最後の手段か、上半身を反らし、少女の額を目掛けて頭突きした。

　ドっという、鈍い重低音が響いた。

「……駄目だな。目覚めそうに無い」

　むしろ逆効果だよ。とは思え、口にはしない。結果として頭突きされるからだ。

「仕方ないな。どこかで休ませるか」

　しかし、慧音が悩む間も無く、次の問題が発生していた。

「調子に乗るのもいい加減にしなさいよ！」

「あなたが調子に乗りすぎなのよ？」

　それは屋台からの罵声と挑発で、二人の客、幽香と妹紅が口喧嘩で火花を散らしていた。あまりの事態に屋台の主たるミスティアは怯え、頭を抱えて丸まっている。

　慧音はハァッと溜め息した。

「あっちもか……」

　どうやら問題が大きくなり始めたと気付き、慧音は一〇秒ほど考えた。その上で彼女は私に向かって、

「この娘はリグルに任せる」

「え？」

　ある程度想定していたとはいえ、いきなりの発言には驚きを隠せない。

　私は逡巡し、まごまごと迷っていると、慧音がトドメの一言を呟いた。

「あっちを何とかするか？」

　あっち、屋台では臨戦態勢をとった二人が威嚇と重圧を撒き散らしていた。おそらく、雑魚妖怪ならテリトリーに踏み入っただけで萎縮してしまうだろう。事実、ミスティアは覇気を失い、真っ青に震えている。

　あの二人を仲裁するか、この少女を保護するか。悩むまでも無かった。

　私は少女を担ぎ、茄子色の唐傘を両手に

持って、その場を後にした。
しばらくして裏通りから破砕と閃光が途切れる事無く、東の空を朱色に染めていった。
自宅に帰ったときには夜も半ばという時刻だった。帰ってみれば、どっと疲れが滲み出て、急激な睡魔に襲われる。それに耐えながら唐傘を玄関横の傘置きに入れた。
寝室に入り、背負っていた少女をベッドに寝かせ、私自身は歯磨きし、欠伸をしながら毛布を取り出してソファへと包まるように横になった。
瞼を瞑ると、妖しい夢世界は目前に迫っていた。
蝉が、蝶が、蜂が、私の到来を今かと待っている。
まもなく、私は意識を手放した。
大体二時間ほど眠った頃だろう。
ん――
目前は真っ暗で、そのせいで物音がよく聞こえた。
足音がしている。
こんな時間に誰だろうか、と私は眠気を抑えながらに思考した。
不審者なら迎撃すればいいし、知り合いなら出迎えればいい。ほとほと適当な思考のそれは、我ながら真面目な判断とはいえなかった。
ふ、と視界に動く陰影が現れた。それは私に気付くと、ズカズカと近づいてくる。私は半分ほど眠っているので、咄嗟に対応出来なかった。
そして、顔を間近にまで近づけて。
「うーらーめーしーやー」
と愛らしい声で凄んできた。
私はどうしようかと悩み、五秒きっかりと考え、考え抜いた末に。
「おやすみなさい」
と結論した。
私が再度、夢世界に旅立とうとすると、陰影は首を捻って。
「うーらーめーしーやーー!」
今度は先ほどよりも強く、迫力がついていた。しかし、私は首を振って事実を教えてあげる。
「幽香に比べればタイシタコトナイヨ」
最後のほうは眠気に負けて片言になってしまった。
陰影は、残念な表情を作って戻っていった。
平穏を取り戻した私は眠ろうとして、
「……ア?」
今更に気付いた。部屋に見知らぬ誰かが侵入していると。
「ッ!」
反射で弾幕を張り巡らしてしまった。
そして、ここは室内だ。
部屋の散らかりようは酷いものだった。花瓶や置物は床に落ちてひび割れ、衣服などは煩雑になっている。それらを片付けながら、私はオッドアイの少女と話し合っていた。
「つまり……小傘は脅かすタイミングを図ってたんだ」
少女の名前は多々良小傘、傘の付喪神であり、脅かす事で空腹を満たす妖怪だった。
話しによると、脅かす好機を探っていたところ、竹林から出てきた私たちを付けて、幽香の弾幕が直撃したらしい。
運がない。としか言いようがなかった。
と、小傘の腹から虫が鳴った。
「うう、お腹空いたよー」
気絶した時間と今の時間を考えれば、なるほど、空腹なのも頷けた。一応、食事なら用意できるけど、と前置きして聞いてみる。
「普通の食べ物は無理なんだよね?」
「ん、味覚を嗜めるだけで全然満腹にはならない」
小傘は首を横に振った。
やはり恐怖や畏怖といった感情でしか満たされない体質なのだろう。この手の妖怪は、人間との関係が形骸化した現在では、非常にやり難いらしい。
私は一通りを片付け終えてから、彼女に提案する。
「人里に行って誰かを脅かす?」
小傘は、うん。と笑顔で頷いた。その笑顔は無邪気なもので、私は、無理なんじゃないかな。と聞こえないように呟いた。
午前三時、妖怪が出現するにはもってこいの時刻だろうか。私は身支度を整えて、小傘

は傘置きから、あの茄子色をした唐傘を抜き出した。
今の時刻だと人里には妖怪のほうが多く、外出している人間はほとんどいなかった。それでも探し出さないと、小傘が空腹で倒れてしまいそうなので、私は昆虫に頼む事にした。
「人間、それも脅かしやすそうなのがいい。出来るだけ早く探してきてね」
人里や里周辺に生息する、出来るだけ多くの昆虫に指示を出し、報告を待つ。
一分ほどで里の色々な箇所から報告が鳴り出した。
該当情報は、やはり少なく、予想通り里には脅かせそうな人間は居なさそうだった。そもそもこんな夜中に外を徘徊するような人物が、脅かしやすい筈もないのだが。
ふと、か弱そうな女性が命蓮寺に向かって歩いている。という報告が出た。
「今、報告で……」
小傘に伝えようとしたが、当の本人は空腹に目を回し、フラフラとおぼつかなく、墜ちそうになりながら飛んでいた。これは一刻を争うと判断した私は、小傘を引っ張って命蓮寺へと向かった。
眼下、ちょうど命蓮寺を一望できた。それは本堂と墓所があるだけの質素なつくりで、よく関心を集めれたものだと考える。と、思考を遮るように南東に人影が見えた。人影は命蓮寺本堂にと向かっていた。

私たちは見つからないように本堂の裏に隠れながら近づき、好機を窺う。
女性はネックまである白いワンピースに黒いジャケットをあわせ、夜陰を歩んでいる。表情は見えなかった。
三メートル、息を潜めて我慢する。
二メートル、小傘は唐傘を構えた。
一メートル、私は昆虫を這わせる。と、隣で物音が一つ。
足音が一〇〇センチを切った。
「うらめしや～」
空腹に耐えかねたのか、小傘が先走った。
小傘が女性に向かって唐傘を開くと、その口が開いた。唐傘に瞼と舌が現れる。化け道具、という単語が脳内を駆け巡った。
しかし、
「早いって……！」
雰囲気は台無しだった。
これでは不意打ちに成功しても、相手は驚くよりも事態が飲み込めず呆気にくれる、という心境になってしまう。恐怖を体感させるには場の雰囲気が何より大切だ。
女性は動じていない。
ほら。と内心で毒舌し、私は這わせていた昆虫を女性目掛けて解き放った。肌中を蟲に這われて、驚かない人間など今まで見たことがないからだ。
「蟲ですか……」
とは女性の言動で、飛ばした蟲は虚空を切った。小刻みのよいステップを踏んで、容易く避けられたのだ。
違えた。相手は普通の人間じゃない。
それに気付くも遅く、女性は両手で、宙に半透明な巻物を出現させた。それは右手側から蛍光色で始まり、左手側の薄暗い暗色で構成される。私には読めない文字で書かれていた。
「！」
女性は弾幕を展開し、私たちは避ける間もなく直撃した。しかし、威力は微弱なもので気絶どころか、ダメージもなかった。
「……もう、ダメ……」
そんな威力が決め手となった。小傘が空腹に屈して、膝をついた。そして女性に覆いかぶさるように倒れた。
「え？　あら？」
小傘は指一つ動かない。まるで死んだように動かない。
「だ、大丈夫！」
女性が戸惑った。状況から察しても彼女の弾幕が小傘を倒したとしか見えないからだ。また慌ててはいたが、小傘を揺さぶらないのは配慮からだろう。
「た、大変！」
結果的にはそれでよかった。
心配とはいえど、行き先の見えない不安に変わりなく、それが一種の恐怖へと繋がる。女性が慌てふためけばふためくほど、小傘の空腹が満たされていくはずだ。
数十秒で小傘は復活した。

先ほどまでとはうって変わって軽快に飛び上がる。肌に血色のよさが窺えた。
「大丈夫なの……？」
　女性がなおも心配そうにしている。
「あ」
　小傘が女性の顔を認めると。
「小傘？」
　私が呼びかけると、小傘は私を一瞥するも、女性に視線を戻し、すぐに薄暗い空へと上昇した。今度は小傘が慌てふためくように西の空へと飛んでいく。
「いったいなんなの……？」
　取り残された女性は戸惑いを吐露した。と、女性が私に向き直った。
「説明はありますか？」
　女性はにっこりと笑った。
　私は証言台で尋問される被疑者のようである。
　とりあえず女性の傍に行って、私は小傘の事情を説明した。
　女性は私の言葉の節々で頷いて、質問を挟もうとはしなかった。そして私が襲った理由を話し終えると、女性は大きく頷いた。
「なるほど。よく分かりました。なら今日のことは許しますし、他言もしない。と伝えてくださいね」
　女性は止まっていた歩みを再開させた。
　優しい人。だと感想を抱いて、私自身も飛び去る事にした。
　気付けば月は薄まり、四時をとうに過ぎていた。
　私は自宅に帰りつくと、引き込まれるようにベッドに入り、死んだように眠った。

　だからだろう。寝過ごした。
　アナログ時計の短針は一〇時を回っており、約束した刻限を一時間ほど越えていた。
　目覚まし代わりに頼んでおいた虫たちも精根尽き果てたように諦めており、相当に熟睡していた事が窺い知れる。
　私は、大丈夫、まだ一時間だ。今から急いで謝れば頭突きの一発で許してくれるはずだ。と自分に言い聞かせた。
　先日以上にせかせかと身支度し、私は飛び出るように家を出た。内鍵を閉めるのは忘れない。
　二五分で人里まで着き、おおよそ数分で寺子屋に向かう。と、その途中、角を曲がると慧音にばったりと遭遇した。私は慧音を見て、慧音は私を見返す。
「け、けーね……先生？」
　しかし、彼女は何も言わず、ただ正面から見つめるだけだ。
　これは相当にお冠らしい。私はなんと言って謝ろうかと思い詰めていると、慧音が上半身を反らした。
　私は反射的に目を瞑った。
「せー、のっ！」
　反動による慧音の頭突きは、いつもながらにとても痛い。
　私はヒリヒリとする額を擦って、慧音に謝った。
「ごめん」
「もういい。それよりも、ミスティアが来れなくなった」
「……なんで？」
「先日のアレで負傷したんだ、今は寺子屋で寝かせている」
　それは災難だ。と、そこで私はもう一人、足りない人物に気付いた。
「鈴仙は？」
「知らん」
　慧音はそれこそ本当に知らないようで、腕を組んで首を捻った。しかし、二秒ほどで納得したように首を正位置に戻す。
「まあ、輝夜や永琳の侍従なんだ。来なくても不思議じゃないな」
　それは言えていた。
　私たちは命蓮寺に向かって歩き出した。ここからなら五分もあれば到着するだろう。
「そうそう、傘の娘はどうした？」
「小傘のことだね。あの娘なら色々あって元気になったよ」
　私は一から説明しだした。多々良小傘という名前、脅かす理由、命蓮寺近くで満腹になった事をだ。
　そんな雑談をしながら命蓮寺へと辿り着いた。
　慧音は開け放たれた本堂に歩み寄り、誰か居ないか。と訊ねた。

奥から人影が現れる。それは尼さんなのか、濃紺色の頭巾を被っていた。
「何か御用ですか？」
　突然の訪問者に対して、彼女はとても落ち着いていた。
　慧音は一礼し、私も慧音に習って頭を下げる。
「寺子屋で教師をしている上白沢慧音です。こちらは蟲の妖怪リグル・ナイトバグ。実は折り入って話し合いたいことがありまして……」
　尼さんは分かりました。と私たちを本堂に上がるようにといってくれた。
　ふと、空が曇っていることに気付いた。それは夏でもないのに大きな入道雲で、本堂を包み込むように広がっていた。ほんのりと赤みがかっている奇妙な雲だ。
　尼さんの名前は雲居一輪という。より正確には尼さんではないようで、けれど尼さんみたいな役割らしい。
「それで話しというのは？」
「そちらが竹林で因幡を勧誘していると聞き、それを困っている者達が居ることを伝えに」
　その言に一輪は眉根を顰め、それから予想に反する返答を言い返してきた。
「私たちはそのような活動を行っておりません」
　と、だ。
　私は一瞬、真意を量りかねた。それは与えられた情報と食い違う時に発生する、推量である。この場合、誤解がある、または嘘をついている、という結論に達することが多い。
　一輪は私たちが何かを言う前に、結論から切り出した。
「命蓮寺は妖怪を助ける為に聖白蓮が建立しました。その思想に反するようなことは致しません」
　はっきりとした口調は嘘をついているように見えない。では、誤解があるのだろうか。
　慧音は根本について問い質す。
「つまり……竹林で因幡を勧誘した事はないと？」
「ありません」
　一輪は断言した。
　これはどういうことか。命蓮寺が因幡を勧誘しているという噂はどこから発生しているのか。
「その事情、詳しく話してくれませんか？」
　と、一輪が聞き出した。やはり自分達に直結する事なので気になっているのだろう。慧音は頷き、説明を切り替えた。
「先日、永遠亭――竹林奥にある医者が住まう屋敷の事です――そこの主人から苦情が出ました。曰く、命蓮寺に属する者達が竹林で因幡を勧誘している。と。竹林での身勝手は慎んでいただきたく、それを我々に依頼されたのです。……本当に心当たりはありませんか？」
　丁寧に説明した慧音は質問の返答を待つ。
　一輪は俯き、何かを悩むように逡巡し、それから面を上げた。
「……一週間ほど前ですが、寺に妖怪兎がやってきまして、我々に相談を持ち掛けた事がありました」
「え？」
　意外な答えに私が呟いた。一輪は続けて喋る。
「その兎は、竹林では永遠亭の人間が妖怪兎を一方的に支配していて、とても窮屈な思いをしている。それを何とかしてほしい。と頼み込んできました」
「それを信じたのですか？」
「いえ、先ずは事実を確認してからと、先日にもこちらのものが竹林に入りました。ですが、そのような感じは受けなかったと言っております」
　事実が変わる。それは情報錯綜による混乱だ。
　確かに永遠亭は妖怪兎を使役している。しかし、それは交渉によって成り立った契約の履行で、一方的な支配とは全くの別物だ。
　慧音が悩みだした。状況を掴もうと思考を巡らしているのだろう。と、その仏頂面を見て、私は一つを閃いた。それは自分が知りえる情報からの発想だった。
「もしかして、私たち一杯喰わされたんじゃ」
「なに……？」
　慧音、それに一輪が一斉に視線を向けてきた。その表情、睨むようなそれにドキッとし

ながら、私は説明をしだす。
「これってアイツのイタズラじゃないのかな？」
　言いながらに私は自分の思いつきを固め、説得力を増していった。
　というのも今回の事件は傍目からでは利得が発生していない。つまり目的が利益の確保ではない。その場合、誰が何のために、と考える。そうすると、それを面白がりそうな人物がパッと浮かんだのだ。何より、命蓮寺には妖怪兎が来ている。
「てゐなら面白いというだけの理由でやりそうな気がするよ」
　私は、どう？　と自分の答えを視線で慧音に聞いた。
　慧音は不服そうにしながらも、納得を示した。
「ありえそうだな。……よし、永遠亭に確認しに行こう。私たちはこれで失礼します」
　方向性が決まり、立ち上がる。
「私も付いて行ってよろしいですか？　寺が関係している以上、このまま見過ごすわけにもいきません」
　一輪が同伴を求めてきた。理由が確かなので慧音も断るわけにいかず、申し出を受けた。
　大空には紅い入道雲が掛かっていた。だが、それ以外に青空を妨げるものはない。澄んだ正午過ぎ、私と慧音、それに一輪は竹林の入り口に到着していた。
「とりあえず妹紅の所に向かわないとな」
　竹林で道に迷わないためには、竹林の妖精と親しい妹紅を訊ねるのが一番で、結果的にそれが永遠亭の近道だった。
「ところで、その因幡てゐはどういった方で？」
　節と笹だらけの風景を見比べながら、一輪は質問をしてきた。彼女なりに気になるのだろう。慧音は迷うまいと集中しているので、説明は私が請け負う事になる。
「そうだね。イタズラ好きで身勝手で、後は……詐欺まがいの兎かな？」
「……そうは見えませんでしたけど」
　一輪は渋った。とはいえ仕方ないかもしれない。因幡は、一目だけなら、ただの純朴で正直そうな少女だ。容姿に騙される者も少なくなく、それを利用している傾向もある。
「兎に角、因幡てゐはあざといです。はい」
「そうですか、そんな方だったとは……」
　若干の驚きを抱きながら、一輪は押し黙った。相当に衝撃があったようで、それ以降は口を閉ざしたままだ。
　沈黙が場を制した頃合で、最初の目的地に到着した。
　それは廃屋かと思えるぐらいに古く、あちこちに補強による継ぎ接ぎ跡だらけで、何より生活臭が染み渡っていた。
　慧音が遠慮なく戸口に近づくと、
「……！」
　上から火の粉が降ってきた。
「熱っ！」
　燃え滓が私の触角に落ちた。私は慌て、頭を振って、マントを押し当てて消火した。
「何がっ――！」
　見上げれば二つの人影が、竹に燃え移る事も厭わずに炎熱を猛らせていた。あるいは妹紅と輝夜である。
「な、なんですかアレは！」
　一輪が事態を理解できず、パニック状態に陥りかけていた。その肩を慧音が掴んで、目を凝視する。
「落ち着いて。いつもの事ですから」
　まるで平然と慧音が宥め始めた。あまりに冷静な慧音によって一輪は冷静を取り戻し、
「……！」
　顔全体が真っ赤になった。
「わ、わ、わ！」
「わ？」
「は、離して！」
　体を弾くように、一輪が飛び退いた。それから動悸でも起こしたように地面に蹲り、呼吸を落ち着けている。
「なんだ……？」
　慧音が分からずに呟いた。私は、鈍いなぁ。と心中で呟き、それから激しく対立する二人を眺めた。
　いつものように殺しあう二人だ。ただし、恐ろしいほど強力な術や技を当然と多用するので、下手には近づけない。

「ちょうどよかった。永遠亭に行く手間が省けたな」
「はい?」
　慧音はこれまた平然と、状況を視認しながら呟いたのだ。
「け、慧音? 何言って……」
　私の動揺も気にせず、慧音は飛んだ。竹と竹、笹と笹の間を掻い潜って、二人の許に近づいていく。
　慧音は輝夜の背後を取り、その肩を叩いた。
「なによ! 今、急がし——っ!」
　鈍い音が響いた。
　輝夜が振り返った瞬間に頭突きしたのだ。と、浮力を失い、輝夜が地上に落下した。
　私が呆気に取られ、口を間抜けに空けている間に、ゴッ、という二発目の轟音が鳴り響いた。それは妹紅が地上に落下する直前だった。
　妹紅が落下し、粉塵を舞わせた。
「さて、聞きたいことがあるんだが?」
　頭だけで場を制した教師は、地上に着地した。
　すぐに輝夜と妹紅は立ち上がり、しかし、その場に崩れる。
　よほどの威力だったのだろう。二人とも足腰がふらついており、目は焦点を結んでいない。だが、互いに相手の姿を確認すると、震える両足を踏ん張らせて、
「ふ、ふふふっ! こんな程度で動けなくなるなんて、情けない!」
「は、はははっ! アンタこそ、膝が怯えているわよ?」
　子供のように意地を張り合いだした。
　慧音はそんな二人を冷めた目で、長髪と一緒に軽く頭を振って、
「もう一発欲しいのか?」
　最後通牒した。その意味を解釈するなら、次は手加減しない。という事だろう。
「……私に何の用よ?」
　怯んだのか、輝夜は折れて慧音に向き直る。よくよく見れば、その額から血筋が流れており、口元に垂れて初めて、輝夜は袖で拭った。
　先ほど受けた頭突きが、よほど手加減されていたのだと知って私は戦々恐々した。ふと、横を見ると、いつの間にか復帰した一輪が立っている。
　一輪は私の視線に気付くと、こほんと咳払いし、体裁を保とうとしていた。
「昨日の話について——」
「姫様ー!」
　笹の隙間から慧音の問いに割り込んできたのは、淡いスリップドレスを着用する、垂れ耳の少女だ。
「てゐ!」
　件の因幡である。
　私の呼びかけに、しかし、因幡は不思議そうな顔で反応した。
「リグル。どうしたウサ?」
　私は少々、腹が立った。これだけの問題を起こしておいて素知らぬ顔をするのは、苛立つ事この上ない。
「てゐ! イタズラもほどほどにしてよ!」
　私は続けざまに大声で竹林を震わせて、木霊させた。身の詰っていない唐竹には、声はいつまでも残響している。そんな叱責を直に聞いた因幡は耳を塞いでおり、渋面にて不快感を表していた。
「いきなり……どれの事ウサ?」
　どうやら思い当たる悪戯は一つだけではないらしく、指を折りながら、それを数え始めた。もっとも数えだしてすぐに十指全てが折られて、両手がグーとなっていた。
　私は流石に呆れ、とりあえず何をしたのか教える事にする。
「命蓮寺のことだよ。因幡たちを勧誘しているとか、いい加減な法螺を吹いたじゃない」
「は?」
　因幡はまるで知らない事を聞かされたような、理解の及ばない表情をしていた。まだ白を切るか、と追求しようとする。
　その前を一輪が私を遮った。
「あの、その娘が因幡てゐですか?」
　一輪が私に聞いてきた。声音は不自然としており、困惑の只中にあるという感じだ。
「そうだけど……どうかしたの?」
　私は微かな不安を忍ばせながら問うた。
　一輪は刹那だけ迷ったが、正直に答える。
「その娘、私が話した妖怪兎とは違います」

これもまた、はっきりと言い切った。
私と慧音が一時停止し、輝夜と妹紅はそれを不思議がり、因幡は状況把握に努め、一輪は不味い事を言ったのかと恐縮した。そうして竹林に一時の空白が流れる。
最初に慧音が理性を取り戻した。先ずは輝夜に向き直り、先ほどの質問を再開する。
「命蓮寺が因幡を勧誘している、という話は誰から聞いた？」
いきなり振られた輝夜は狼狽しながらも、意図を理解して答える。
「あ、ああ、そのことね。鈴仙だけど？」
「なに？」
思わず慧音が聞き返した。
「だから、鈴仙だってば」
今度は強く、あるいは吐き出すように言い放つ。
レイセン、鈴仙？
輝夜の言った名詞を二度反芻するも思い浮かぶのは一人の妖怪で、私は途方にくれた。なぜなら鈴仙が犯人だ。と言われたも同然だからだ。
「ちょっとちょっと！　一体なんなのよ！」
話について来れない輝夜が甲高く叫んだ。
耳に障るような声に私は顔を顰めながらも、思考は絶やさない。そうすれば行き着くのは、どうして鈴仙が、という疑惑だ。
「鈴仙は何処に居るんだ？」
慧音は私よりも次のステップに進んでおり、捜索を始めようとしていた。しかし、気付いた因幡が声を出す。
「そうウサ！　姫様、レーセンちゃん見なかったウサ？　もうすぐ毒薬の臨床試験が始まるのに居なくて、このままだと私が被検体にされるウサ！」
焦るような口ぶりは本物で、因幡は因幡で重要な用件を抱えていた。
「んー、知らないよ？　……それより！」
輝夜はビッと一輪を指差した。
「そいつ！　もしかしなくても命蓮寺の奴じゃないの？」
「そうだが？」
「やっぱり！」
輝夜は途端、不機嫌になった。
「慧音！　約束が違うじゃない！」
輝夜の言動に、真っ先に反応したのは慧音ではなく妹紅だった。妹紅は事情こそ分かっていないが、慧音と輝夜が約束をしている。という部分、それに決闘を中断されたという現状も付け加えて、大いに苛立っていた。
「約束、約束だって？　慧音！　こんな奴と何か約束したのか！」
怒りの矛先は慧音となった。
慧音は溜め息を漏らしながらも、とりあえず説明に努めようとした。
「……そうよ。私と慧音、二人だけの約束。アンタはお呼びじゃないわ！」
しかし、輝夜が素早く、慧音を肩から抱くように背後に回った。心なし表情がニヤついているのは、気のせいではない。妹紅の態度が一変する。怒から静に、だ。
まるで台風の前の様な静けさで、彼女は開口した。
「……どういうこと？　ねぇ、ケイネ」
背筋がゾッと凍て付き、産毛がチリチリと逆立った。この場に留まりたくないと足が振るえ、独りでに逃げようとしている。
「どうしました妹紅。そんなに霊感を昂らせると土地の妖精が戦慄きます」
一人冷静に状況を判断した慧音は、不思議そうな顔をしていた。また、輝夜は肩に引っ付いたままである。
火に油か、その素っ気無い表情と輝夜の不躾な行動は妹紅の感情を逆撫でした。
妹紅が、だらんと両腕を落とし、両腕に引っ張られるように視線を下げた。
「あ」
母音を囁いたそれは発揮と燃焼を伴い、
「――――！」
妹紅の感情が発火した。
具体的には妹紅を中心とし、私たちを巻き込んでの爆発だ。
反射が防衛の為に両腕をあげて、目を閉じた。
そよ風が素肌を撫でていった。
「……？」
違和感に対して恐る恐る目を見開くと、私は青空に浮いていた。
違う。私自身が浮いているわけではない。
それはふわふわとした紅いマシュマロみた

いなもので、九メートルはある。乗り心地は悪くない。つまり私は真っ赤な雲に乗っていた。
「助かった……？」
　不可思議だが助かっている事に違いはなく、手放しで喜ぶべきかを悩んだ。
　と、下から木々が爆ぜるような破裂音が木霊してきた。それは熱も伴っているらしく、火花の騒音もついている。
　眼下、雲の切れ端から下を覗けば、青いはずの竹林が赤熱していた。その中を動く人影が三つある。
　燃え盛る竹林で、三人が弾幕の展開と回避を応酬していた。
「間に合いましたか、流石は雲山」
　声音は隣から、横目で確認すれば一輪が私と同じく雲上に座っている。
「この雲って一輪さんの？」
「はい。私の相方、雲山です」
　雲が震えた。突然の振動に私は雲から降りて自力飛行する。
　振動の原因、雲が形状を変えていた。粘土のように整形されて、それは巨人の顔面を模った。
　私は見上げた。
「これが……雲山？」
　蓄えた髭と禿、鼻骨は高くで鷲鼻で厳しそうな眼力は頑固親父そのものだった。
　失礼を働かないように私は感謝を述べる。
「ありがとう。雲山……さん？」
「あの程度なら造作もない。と雲山は申しています」
　雲山は喋れないのか、一輪が代弁した。
「……それにしても酷いですね。これは」
　一輪は苦言を漏らした。
　眼下では惨状が広がっており、私たちも巻き込まれないように更に上昇しようとする。
「ん？」
　ふと、私は人数が足りないことに気付いた。
「一、二……五？」
　五人だ。下と上、双方足しても五人しかいない。
　何かの間違いかと思い、目を凝らし、もう一度数える。
　地上にいる影、一つは妹紅、もう一つは輝夜、最後の一つは慧音だった。そして自分と一輪で二人、雲山は除外した。
「……てゐ？」
　因幡が居ない。
「まさか！」
　あの惨状。巻き込まれればひとたまりもない。私は即座に飛び込もうとした。
「焼かれにいくウサ？」
　瞬時に止まった。
　振り向けば背後、スリップドレスを煤に汚した因幡が浮いていた。
「よかったぁ」
　火災には巻き込まれていない。と分かって私は安堵し、空中でしりもちを着いた。
「よくないウサ。このままだと結構な範囲まで燃え尽くすウサ」
「それは……誰か呼んでこないと」
　因幡の言うとおり、このままでは広範囲、もしかしたら竹林全土が延焼してしまう。それほどまでに激しく猛っていた。しかし、誰を呼んでくればいいいか。その検討がつかない。
　因幡には当てがあるのか、強く言ってくる。
「永琳ウサ。あれをとめるにはそれがいいウサ」
　流石に竹林のことだけあり因幡も真面目な意見で、永遠亭に向かって飛び始めた。
「まったく。面倒事はこりごりウサ」
　私は現状と比較しながらも、アンタが言えたことではない。と内心で呟いた。
　ただ、因幡の意見は正しかったので、私もついていくことにした。
　陽光が弱まり、日はだいぶ傾いていた。
　風を切って永遠亭に向かう途中、それを阻むものが居る。赤い目に折れ曲がった兎耳、そして紺色のブレザーに灰被りなスカートを穿いて、両腕を組んでいた。
　彼女は遠く、五〇メートル先から睨みを効かしていた。
「鈴仙……」
　鈴仙＝優曇華院＝イナバだ。優曇華院はてゐを認めるなり口早に、

「どこに行っていたのよ？」
「それはこっちの台詞……、と、今はそれどころじゃないウサ。でもちょうどいいウサ。レーセンちゃん。火事が起きたから竹林を隔離して欲しいウサ」
「火事？　何処よ？」
「西南にある妹紅の住むあばら家、半径二キロぐらいウサ」
「アイツか……」
　その態度、優曇華院は妹紅に対して好意的ではないらしく、分かりやすい舌打ちをした。耳障りな名前を聴いた、という嫌悪振りである。
「？」
　聴覚に異常がある。それは左右別々に反響し、その不快感に思わず耳を押さえた。それでも耳朶に直接響いてくるのは、薄く伸ばされた金属音のような何かである。
　数秒間で収まったが、耳に残った違和感は拭えない。
「さて、パージはしたけど、根本的には解決してないわね」
　優曇華院がてゐに喋りだした。どうやら先ほどの不協和音は彼女の仕業らしい。
「ん。これから永琳にチクりに行くとこウサ」
　因幡は伝え、先に進んだ。
　進もうとした。
「待ちなさい。後ろのそいつ等は、ナニ？」
　優曇華院は因幡の後ろ、私と一輪を一瞥した。それは軽蔑の眼差し、といっても過言ではなく、警戒心が籠められていた。
「アンタはいつから患者以外の部外者を永遠亭に連れてくるようになった？」
　警戒心どころの騒ぎではなかった。視線には突き刺さるような敵愾心に満ちている。
「いや、勝手についてきたウサ」
　とは因幡だ。あまりに唐突な言葉は咄嗟に反応できないほどで、私は途方にくれた。
　一輪もまた呆気に取られている。
　優曇華院は黙考し、そう、と呟いて因幡を見逃した。見逃された因幡は永遠亭がある、北東に向かい、低空飛行で飛んでいく。
　改めて優曇華院が私たちに向き直った。相変わらずの敵意が感じ取れる。
「……お帰りはあっちだけど？」
　私たちに告げた台詞は冷たいものである。と、一輪が入道雲を纏い、前に出た。
「聞いて……、いえ、あなたが鈴仙＝優曇華院＝イナバなら聞きなさい！」
「私は名乗った憶えがない。それとも他人から与えられたにすぎない予備知識で会話する？」
　取り付く島もなく、拒絶された。だが、一輪は真剣に話し続ける。
「それでもかまいませんよ。……あなたは先日、私たちを訪ねて助けを求めた。ですが、それは嘘であり、本当は違った。そうして命蓮寺が竹林の因幡を勧誘しているという根も葉もない噂を流布した。何故です？」
「簡単よ。人間と妖怪が馴れ合うのは良いけど、命蓮寺のように強く影響しそうな場合は困る。それだけね」
　私はぽかんと口を開いた。それは優曇華院が正直に答えたからで、しかも嘘偽りが含まれるように聞こえなかったからだ。一輪も同様らしく、困惑を隠しきれていない。
「そんな為にあんな嘘を流したの……？」
「それ以外の理由がない」
　私の独り言にも優曇華院はしっかりと答えた。
　一輪は頭を振って提案する。
「話し合うつもりはありませんか？　命蓮寺は」
「妖怪も人間も拒まない？　いいわね、それ。でも邪魔よ。善行を積むには特に邪魔。知ってるでしょ？　妖怪が人間を襲うのは善行で、人間が妖怪を退治するのも善行なのよ。そして二兎を追う者は一兎も得られない、あんた等はどうなんだ？」
　優曇華院が言っている事は概ね正しかった。
　そもそも妖怪と人間、仲良くするのは結構ではない。古い考え方かもしれないが根強い思想でもあり、幻想郷に蔓延る問題の一つであろう。
　先日の小傘もそうだ、性格や容姿の問題を省いたとしても、人間との間に協調性が生まれた事で驚かれなくなっているのは事実である。
　それに拍車をかけるように建立したのが命

蓮寺だ。その手の妖怪にとって迷惑であるのは否めない。
　でも、今は疑問が湧いた。
「どうして鈴仙が……？」
　私の見立てが正しければ、永遠亭に属する優曇華院は親しくなった人間と共存しているはずだ。被害にあっているならまだしも、今の彼女に文句を言う筋合いはないはずだ。
　優曇華院は顔を顰めた。それを見逃さずに私は問い詰める。
「何か隠してますよね。きっと何かを」
「………」
　言い返さないことで、私は確信を得る。
何か裏がある。と。
　優曇華院は閉口したままだ。
　日が落ち始めた。それは昼が終わりを告げて、短い夕方が顔を出す。
　会話が終わり、弾幕が展開する。
「雲山！」
　気付き、先手をもぎ取ったのは一輪だった。彼女は相棒に指示を飛ばし、形無しの入道雲は形状を変形させる。それは三メートルを越す、巨大な拳固として顕在化し、優曇華院目掛けて真っ直ぐに発射された。
　青空で直線にのびる飛行機雲が拳の速度を証明する。
　速い。
「遅い」
　感覚の差か、優曇華院は囁き、身を丸めて拳固をグレイズした。
　優曇華院は丸めた身を戻した。それは跳躍のような強靭さとしなやかさを以って、空間を遮るように飛翔。高速で近づいてくる。
　狙いは接近戦だ、この広い大空で、彼女は狭い戦闘を望んでいる。そして近づくという事は、近づけさせなければ有利だという事だ。
「蛍符！」
　悟った私はスペルカードを切り、雲山も次々に拳固を撃ち続ける。相乗した弾幕は優曇華院の移動を封じようとして、前左右を塞いでいく。その中を優曇華院は加速した。
　疾駆の飛翔は空気の悲鳴にも聞こえ、コースが塞ぎきる前に優曇華院は弾幕を抜け切った。
　同時に彼我が四〇メートルを切った。
「マインドシェイカー……」
　空域の支配権を求めるように、優曇華院の凶眼がさらに濃く、紅く、狂うように煌いた。
「！」
　頭蓋骨に貴婦人が発する悲鳴のような高音が鳴り響き、視界がぐにゃりと歪んだ。
「わっ！」
　突然、浮力が失われた。
　自分が落ちていく。
　落下は高速で、二〇秒もあれば地表に激突するだろう。
「落ちる……どうして！」
　私と同じ状態なのか、一輪が叫んだ。
　解決策を探るように一輪を見れば、そのズレに感づく。
「……？」
　一輪は落ちていなかった。だが、表情は一刻を争う非常時のもので、焦りが見て取れる。
　空から落ちる感覚を味わいながら考える。
　おかしい。という感情を起点とすれば、次々に違和感が開けてきた。どうして浮力を失ったのか、どうして一輪は落ちていないのか、どうして視界が歪んだのか。
　それら思考材料を黙考し、知恵を絞って出した答えは単純だった。
「錯覚だよ！」
　つまり私は最初から落ちてなどいなかった。
「っ！」
　私は奪われた感覚を取り戻すために、毒蛾に自らを打たせた。
　咬まれた痛みが、激情を逆るように感覚を復帰させる。
　頼ったのは痛覚。
　痛覚とは熱さ、冷たさよりも優先される感覚器である。眠気覚ましに頬を叩く際、痛みが強ければ眠気が早く醒めるのと同じ原理である。
　さらに毒蛾に咬ませたのは、その有毒を体内に含むためである。弱毒性ならば持続する苦痛が私を二度と錯覚に陥らせない。
　私は毒にて正気を取り戻した。
「錯覚……！」

また一輪も纏わせた雲の水分にて自らを戒め、理性を取り戻した。
「三〇メートル」
　優曇華院は距離間をカウントした。まるでゼロとなったとき、勝利が確定するかのように数えている。
「雲山！」
　いつの間にやら雲山は巨大な顔面と化した、その双眸は紅い輝きを放った。
　放たれたのは光線で、光の柱は優曇華院の飛行を妨げた。
「外した？」
　光線は優曇華院に当たっていない。いや、正確には外れてはいないはずだ。軌道上では間違いなく優曇華院に被弾している。
　当たったのに外れている。
「……っ！　蟲符！」
　遅れながらに私もスペルカードを切る。
　理解が及ばないなら、理解できるまで撃つしかなかった。
　私の弾幕は昆虫を潜ませる複合型で、相手に昆虫を取り付かせた場合に真価を発揮する。
　無数の毒虫たちが弾幕に潜んで、優曇華院へと向かっていく。
「…………」
　優曇華院に迷いは見られなかった。あろうことか弾幕に突っ込んだのだ。
　無数の散弾が、優曇華院を包み込む。
　だが、

「抜けたっ！」
　私は事実を叫んだ。
　被弾していない。
　潜ませた毒虫すらも、だ。
「どうなっているの！」
　思わぬ事態にパニックとなり、理性が凍りつく。
　見た目は攻勢にもかかわらず実情は防戦と化しており、心の奥底で焦燥が駆り立てられる。
「二〇メートル」
　優曇華院が冷静に且つ利己的にカウントした。
　押し寄せる感情は未知に対する恐怖と戸惑い、私はさらなる弾幕を空に放とうとする。
「っ！」
　凶行にでようとする私を諌めたのは、先ほど体内に含んだ毒である。
　はっとした。
見る。空の向こう側から来る兎は、弾幕に被弾していた。
　ように見せかけていた。
　彼女は僅かな動作で被弾を免れ、グレイズしていた。
「幻覚だけじゃない……！」
　私の驚愕を知ってか知らずか、向こうで優曇華院は口を開いた。それは掠れたような小声で、聞き取れないほど小さく呟いた。
「あと一〇メートルで会えるわね」
　兎の紅い瞳が爛々としていた。

　夕焼けが沈んだ。夜の深淵が地平の彼方から這う様に残された陽光を喰らっていく。
　その闇夜に紛れ、紅い残光を帯び、彼女は飛び跳ねる兎のような軽快さを以って近づいていた。
　私は息を呑んで、愕然に打ち震えた。
　これは詐欺だ。私は騙されていた。
　彼女はとても強い。
　弾幕ごっこに強弱を求めるなら、それは弾幕のパターン解析と不測における反射力、いざという時の度胸に集約されるだろう。少なくとも優曇華院はそれらにおいて私よりも優れ、幻覚という装飾品と攻撃しないという制限を背負う事で実力を誤魔化していた。
　かつて巫女を相手にし、容易く撃墜された思い出が精細に蘇える。
　二度目はごめんだ。二度も辛酸を舐めたくはない。そのためにはどうするべきか。
「私は！」
「？」
　私の発声を聞きつけた一輪は視線だけを送る。
「――！」
　本音を高らかに告げた。
　自らの絶叫に呼応するように私が選んだ行動は単純だった。
　その身を縮めて前を見る。
「！」
　背後を足蹴するように跳んだ。

九メートル。
空気抵抗を押し退け前進する。
八メートル。
二人の距離間が急速に狭まる。
七メートル。
一輪が弾幕を止めて静観する。
六メートル。
私は優曇華院を強く見つめる。
五メートル。
優曇華院は私だけを見ている。
四メートル。
優曇華院が弾幕を撃ち放った。
三メートル。
回避の軌道に左へと舵を取る。
二メートル。
もはや、獲物は目と鼻の先だ。
一メートル。
「季節外れの……バタフライストーム！」
私はラストワードを切った。
白い、紅い、青い、黄色い弾幕を回転させながら、途切れる事無く撃ち綴った。ほんの一秒で優曇華院の周りを弾幕で遮蔽し、その行動を制限する。
私は唇の端を吊り上げて、微笑んだ。
「捉えた！」
私は勝利を信じた。なによりも位置が弾幕の決め手になる。ラストワードは優曇華院を包み、その唯一の逃げ道だった前後には、彼女自身が撃った弾幕がある。被弾する、間違いなく、今度という今度は被弾するしかなかった。そんな弾幕の隙間から彼女が見えた。
表情は、私と同じく微笑んでいた。
彼女は、先ほど撃った自らの弾幕を、すり抜けた。
「え？」
分からなかった。理解が現実に及んでいない。
ゆっくりと時間が流れていく。
彼女は私の右隣を位置取りした。
優曇華院の右手から弾幕が放たれる。
私は被弾するしかなかった。
「雲山！」
それは支援の、最後の後手だった。撃たれた拳が優曇華院の居場所を抉り取った。
「！」
条件反射に優曇華院が後退した先で、不可避と成ったラストワードが炸裂する。
弾幕ごっこが終わった頃には月がひょっこりと欠けた顔を見せている。
私は地上で一休みしていた。というのも弾幕をし続けた結果、方向感を失い、竹林に迷ったからだ。
その一方で一輪は優曇華院を尋問していた。しかし、優曇華院はだんまりを決め込んでおり、問いには一切答えず、鉄の意志を覗かせていた。止む無く、一輪は溜め息を吐いた。
「……とにかく一度、命蓮寺まで来てもらいます」
一輪は優曇華院を連れて行こうと袖を引っ張り、
「それには及ばないよ」
一輪を止めたのは涼しい声である。声の方向を見れば竹林の林を掻き分けるように二人が現れた。私は驚いた。一人は水兵のセーラー服をアレンジしたショートヘアの少女である。そしていま一人とは面識があった。
「小傘……？」
多々良小傘である。
「ムラサ！　なんでここに？」
セーラー服の少女は一輪の知り合いのようだが、私は誰なのか分からなかったので問おうとすると、少女のほうから先に答えた。
「村紗水蜜よ」
ムラサは人懐っこそうな笑みを見せた。
「どういうこと？」
私たちが混乱すると、それを落ち着かせるようにムラサが落ち着いて、と手を小さく挙げて、それから人差し指を伸ばし、
「彼女がイタズラの犯人だったのよ」
ムラサに頬を突かれているのは小傘だった。
「え、え！　えっ――！」
私は落ち着くどころかより深く混乱を深めてしまい、そのため落ち着くまで数分を要した。
冷静さを取り戻すと、ムラサが口火を切って話し出す。

「簡単に言うとね。そっちの兎が永遠亭に嘘を流し、私たち命蓮寺が竹林を調べる為に乗り込んだ後で、この子が里で嘘を流す計画だったみたい。まぁ、それは私が止めたけどね。それから」
「待って」
私は話を遮った。というのも確実に気になる点があり、確かめずにはいられなかったからだ。私は小傘を見て、続いて優曇華院を見た。小傘はがっくりとしていたが、優曇華院は無表情のままだ。
「小傘と鈴仙って友達なの？」
私にはどうにもそうは思えなかった。昨日の優曇華院からもそれは窺える。
「それは……と、協力者が捕まりましたか？」
ムラサの視線がいきなり上に向かい、私は釣られるように空を仰いだ。
居た。
先日、私と小傘で襲った女性が、これまた見かけない、妙な羽を持った少女と一緒に飛んでいる。
「あ、姐さん！」
一輪が叫んだ。
その二人が地上に降りると、女性は一通りの挨拶をした。それによると彼女が命蓮寺の代表者、聖白蓮だという。つまり私が襲ったのはとんでもない人物だったのである。私が気まずそうに絶句した。けれど白蓮はそれを意に介した風もなく傍を通り抜けて、優曇華院の許へと歩き、申し訳無さそうに喋り始めた。
「ごめんなさい。ぬえが迷惑を掛けたようで」
ぬえと呼ばれた少女は間違いなく、妙な羽をした少女の事だろう。
今度は一輪が質問する。
「どういう事ですか？」
「それが、ぬえがイタズラに種を植えつけたようなのよ。それで」
白蓮の説明に、てへへ、とぬえが笑っていた。あるいは反省があまり見られない。
私は情報を頼りに推測をつけた。
「元凶は小傘で、実行はぬえ、まんまと利用されたのが鈴仙……？」
私の推測にキッと優曇華院が睨んできた。しかし、すぐに視線を下げた。
「本当にごめんなさい。もっと早くに気付いていればよかったのだけれど」
白蓮は頭を下げて陳謝した。もっとも優曇華院は白蓮を見ようとせず、そっぽを向いたままだ。
私はふと、不思議に感じた。先ほど白蓮は優曇華院が暴走していたのは正体不明の種のせいだと説明された。しかし、それがどんなものかを説明されていない。勿論、説明するまでもない、という事かも知れない。
私は悩んだが、さしてどうでもいいか、と判断した。既に疲れきっており今すぐに休みたいからだ。
「…………？」
なんとなく優曇華院から視線を感じた。だが、それだけだ。気にするほどでもなく、実際、気にしなかった。
その後、小傘が事情を説明しだした。やはり人間と妖怪の共存を崩したいという念頭があり、目論見を企てて実行したそうだ。
「うう、ごめんなさい……」
しゅんとして子傘が謝っていた。そんな彼女を慰めていたのは白蓮である。
「いいのですよ。元々は私たちが至らないばっかりに起きてしまったこと……」
それから白蓮は優曇華院を見た。
「貴女のことも私から永遠亭の方々に説明いたし、謝りたいと思います。だから……永遠亭まで案内してくださりませんか？」
優曇華院が頷き、立ち上がった。
それからはとても素早く立ち回った。永遠亭に向かうと待ち構えていたような永琳に白蓮が謝罪し、二人はすぐに打ち解けあった。また、小傘は抱えた事情から、ぬえも小傘を救いたいという一心からの協力ということもあり命蓮寺、永遠亭、双方から不問とされた。
まるで予めそうなる手筈だったかのように滞りがなかった。
そうして全てが終わってから解散し、私は慧音と合流した。慧音はあの二人を止める為に消耗しているはずだが、そのような雰囲気はおくびにも出していない。竹林を出て、怪我から復帰したミスティアの屋台を訪れ、私は串を食べながら慧音とミスティアに経過を説明した。

説明を聞いた慧音は、ふと、顰め面を作った。
「まさか……」
「また会いましたね！」
と慧音の言葉を遮って、座談に参加するように相席する者達が現れた。小傘とぬえ、一輪、ムラサ、さらには輝夜と妹紅の六名である。一輪が慧音の左隣に素早く座ると、妹紅は私を退かして慧音の右隣に座った。私は別の席に座り、他の面々も方々に座っていった。
「色々とあったけど、これからよろしくね」
ぬえが切り出し、そうして何気ない会話を花咲かせた。

私は博麗神社で一連の騒動を神社の巫女に話していた。すると彼女は呆れたような溜め息を吐いたのである。

（終）

〈作者コメント〉
前回投稿してないので頁量が増えてしまいました。頁を圧迫して申し訳ありません。

リグル愛され合同誌
リグル天国ゴールド
夏コミで！
参加者
敬称略
CREAM
Five-seveN
Gif
HOUSE
MASHU
TEC
うめきち
ウリグル獄長
くじらローラン
しゃき しゃき
たま
ネイキッドジェネラル
ひどぅん
ぶーわ
ぽん
みどり
貴キ
小崎
是乃
草葉
中篠セツ
東
東 ゆき
浜原義雄
羊箱
インダストリアル小五郎
http://xaver.sarashi.com/wriggle_go.html

プロ〇ェ〇トW
キッカ
p48～p49

リグル可愛いです。みすちー使いやすいです。

運命
千C（夜騎士）
p50～p52

1，2年前に描いた作品ですが、中二全快過ぎたため恥ずかしくなってお蔵入りした作品です。本当は一生封印しようと思ったのですがテーマにあった作品だったので投稿しました。正直めっちゃ恥ずかしいですが、よろしくお願いします！(＞3・）b

リグると！
ひどぅん
p53

リグルはつねになにかに挑戦してる気がします。
がんばれボクらのムシキング！

今年最後のナイトバグストーム
斑
p60～p61

挑戦……しかし万人が驚く新たな挑戦が簡単に思いつく訳でもないので、描画速度等のアップを目標に特大サイズのイラストに挑んでみました。結果的に今までどれだけダラダラ描いていたかがかなり浮き彫りに。今後も精進していきたいものです。

空跳ぶファンタジスタ
イリイチ
p75

日本がカメルーンに勝ってから描き始めました。自分に対する挑戦でもあった作品です(笑)

ほたりぐる～挑戦編～
怒羅悪
p76～p77

こんばんわ、どらおです。
なんかもうすいませんでした。

リグルをいじりたい
豆板醤
p78～p79

最初の４コマでネタが50は作れそうな気がする…気がする…

sweet berry pie
秋水
p80～p86

これが皆さんに読まれているということは無事に掲載されたんだなぁ…と。カブトムシを買ってもらった子供のようなカブトムシにエゴを押しつけるお話。だって、カブトムシ面白いのだもの、ずーっと触っていたいよね。そんなお話。

無題
夜行
p115

「挑戦」特集ということで予告ネタをやろうと思い立ったはいいものの、編集者でもないのに予告なんてできる訳もありませんでした。

表紙
小崎

「ひきかえせ」・・・「ひきかえせ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・「ひきかえしたほうがいいぞ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・●青玉

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

最初4ページあったけど途中で2コマでいいことに気付いた漫画

くらげん

p2

漫画を描くのに初めて定規に挑戦しました。線が曲がってしまいますね。

プロジェクトWriggle~6月4日リグルリレーに挑戦~

SaIka

p37～p39

この企画をやって改めて、リグルは愛されてるんだなぁって感じることができました。編集作業中、沢山のリグルに感動でいっぱいでしたし（笑）参加者の皆様、応援してくださった皆様に感謝、そして幸あれ。

学園ナイトバグ「ナイトバグは寝てるだけ」

言示弄

p8～p10

二月くらい前に投稿予定だったもの。　服装が季節に合ってないのはそのためですまん。
一応ここから微エロ展開で、はっ、夢か…なんてのも考えたんですが没に。　個人的に気に入ってるけど、オチが弱いのが残念。

チャレンジ１３年生

秋水

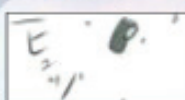
p40～p42

時間なくてぐだぐだでした。無事化学は終わりました、ちーん。

ホタルマントの妖怪少女(後編)

Step

p11～p14

正直なところ少し描き切れなかった、いずれ完全版をおみせできればと思います

リグルの過冷なる挑戦

猫屋敷

p43

今更にして初めまして、ねこやしきです。創刊の頃から「これは投稿しなければ」と考えていたのに１年が過ぎていたのでした。挑戦するなら今しかないさね！
今回もっとリグルに挑戦してもらう予定でしたが
あれ…予定がどんどん遅れて行くよ？以下次号！

虫とマルキュー　ゴールド２

羅外

p15

なんかもう色々とすみません。

無題

草加あおい

p44～p45

ネタがどれだけ被っているかオラワクワクすんぞ！
月の宴３はサークルカットをリグルさんで申し込んでいるので当選していたらリグル島に居ると思われます。
宜しければ「月バグ見たよ！」とでもお声をおかけいただければ。何か用意しているかもしれません。

東方茶湾虫

クロツク

p16～p17

お初お目にかかります。お口直しをご用意しつつごらんくださいませ。

リグルともこたんとゆうかりん

ぽこ

p46～p47

なんだか全体的に緑色になってしまいました・・・

月刊ナイトバグ　2010年7月号

2010年6月24日発行
企画・編集：神楽丼／小崎
http://www8.plala.or.jp/denpa/indexdon.html

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画　web配布／自由投稿参加型月刊誌

編集後記

ロッテリアのタンドリーチ●ンバーガーにいつも消化器系が勝てません。こんなに愛しておりますのに。
ということで、今期こそはの思いを秘めて挑戦してまいりました。

人は負けると分かっていても戦わなきゃいけない時がある！（主に対象がクセになる美味しさのとき）

P

2010 / 6/ 24　小崎

次号8月号は7月22日（木）発行予定！

※次号の投稿締切は7月15日(木)です。皆様からの熱い投稿をお待ちしています。

あなたの幻想郷が、ここにある。
月刊
月刊ナイトバグ　全自由投稿参加型リグルのマガジン
NIGHTBUG
毎月22日刊行
製作：夜行

月刊NIGHTBUG 2010年7月号

Touhou Project
Wriggle Nightbug
Fan book
Not for sale

草加あおい
怒羅悪
豆板醤
猫屋敷
小崎
Salka
くろと
夏樹 真
社 蛍夜
壁々
如月翔
N I G A
貴キ
熾天使
残虐非道の貴公子
草葉
Step
クロツク
言示弄
羅外
ADDA
IDEA(GAGrim)
モフパカ
芥子川湊☆インパクト
蛍光流動
東
斑
焚；
夜行
イリイチ
キッカ
くらげん
ひどぅん
ぽこ
秋水
千C（夜騎士）